

---

# 【ソードハンターズ】

フリル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【ソードハンターズ】

### 【Nコード】

N3623N

### 【作者名】

フリル

### 【あらすじ】

これは、ゲノム王国の王エリオールが亡くなって数年後のアグネシア大陸の話し

## 【旅立ち他突然に】

五神帝龍を封印してから3年後：エリオールの代わりとしてゲノム国王に即位したアルジス・ゲーニルは、今までエリオールの培ってきた全てを切り捨て、独裁政治を確立させていく。初めは国王に即位後に徐々に専横が激しくなっていくアルジスに対し聖騎士団を中心に国民の全てが反対を示していたが、アルジスは財の全てを行使して国民や兵士達から賛成票を買い取って法案を成立させていく。次第にアルジスの巧妙な政策は国民からジワジワと反対する権利を剥奪していき、ついにゲノム王国はアルジスの取り巻きの貴族とアルジスによる絶対王政国家となってゲノム帝国として改名された。

皇帝となったアルジスは見せしめに国民からの絶大な支持を後盾に何かと諫言をする聖騎士団団長フリルにいわれのない罪を着せて指名手配する…これに対して昨日まで自分を慕っていたが軍令のためにシブシブと剣を向ける同胞を殺すことを是としないフリルは全権を副騎士団長グリフォードに託し、姿を消す。フリルを欠く聖騎士団を必死にまとめ上げてアルジスの圧政へと立ち向かうグリフォードだがアルジスの陰謀で一人…また一人と団員は追放されて追い込まれていく。そしてついにアルジスは聖騎士団を中心とした反対勢力を抑え込んで自身の絶対王政を盤石のものとする政策を執行する。その内容は力あるものの追放…レイブン能力者や魔法使い、魔族等の力ある者を人外として迫害するという非情極まりない政策だった。その手始めとして、選ばれた対象は聖騎士団員の一人、マリアの故郷であるウィプル村であった。ゲノム帝国はウィプル村に5000の精兵を動員。魔女狩りと称した一方的な虐殺を始めた…

ウィプル村が全滅を余儀なくされたその時、ついにゲノム帝国と戦うことを決めた聖騎士団率いる【反アルジス同盟】の精鋭が乱入。

ゲノム帝国の5000もの兵力をもの数分で撃退し、ウイプル村の生き残りを回収して姿を消した。同じ頃、ゲノム国内部でもゼリム率いる魔族区の住民が決起を起こす。ゼリムは魔族のみならずに迫害の対象となったレイブン能力を有した国民、現在の政治に反感を抱いた全ての民を連れウインホーバロンに脱出を謀り、レナス率いる竜騎士団はそれらを手引きして一緒に脱出をする。

周辺の国々ではまずこれに呼応するように宣言を行ったのがアレクセイの王マールだった。彼は激文を周辺国へと送り、その中でアルジスの罪を指摘してから文末には「建国の功労者であるフリル、ゼリム、レナスを罪人扱いし、国民を踏みにじり顧みることのない今のゲノムに正義は無い」と言いきって国交を断絶、ゲノムから逃げてきた民を難民として受け入れる政策を執行する。また、アルジスの非道を知りながらも資金欲しさにゲノム帝国についた国々もマールの激文を受けてついにゲノム帝国の傘下からの脱退を決意する。さらには今まで幾多にわたり貿易を行っていた都会の大統領【アル・フロル】は「フリルを指名手配するようなアホにやるものは一切無い」とし、都会側の技術は一切使用出来なくなった。この物語はそれから2年の歳月が過ぎたある日の小さな村から始まる。

【バアカヤロオアオ!!】

一軒のドーム状の建物の中から龍が如き咆哮と共に木造りの椅子が窓ガラスをぶち破って外へ投げ出される。

「ぜえ! : : ぜえ!」

中では二人の男性がなにやら争っていた。一人は褐色の筋肉質な見事な肉体を持った大柄の男、「自分は過去にアグネシア最強といわれた聖騎士団隊長: : フリル・フロルと互角に殴りあった」と自慢話

しが得意な【ダット・ヴァレンタイン】は息を荒げて怒りを露にしていた。その目線には右の頬を赤く腫れさせた少年が尻餅を着き反抗的な目を父親であるダットに向けていた。この少年こそ、この物語の主人公【リット・ヴァレンタイン】である。

「つてえな！つか椅子投げんな！！！」

リットは勢い良く立ち上がり、ダットは腕を組む。

「椅子を投げたくなるさ！！てめえ！さっきほざいた言葉をもっぺん言ってみやがれ！！！」

ダットは鬼もかくやという殺意をリットにぶつけ、リットはその余りの威圧感に尻込みしそうになるも手に力を込めて睨み返す。

「だから！！【フィル】が世界中を旅してお宝さがすつつうから！世界中の鍛冶屋見て修行しに行きてえって言ったんだよ！！！」

「バカヤロオウオウア！！！」

再びダットは手近な椅子をリットに投げつけ、リットはそれを身を低くしてよけると椅子が頭上を通り過ぎて窓の外へと向かう。

「てめえがフリルちゃん位強かったら話はべつだがな！！レイブンもまともに扱えねえようなヒヨッコじゃあ出ても死ぬだけ！！てめえ一人死ぬなら構わねえが、それにフィルちゃんを巻き込むんじゃないねえよ！」

「ちげえ！オレが巻き込まれたんだ！」

「るっせえ！！大反対だ！！」

すると入り口が開かれ、既にブームは過ぎ去った都会スタイルの少女が入ってくる。少女は短いながらも綺麗な黒髪を後ろで束ね、特徴的な角のような髪が一本だけ反り返って立っている。

「相変わらず荒れてますね〜…」

少女、頭の角のような髪をヒラヒラと揺らしながら我がもの顔で入ってくる。

「いや！このバカ息子なんかで今のご時世を生き抜くとは思わな  
いもんでしてね！ラグナスの嬢さん」

「フィルでいいです」

フィルは含み笑いを漏らしながらリットに目を向ける。

「何しに来たんだよ…」

すぐさまそれを見てリットは顔をしかめる。

「多分待ち合わせに遅刻するかと思ってさ」

フィルに言われてリットは慌てて自宅の時計に目を向ける。

「まだ一時間以上あるぜ？」

リットがフィルにそうを突っ込むと、フィルは肩を揺らして笑う。

「あはは、そうだったけ？まあ堅いことは気にしないっ」

その能天気な笑い顔をみてリットは大きなため息を吐いた。

「…てな訳だオヤジ、剣くれ」

ダットは未だ得心いかぬように心底から嫌そうにしながら、台所の壁に掲げてある一振りの剣をリットに投げつける。

「バカ息子が…ラグナスの嬢さんに迷惑をかけんじゃねえぞ？」

「お！…」

リットは剣を受け取り、鞘から剣身を抜くとその刃をみて溜息をつく。柄と鞘は年代を感じさせるものの大切に保存されていたことは解るもその刀身は全くの駄作とみてとれる。

「オレが鍛冶屋はじめて最初に打った奴だ、切れ味も高度もなまくら以下だぜ…」

ダットはそれ以外は何もやらんと眼で宣言し、リットはため息を吐きながら剣をズボンに吊す。

「じゃあダットさん、息子さん借りていきま〜っす」

「じゃあなオヤジ」

台所に一人残されたダットは大きなため息を吐き出して窓を見る。

「たく…バカ息子が」

リットに住む村は龍の山の中腹にあり、リットとフィルはひたすら  
続く下り道にいた。

「よかつたの？」

隣に並んだフィルが声を掛けた。静かにリットは頷く。

「ああ？なにがだ？そんなことよりも、まず俺達はどこに行くんだ  
よ」

切り出したリットに対してフィルは腕を組んで

「うーん…まずは、お宝の情報収集よね」

「アテはなにもなし…か。ったく…それ以外に道はねえといえね  
えな」

リットもつられて腕を組むと、フィルは相槌をうつように頷く。

「じゃあ、まずはゲノム帝国ね」

にこやかに笑って、フィルはとんでもない事を言い出した。

「ぶー！ゲノム帝国！？」

ゲノム帝国はアグネシア全体を領土にした莫大な中心国、確かにお

宝の情報は掴めるかもしれないしひょっとしたらお宝自体を手にいれられるかもしれない。だが、現在はレイブン使いや魔物は中に入れて貰えず、中で万が一見つかりでもしたらその日には処刑台に登らされる。

「正気か？」

リットの問いかけにフィルは大きく頷く。

「大真面目よ？」

「はあ…俺長生きできねえな…」

「何をいつているのよ？命もお宝もまとめて全部私のものよっ！」

「俺の分は？」

「そんなものなし！あんたは家事の技術を見て回りたいんでしょ？」

「ちげえ！鍛冶だ！」

「あはは、しってるわよ。ムキになっちゃって」

フィルは楽しそうにそういうと、リットは諦めたようにため息を吐いた。そんな掛け合いをしながら二人は龍の山を下り、更に南下していく。すると次第に大きな街並みが見えてくる。

「にしても…ホントにでかい街だよな…」

「その大半は空き家だけだね…」

フィルは何処か哀しそうな目をゲノム帝国に向けていた。

「ねえリット、なんで聖騎士団はゲノムと敵対したのかな…」

「さあな、フリルって人の事はさっぱりだけどよ…うちのオヤジがフリルって人の大ファンだからさ…そんな悪い人じゃねえだろ？代々ゲノム帝国は魔女狩りとか抜かしてウィプルに攻め込んだんだぜ？そりゃ嫌われて当然だな。俺は聖騎士団は寧ろ正義だと思うぜ？」

フィルはなにも言わず一瞬俯くと、直ぐに笑顔を取り戻してリットの手を引いてゲノム帝国へと向かった。

「リット！ちょっと酒場に行ってくるからその辺で待ってて！」

「わかった。この辺の武器屋と鍛冶屋を見てるからよ」

フィルに言われてリットは近くの武器屋に向かう。

いくら孤立した帝国といえど、ゲノムは他国を侵略して奪った武器生成の技術が豊富にあった。

「これは！！ゲノム王国で最強の聖騎士団隊長！フリル・フロルが使用していたというハルバード！！…さあ！本日最大のご奉仕だ！さあ！いくらでかうかい？」

武器屋の前で亭主らしき男がハルバードを片手に声を張り上げていた、リットは男を無視して店の剣を見つめる。

「随分鋼をケチった剣だな…」

リットは鍛冶屋で生まれ育っただけあり、武器や金属の知識や目利きには自信があった。そのリットの一言に亭主らしき男は慌てる。

「お！…お客さん…へんな言いがかりは…」

しかしリットは聞いていない。目の前に置かれたナイフを手にとり、自分の指先に刃を当て小さく引く…薄皮に傷が付くどころか刃が粗すぎるため傷すらつかない。

「これで40ギルダ―かよ…原価からすりゃ2ギルダ―にもなんねえよ…」

リットはため息混じりに吐き捨ててナイフを戻す。

「おう、小僧…」

亭主らしき男が店の商品にケチを付けられたのが腹立たしいのか、リットの肩を掴み振り向かせる。

「なんだよ…」

リットは面倒そうに頬をかく。

「てめえ、いま買うつつたよな？」

これがこいつの売り方か…リットは嫌気がさした。

「買わねえよ…こんな屑鉄みてえな剣…」

リットは男の手を片手で払い、さっさと店をあとにし、亭主らしい男はリットを見送りながら地面に唾を吐き捨てた。リットは酒場を探していると、酒場らしき建物の前に大きな人だかりが出来ていた。リットは人だかりの中に潜り込み中を伺う。どうやらこの店は摘発を受けたらしい、髭面の痩せこけた男が「おれはなにもしてねえ！」と叫びながら運ばれて行く。

「離せ!!!こら離せつてばああ!!!」

リットは目を疑った。フィルが両脇をゲノム帝国の鎧を着た騎士に抱えられて出てきた。偶然にもフィルとリットは目を合わせる。

「助けてリットー!!!」

フィルの叫び、一斉にリットは回りの注目を浴び、肩を後ろから叩かれる。

「キミは彼女の仲間かい？、少し詳しい話がききたいのだが…」

騎士がそこにいた。

「入ってる!!!」

場所は変わってゲノム城の独房、リットは男に突き飛ばされて牢屋に入れられ鉤を掛けられる。

「ちょー！おれは何にもしてねえって！！」

リットは声の限り叫ぶが兵隊達はニヤニヤしながら誰が誰を処刑するかを決めていた。

「なーにを言ってもむだだって」

そんなリットの後ろから若い女の子の音が響く。リットが後ろを振り向くと、そこには燃えるように赤く長い髪に灼眼の女の子が胡坐をかいて座っていた。

「むだ？」

リットは首を傾げると女の子は頷く。

「あたしアヤカ、君は？」

アヤカはニヘラとこの場に不釣り合いな余裕たっぷりな笑みを向けて手をだすと、リットはその手をあっけにとられながら握り返す。

「リットだ」

「リットね、よろしく」

緊張感の欠片も見当たらないアヤカにリットが毒気ぬかれて自己紹介をしようとしたその時、兵隊が新たに一人を連れてやってきた。連れてこられたのはリットもよく知る幼馴染、フィルだった。

「入ってる!!」

フィルは殴られたのか右頬が赤く腫れている。

「いつつ〜…」

「大丈夫か？」

リットは手を貸してフィルの身体を起こす。

「あちゃ〜、殴られたの？いたそ〜…」

アヤカが呑気な事をいい、フィルはリットを睨む。

「…誰なの？」

リットはアヤカを見る。

「アヤカよ」

アヤカはそう言ってフィルに笑い掛け、フィルは不可解そうな表情崩さず不機嫌そうに頷いて一言だけ返す。

「フィルよ」

するとアヤカはそんなフィルの不機嫌などどこ吹く風というように呑気に

「リットとフィルはさ、なんで入れられたの？」

と不思議そうに呟いた。

「そうだフィル、お前何やらかしたんだ？」

リットは気になってフィルを見る。

「知らないよ、いきなり店が不法だから全員逮捕って言われてさ……」

「それだけ？……」

リットに聞かれてフィルは頷き、アヤカはため息を吐いてダルそうに壁に背中をつける。

「まあたそんなくならぬ理由で処刑するのね……ホント……この国の王様は頭が腐つてるわね……」

アヤカは吐き捨てるように呟いた。

「そついや、アヤカはなんで捕まったの？」

フィルに聞かれてアヤカは答えつらそうな表情をする。

「あたしはレイブン使いだから……」

アヤカはとても辛そうに吐き出し、リットとフィルは顔を見合わせる。

ゲノム帝国は毎週の終わりに罪人やレイブン能力者を公開で処刑する。運が悪い事にその日は翌日に迫っていた。

「…食事…」

夜、独房に小さな少女が食事を持ってきた。顔には殴られたかのような字がいくつも出来ており、見ているだけで痛々しかった。

「ありがとう」

アヤカは白髪の少女から料理を受け取ると、少女は無表情のまま帰って行った。

「おいこら人形！」

「……………」

「なんだその眼はあ！？俺達を誰だと思ってやがる！！！？ああん！？こりやまた…お仕置きが必要だなあ！！ええ！？」

男の罵声と打撃音が響き渡る。先程の少女が暴行を受けているのだろう。

「ひでえ奴ら…」

リットは小さく漏らしフィルも頷く。

「仕方ないのよ、まあ…ああいうクズにはいつか罰が当たるんだから…いいわよ」

アヤカは苛立ちを隠さずにスープをさっさと平らげ、その器の中から鍵を取り出す。

「……」

リットとフィルは同時にアヤカを見る。

「ま、派手にいきましょ?」

アヤカは愉快そうな笑みを浮かべていた。

深夜：アヤカは静かに牢屋の鍵を開け、忍び足で眠る兵士の喉元にナイフを突き立てる。

「うー……」

兵士は一言つめき声を挙げて倒れ、動かなくなった。

「フィル、リット…手伝って」

アヤカは次々に鍵を取ればリットとフィルに渡していく。

「みんなで逃げるの?」

フィルに言われてアヤカは頷く。

「当たり前でしょ?ここにいる人達は罪なんて侵してないんだから」

アヤカが鍵を渡し終えると、独房に先程の白い少女がやってくる。

「フィフさん…平気?」

フィフはアヤカを見上げると小さく頷く。

「平気…見張りも…片付けた…」

「フィフさん…」

アヤカは何か複雑そうな顔をする。しかしフィフは食事を入れる筈のトレイカートに山ほど武器を乗せていた。

「フィフさん…まさか!」

「見張りは皆、片付けた…一人の漏れもない…裏門の畏も…解除しておいた…」

フィフはアヤカに背を向ける。

「早く…行って」

「フィフさんは?」

フィフはアヤカに振り向くと、小さく首を横に振る。

「ここに残る…」

「ダメよ!!!フィフさん…殺されちゃう!」

「王様との約束だから…」

ファイフは断固として引こうとはせず、アヤカも必死でファイフを説得しようとする。そんなやり取りを続けている間にリットとフィルはファイフにおそわったルートで解放した囚人達を裏門から逃がし、次はアヤカ、リット、フィルの三人の番となった。

「んじゃ…行くか…」

そう言ってリットはいきなりファイフを肩に担ぎ上げて走りだす。

「あの…?!」

ファイフは驚いたようにリットを見おろす。

「降ろしなさい」

ファイフに小さく言われてもリットは降ろそうとはしない。

「俺、あんたをここに残らせたら後悔しそうだから…」

「ですが私は…」

「いいじゃんファイフさん！」

アヤカはファイフの言葉を遮るように話しかけると笑顔を投げ掛け、ファイフは悪いことを見つけた子供のようにはつが悪そうに目を反らす。

「ファイフちゃん、あんたは俺達を助けてくれた。それだけだ…」

しかしリットの思いとは裏腹に、フィフはリットの肩に手を置いて力を込める。

「私は、王様と約束した…この国を頼まれた…だから…」

フィフは今にも泣き出してしまいそうな勢いで懇願するように叫ぶ…しかしアヤカは首をよこに振る。

「エリオール様は国を託した、でもあなたが傷つくことは望んでない！お母さんから聞いたよ？、あの戦いするときエリオール様はあなたが傷つく事がいやだから、自分の手で守りたいから、最前線にでただつて。だから…フィフさん！！…本当に【今のこの国】がエリオール様が貴女に守ってほしいって頼んだ国？…良く考えて！！」

「……………」

フィフは小さく頷き、リットの肩を叩く。

「？」

「自分で走れる…」

後ろの灯りを見つめながらもリットから降りて走りだす。

「…フィフさん」

「王様の国…必ず取り返す…」

フィフは信念ある眼差しで一つ目の門を潜り、リットやフィルやアヤカを送り出すと扉を閉め。

「第三門・独自に罠発動、以後の支持は私のみに従う…」

フィフは門の罠を起動させて門を閉じてリット達のあとを追い掛ける。

「何を？」

アヤカが首を傾げ、フィフは無表情のまま。

「罠を起動した、時間稼ぎになる」

案の定、裏門の仕組みを知るものなどおらず、ゲノム王国の兵士たちは第三の門に足止めされており、そのすきに三人は裏門を抜けて森に入る。するとそこでは捕まっていた人々が待っていた。

20

「で？これからどうする？」

その他の元・囚人の皆と合流して一息つくとしリットは親父の剣を腰に提げつつ呟く。

「ん〜…」

アヤカは武器もなく腕を組み、フィフを見る。

「わたしはこの人たちを連れて、ウィンホーバロンに向かいます」

フィフは無表情を崩さずにつぶやき、アヤカも同じように相槌を打つ。するとフィルは何やら悪戯を計画する子供の笑顔を浮かべ

「じゃあ、わたしとリットは行くわ」

「は？…どこにだよ」

訳分からずポカンとするリットにフィルは口をニヤリと歪めて言う。

「捕まる前に面白い情報を貰ったのよ、ここは…確か【龍の森】よね？」

フィルはアヤカを見ると、アヤカは首を傾げながらも頷く。

「この森を抜けて北西に…騎士達の墓場って場所があるのよね」

「騎士達の墓場？…」

フィルは小さく頷く。

「なら、行くか」

リットはフィルの思惑を察したように頷き返す。

「じゃ、ありがとうな」

「会えたらまた…」

そうして二人はフィフとアヤカ達と別れて森の奥へと消えてゆく。

「トレハンか…たのしそうだな…」

アヤカが二人を遠目に見ながら呟くと、アヤカの服をフィフが引く。

「どうかしました？」

フィフはアヤカを見上げ、口元を吊り上げ、ぎこちなく微笑んだ。

「…護衛はわたしだけでいい…」

アヤカは目を丸くする。

「それに…」

フィフは後ろを振り替えると、独房にいた人々をみる。彼らは騎士から奪った武器で武装し、不適に笑っていた。

「忘れてねえか？、俺達はレイブン能力者なんだぜ？」

彼らはレイブン能力者…確かに特殊な武術の稽古などなくとも武装した普通の兵士の一人や二人など対した脅威ではない。そしてフモウ一度フィフはアヤカを見上げる。

「大丈夫…」

フィフに言われてようやくアヤカは笑う。

「うん、わかった!」

そう言うとアヤカは笑顔で手を振りながら二人の後を走っていった。

「まってー!!」

アヤカは直ぐに二人を見つけ、リットとフィルは同時に振り返る。

「なによ、まだなにか?」

フィルは何故か不満そうな表情を浮かべる。

「あたしも一緒に行つてい!?!」

アヤカの一言にリットは目を丸くし、フィルはしかめっ面する。

「大却下!!!」

フィルは大声で怒鳴る。

「そうか?、俺はいいと思うぜ?」

リットはアヤカの手並みをかなり出来る…と思っていた。彼女はレイブン能力者であるにも関わらず、レイブンを一切使用せずに兵士たちをバタバタと倒していたからである。恐らくあの牢も出ようと思えばいつでも出られたであろうし捕まるまいとすれば捕まらないようにもできたであろう…捕まった経緯やなぜ逃げなかったのかということは彼女なりの理由があるのだろうか。

「だって、レイブン使いよ?」

「俺もお前もそうだろ…」

リットに言われてフィルは諦めたようにガクリとうなだれる。リットはフィルを無視してアヤカの前に行く。

「まあ、なんかの縁だし…宜しくなアヤカ」

差し出されたリットの手をアヤカは両手で握りしめて笑顔を溢す。アヤカは女性に感心の少ないリットですら魅かれる程に可愛らしかった。

「……」

「いつまで握って、なに鼻の下のばしてんのよ!」

不機嫌度MAXのフィルに裏拳で叩き飛ばされてリットは地面に転がり、フィルは力いっぱいアヤカの手を握る。

「宜しく…」

「?、うん、よろしく…」

アヤカは対して動揺もせずフィルの手を離す。

「でもさ、来るのはいいけど…」

フィルはアヤカを下から上まで見上げる。アヤカは服以外なにも身につけてはいなかった。

「あんだ武器は？」

「ないよ？」

「即答！？」

「だってあたし、武器なんかもって来てないし」

フィルは握り拳を作る。

「じゃあお金は？、身の回りの衣服とかは？」

「うーん…」

アヤカは小さなポケットから端末を取り出し、ピコピコと音を鳴らす。

「あー…お金、プロダクションから降りてないわ、換えの服は舞台衣装があるね〜」

「舐めてんのか！…!!」

フィルは素早くアヤカに殴りかかる、しかしアヤカは携帯をみながら、身を左に反らしてフィルの足首に足を引っ掛ける。

「うわあー！」

フィルは前のめりに地面に倒れる。

「まあ…その辺はなんとかなるわよ…」

アヤカは携帯端末をポケットにしまい、倒れたフィルを引き上げる。

「でも…どうやらその前に…」

アヤカの雰囲気は変わり、リットも立ち上がる。

「見つけたぞ…」

背後から声がかげられる、リット達が振り向くと、すぐそこには10人の鎧を着た男達が立っていた。

「貴様らだけか?…」

兵士達の隊長らしき男は剣を抜きながら呟く。

「はあ…あの罫を突破出来たのはそれだけ?あんた達…自分の城でしょ?…なっさけないわねえ…」

アヤカは手をパンパンと叩いて軽くフットワークを刻む。

「ふん、子供三人くらい我らで十分よ。もつとも…あの人形がきさまらを手引きし、裏切るとは思わなかったがな…」

隊長につられて他の10人も一斉に剣を引き抜く。

「ふん…くっだらない、リット!フィル!」

リットは既に抜刀しており、フィルは不満そうにむくれていた…そして三人は同時に駆け出す。

「おおおー!!」

隊長らしき男は真つ先にアヤカへと突進するが、アヤカはそのわきに周りこむと素早く腰に提げていた短剣を奪い、引き抜く。

「ぬ?」

隊長らしき男はアヤカに気を取られ、その隙にリットに鎧ごと背中を切り裂かれて倒れる。

「リット!!!左!!」

フィルがリットに叫ぶとリットはすぐさま振り向いて、左から降り注ぐ剣を手に持つ剣で受け止め、弾き、そして振り下ろす。

【斬】 リットの剣は一撃で男の胸を切り裂き、斬られた男は後退りしながら倒れ、動かなくなる。

アヤカが素早く間合いを詰めて剣を振り上げた敵の喉元にナイフを突き出すと、ナイフは鎧の隙間を的確に捉えて男の喉元を貫き、

「いやっ!!」

男の落とした剣を奪うと気声一声でレイブンを込めて投げ 投げられた剣は回転しながら一人二人と切り裂きながらアヤカの周りをグルグルまわる。

「くー!レイブンか!...」

一人は素早く洞察して戦況を見渡す、目の前には武器を持たない少女【フィル】がいた。

「ん…やばっ！」

フィルが目を丸くして後退りすれば、男は一目散に彼女めがけて駆け出す。

「貴様からだ！！」

リットがそれを見て叫ぶ。

「アヤカ！！レイブンを纏った剣をフィルに当てろ！！」

「へ！？だってそんな事したら…」

「いいから…俺を信じろ！！」

リットはそう叫びながら目の前にいる兵士の腹を袈裟に切り払う。

【バキィ】 その瞬間リットの剣が中程から折れ、リットは自分の目の前の兵士に集中せざるを得なくなる。

「ああ！もう！！」

アヤカはやけくそ気味に、フィルの身体にレイブンを回る剣をフィルに男が襲いかかるよりも早くぶちあてる。

【キュイン！】—一撃で兵士を鎧ごと切り裂くレイブンを込めた剣は見事に弾かれ、目の前にいた兵士の喉元に突き刺さる。

「サンキュー！」

フィルはいいながら、新たに向かってくる兵士へと向かう。

「返り討ちだ！！」

そう言つて兵士が剣を振り上げるとフィルはそのすきに懐に潜り込み、

「！」

「ちよん！」

フィルが兵士に触るや否や、兵士は身体中から血液を吹き出しながら飛んでいく。

「相変わらずえげつねえな……」

リットは苦笑しながらも剣を投げ捨て。

「ほう？ 投降か？ 武器を捨てたな？」

「いや？」

ニヤリと己の優位を確信して笑う兵士を後目にリットは地面に手を当てて砂を掴み取る。

「武器なら【有るぜ】？」

不敵に笑うリットは両手にレイブンを込め、

「【我が命を受け、形をなせ・砂剣】」

たちまちが指から漏れてリットの手には砂でできた剣が握られる。

それを正眼に構えて相手を睨みつけると、睨まれた兵士は僅かに動揺したように叫ぶ。

「砂の剣：しかし我が剣は魔法を断ち切る魔除けを持つ：貴様の剣など！話にならぬわああ！！！」

リットが素早く駆け出すと、兵士は自称魔除けの剣を頭上に振り上げる。

「へえ！なら打ち合ってみつか！！？」

リットと兵士はそのまま激しく打ち合い、

「【漠流閃】！」

「むだだー！！！」

勢いよく斬り掛かる二組は互いに剣を振り上げて振り下ろす。

【ドオン！】 何合目に振り下ろしたリットの剣が相手の剣を跳ね飛ばし。

「！？」

リットの砂の剣はそのまま男の体を袈裟に切り裂き、男の上半身は

綺麗に無くなって吹き飛んだ。

「く……っ、つよい……」

「引け！！引け引け！！」

生き残ったゲノムの兵士達は血相をかいて逃亡していく。

「やるじゃんリット君！」

アヤカが背後から走ってきてリットの背中をたたく。

「……」

リットは返事をしない、手に握られた剣が地面に落ちて砂に変わり。リットが倒れそうになるところをフィルが支える。

「リットはこの力を使うと疲労で寝ちゃっの……」

フィルは苦笑して眠りこけるリットに肩を貸して立たせ、アヤカを見る。アヤカも苦笑し、フィルの反対側からリットに肩を貸す。

「急ごう」

「うん！」

アヤカとフィルはリットを担ぎ、龍の森の奥から北西に抜け、森の奥へと消えていった。

## 【騎士達の墓場】（前書き）

ファイフの協力を得てゲノム帝国から無事に脱出したリット達は、新たにアヤカを仲間に加え、ゲノム帝国の追撃を振り切りつつ、ファイフが手に入れた情報でもある騎士達の墓場と呼ばれる平原を目指していた。

## 【騎士達の墓場】

「たく…ひつでえな…」

…そう思わずリットがつぶやいたのは龍の森の北西に位置する集落の跡地だった。ファイフ達と解れた後に龍の森を抜けたのだが、開けたところに出たと思ったならそこは沢山の白骨した死体が放置されている廃墟だった。アヤカは悔しそうに唇を噛みしめてしゃがみこむと一つの白骨の頭蓋に突き刺さる見なれた紋章のついた剣をみて

「ゲノム帝国の攻撃にやられたのね…」

燃えるような赤く長い髪を振り乱して嘆き、白骨の頭を撫でる。

「…ごめんなさい…」

そこに崩れた集落の中から美しい黒髪を短髪に結んだ少女、フィルが剣やら鎧やらを身に纏って現れた

「ねえ！リット！！剣みつけたー！！」

そう言つてフィルは目を爛々と輝かせてリットに剣を投げる。

「あぶねえっ！」

リットはフィルに怒鳴りながら鞘に収まったままの剣を受け取り、鞘から剣を少し抜いて太陽にかざす。

「へー…珍しい」

リットは陽光を受けて反射する波紋状の刃を見ると、剣を抜き放つ。

「クリスだな、打つよりも切るに特化した剣だ。硬度は悪いが……」

「はい！リット先生！」

「ああ？…先生？…ってなんだ？」

片手を上げたフィルにリットはポカーンと答える

「剣の説明はともかく…それは珍しいってことはすっごく…高く売れるの？」

フィルは不思議な踊りを踊りながら、足の踏み場のない瓦礫の中を飛び跳ねてリットに歩み寄る。

「おまえな…こういう場所なんだぜ？もつと死者を敬えってんだ」

「死者を敬ってるからトレハン稼業が出来るんでしょ！が！どうせ貰い手もないんだからさ…で？高いの？」

フィルはワクワクと期待に目を輝かせて飛び跳ねる。

「20ギルダーかな…ただ整備を受けずに放置されてっから錆がひどい…商品としての価値は薄いな…」

リットに言われてフィルはしかめっ面になる。

「なーんだ、じゃ、あんたにそれあげるっ」

「ちょ！…んまあいいか…」

前回の戦いで武器をなくしたリットとしては丁度よかった。

「はれ？、アヤカつちは？」

フィルはそういって顔を左右に向け見回す。

「さあな、便所じゃ…ごは！」

そう言いかけ、フィルに殴り飛ばされる。

「いってえな！」

「このスケベ！！」

フィルは何故か癩癩を起こしている。リットは尻餅を着いて殴られた頬を差すつて首を傾げていた。

「なに、夫婦ゲンカ？」

すると集落の中からアヤカが出てきて携帯をポケットに入れる。

「ふ！夫婦じゃ…」

なぜか真っ赤になって口籠もるフィル、リットは立ち上がり更に首を傾げる。アヤカはそれを見て意味ありげにニヤニヤする。

「何してたんだ？」

「電話、フィフさん達は追撃を振り切って国境抜けたってさ」

アヤカは嬉しそうに言いながら剣やら鎧やらを体中にくくりつけた  
フィルの格好を見つめる。

「なにそれ、遺留品？」

フィルは頷く。

「そうよ、きつと値打ちものだわ！」

フィルは嬉しそうな笑顔を向けて胸を張る。

「でも…この集落は堕ちて大分経ってるみたいだからね…身体に  
膿や腐敗した肉なんかも付着してたんじゃない？…まあ、【疫病】  
にならなきゃいいけど」

アヤカは敢えて疫病を強調し、フィルを見る。フィルは瞬く間に顔  
を真っ青にすると、慌て鎧を脱ぎ捨てて服を叩き、アヤカはそんな  
フィルを見て腹を抱えて笑う。

「まじ受けるわ…」

「あんまフィルいじめんなよ？、後で俺が困るんだから」

「わかってるわよ。旦那様は大変ね？」

「旦那様って！」「」

思わずハモった二人に対してアヤカはクスクスと目に涙を浮かべながら頷き、フィルがそんなアヤカ（というかなぜか主にリット）に憎悪の念がこもっていそうな目を向けていたのでリットはそれ以上何も言わなかった。

「んじゃ、行くか…」

リットはそうついいながら、村の出口を目指す。

「え？、ここで休まないの？」

フィルがいいながら後ろを付いてくる。

「ゲノム帝国の連中があたしらの搜索を諦めるとは思えない…あたしもここで寝るのは嫌ね」

アヤカはそんなことも解らないの？とも言いたげな顔でバカにしたように言い、フィルは唇を尖らせる。

「そ！そんなことわかってるもん！」

顔を真っ赤にしてプリプリするフィルはそれなりにかわいい。

「フィルって盗賊の癖にホントその辺無知だよな」

歩きながらリットも追い打ちをかける。

「む！！むむっ無知じゃないわよっ！」

「フィルって盗賊なの？」

アヤカは空気を読まない。フィルは一瞬空白の間を置いて一度頷く。

「うん、あたしのお父さんが盗賊団の団長なの」

「お父さん？、名前は？」

真剣にアヤカに聞かれ、フィルは首を傾げる。

「ゼン・ラグナス…」

アヤカは驚いて一瞬目を見開くも、すぐに普段の表情に戻る。

「…ラグナスの令嬢…か…」

「？」

アヤカは小さく呟き、笑顔に戻った。

三人はその日は洞窟で1日を過ごす事にした。追手を警戒しながら入り口を草木で隠蔽し、小さな火を起こす。

「明日は早いから…わたしは寝るね…」

フィルはそういつと膝を丸めて寝転ぶ。

「おう、お休み」

「うん、お休み」

フィルはゆっくり瞼を閉じ、リットはレイブンでクリスの鉄を起こして錆び落としを始める。これがリットの本来の能力、剣に対しての金属の本来の力を発揮させる…だからリットは剣が無ければ一般人とそうは変わらない。

「変わった能力…」

アヤカは焚き火を見ながらつぶやく。

「…そろそろなにを嗅ぎ回ってるのか、教えてくれないか？」

リットはそういってアヤカを睨み付け、当のアヤカはシレと首をかしげる。

「…何のこと？」

「とぼけんな」

リットはクリスの錆を落とすと、アヤカにその剣先を向ける。

「…言わなきゃだめ？」

アヤカは諦めたかのように首を傾げる。

「俺たちの身…いや…フィルの身に危険があるのなら…」

わずかに纏う空気が変わったリットを見てアヤカは首を横に振る。

「それも秘密…っていいたいけれど、その目…本気ね。それだけはないよ、あの子に危険は及ばない。けれど今はこれだけしか言えない」

「そうか、なら聞かない」

リットはクリスを鞘に戻して横になる、そしていつものもののほんとした雰囲気に戻る。

「聞かなくていいの？」

少し驚いて語りかけるアヤカにリットは顔を向ける。

「聞いて欲しいのかよ？」

「いや…そんなに簡単にこないだ会っただけのあたしを信用してくれるのかなって…驚いたわ」

「普通ならしないな」

リットはきっぱり切る。

「ただ、俺は普通じゃないんだよ…3時間寝る」

リットはそうして目を閉じる。するとアヤカも

「は…い…クス」

ニッコリと小さな笑みを浮かべてから座ったまま目を閉じた。

翌日…。

「腰いたい…」

まだまだ続く森の道、アヤカはここに来て初の愚痴を漏らした。

「貧弱ね…アヤカは」

何やら勝ち誇ったようなフィルが胸をはって言う。

「だってあたし都会じゃアイドルよ？」

アヤカはで訳のわからないといった顔で首をかしげて頬を膨らます。

「は？？アイドルってなに？食べ物？」

「いつの人間よ…あんた」

後ろでそんな少女達の会話を聞いてリットは思わず苦笑する。

「アヤカは都会の人間なのか？」

リットに言われてアヤカは首を横に振る。

「違うわよ？あたしは生まれも育ちもこっち。お母さんのお兄さんがスツゴい偉い人でさ、あたしを芸能事務所にいれてくれたの。ん

で、まあ…すぐさまアイドルとして花開いたわけなんだけど今は【代わり】の子に仕事してもらって、こっちに来てる訳…凄いでしょ？」

そう言っつてアヤカが意味ありげにウインクするもリットもフィルもキョトンとした顔をして首を傾げる。

「はあ…だから田舎っぺは…」

アヤカがため息をついて頂垂れるとリットはフィルへと視線を戻し

「ま、いいか…フィル？」

「ちよっ！あたしスルー!？」

「だって都会はわからねえし…」

全くの無理解にアヤカは本日二度目の深い深いため息をつくのだった。『アヤカは【自称アイドル】の称号を手に入れた』

「で？、何よリット」

そんなアヤカを捨て置きフィルは話を再開する。

「戦士の墓場ってどんなところなんだ？」

リットに言われてフィルは首を傾げて肩をすくめる。

「知らない。話によると…見渡しのいい平原に、端から端まで剣がびっしり刺さってるんだって…なんでもだいたい昔の戦場らしいよ？」

「それっていつ頃の戦争なんだ？聖騎士団が関係してる辺りの年代の戦争か？」

「知らな〜い」

フィルは首を横に振る。

「アグネシア戦線は関係ないわ。多分、そこは【バックリア古戦場】じゃないかしら…」

元氣を取り戻したアヤカが話に加わる。

「【バックリア古戦場】？ナニソレ？」

リットとフィルは顔を見合わせて声を上げる。

「…あんた達…学校行つてたの？義務教育は？…確かゲノムにはあったはずだけど…」

アヤカはジト目を二人に向ける。

「俺の家は鍛冶屋だからな…生活に必要な事以外は教えてもらつてねえよ。確かに学校つてのはあつたけどよ、王都でもなければ子供だって赤ん坊じゃなきゃ何かしらの仕事はしてるもんだ。仕事もしないで学校に行つてられるのはよっぽどの金持ちくらいのもんだぜ？」

「わたしは盗賊の仲間元教師って人がいたから…その人からたま

に教えてもらってたよ?」

「要するに二人は…学校行ってないのよね?」

二人は当然、と誇らしげに頷く。

「まあまあ…学校で教わるお勉強はアヤカがちゃんと知ってるんでしょ?ならいゝじゃん」

「はあ…先が思いやられるわ…」

「で?、アヤカはバックリア古戦場はどんな場所って聞いてる訳?」

「あたしも詳しくは知らないよ?聖騎士団の人たちの実技授業以外は寝てたから…」

「…学校つてのは案外役に立たないわね…」

「うー!うっさいわね!」

わざとらしくため息ついて首を振るフィルにアヤカは顔を真っ赤にしてプリプリと怒る。

「まあまあ…ほら、よくわかんないが寝るのはいい事じゃないんじゃないか?体調もよくなるしだな」

そんな二人をなだめるかのようにフォロー(?)を入れるリット。

「ぐ…ぜんぜん慰めになつて…まあいいわ…オホン、バックリア古戦場は、今から1万年前に古代の人々が五つの首を持つ災厄と戦い、

撃退した時に使われた戦場らしいわよ」

気を取り直して説明するアヤカにリットはなにやら思い当たったように眉をひそめる。

「五つの首の災厄ってゲノムの王を殺した奴だろ？」

アヤカは少し淋しそうに頷く。

「うん、エリオール王子っていつてさ…バカみたいにお人好しでバカみたいに国民の事しか考えないひとでさ…なにをやるのも不器用だった…」

「詳しいんだな。でもその口ぶりだと知り合いみたいだけど？」

アヤカは大きく頷く。

「まあ…ちょっとね。エリオール王子が死ななければ、国は安泰…ファイフさんは一人にならなくてすんだのに…知ってる？、あのファイフさんはエリオール王子のたった一人の婚約者だったのよ？」

リットは納得したように数度頷く。

「ああ…ファイフさんの知り合いだもんな、アヤカは。それでファイフさんも通りで頑固に城から離れないってごねてたわけだ…そう思うと、悪い事をしちゃったのかもな…」

アヤカは首を横に振る。

「いえ、いいのよ。ファイフさんも変わってしまった城からは一度離

れたほうがいいって…わかっていたはずよ。でもできなかっただけ…  
…ファイフさんがエリオール様以外の人に動かされるの、初めてみた…  
…もしかしたらリットってかなり凄いことしたのかもよ？」

「ははは、ねーよ！」

二人でそんな穏やかな笑いを作り出しつつリットも満更でもない顔を浮かべて少しニヤける。しかしそんなリットの背後から撰氏マイナス零度の殺意が醸し出され…

「リット

リットが振り返ったときは既に遅かった。

デレデレするなああああああああ！！」

「ぎゃあああああ！」

ある意味理不尽にしてある意味お約束？の一撃と共に、龍の森に青年の声が響いた。

数日後、ついに龍の森をぬけた三人の眼前にはバツクリア古戦場が開けていた。

「ついた！」

ファイフが興奮したようすで森を飛び出し、背を伸ばす。そこは見渡

す程に広い草原、しかしただの草原ではない。生い茂る草と共に剣が突き刺さっている…それも一本や二本ではない…それは無数に、沢山に、草原をうめつくす程だった。

【ザアアア…】 時折吹く和らかな風が草原の草を揺らし、突き刺さる剣の間を吹き抜ける。夜のように静かなそこは、異世界のような雰囲気を漂わせていた。

「なんか…寂しいところだね…」

「ああ…この剣達は俺達を歓迎しちやいなえ…」

アヤカが小さく囁いて、リットは頷く。

「なあに格好つけてんのかな？リット！早く来なさい！！」

フィルはそんなリットの耳を掴み、引っ張って行く。

「痛いつて！、なんだよお前！」

「お前言うな！！！」

フィルはリットを無視して早速目の前の剣を抜く。

「リット！これなんかどう？」

リットはよつやく耳を解放されて耳をすりながらフィルを見やる

【我ノ眠リサマタゲシナラズモノニハサバキヲ…】

【それ】は静かに目を覚まし、自分の眠りを妨げた少女を睨んだ……  
しかし二人は全く気付く様子は無い

フィルが持っていたのは幅広い両刃の剣。刃渡りは長く二メートルはあり、持ち手は長く、鍔は左右に上向きに伸びていた。

「クレイモアかよ！」

リットは目を輝かせてフィルから剣を奪う。

「いいかフィル、この型は同じ型に鉄を流し込んで量産された剣なんだがな、その型はアグネシアにはもう無い……失われた技法なんだ、間違いなく！高いぜこれ！」

「うはは〜！さっすがわたし！幸先い〜」

フィルは満面の笑み、リットも笑みを溢す　まだ二人は周囲の異変に気付いてはいなかった。

「二人とも！！伏せて！！」

異変に気がついたアヤカが二人の方へと叫びながら走ってくる。

「？」

リットは同時に背後に気配を感じて振り返る。そこには巨大な人型

が それは今まで見たことのない甲冑を身にまとい、右手には四メートルはある大剣、左手には四メートルはある大盾を握っており 大剣を頭上に振り上げていた。

「フィル!!」

リットは素早くフィルに抱きついて地面に倒れこむ。

「ちよっ!!!リット?...いきなりこんなところだっ!!!」

状況をわかっていないフィルは顔を真っ赤にして暴れるもぽかぽかと力は入らず、そのままリットに抱き飛ばされる。

「でええええい!!」

そしてアヤカは声を張り上げ、甲冑の顔面に渾身のドロップキックをお見舞いする。

【ガイン】 しかしアヤカのキックでは甲冑はビクともしない、精々剣の軌道がブレて間髪でリット達から外れるのみ。そして甲冑は体をよじり、左手の大盾でアヤカを尻ぎ払う。

「きゃああ!!」

アヤカはまるで猫のように飛ばされ、地面に体を叩きつけられて転がる。幸いなのはアヤカが飛ばされた場所に剣が刺さっていないかった事だ。

「アヤカ!!」

「ちよつ!!!今度はアヤカ!?リット!?いい加減に……つて、ええええ?何よコイツ!？」

リットは立ち上がり、右の腰に差した鞘からクリスを抜いて甲冑に斬り掛かる。アヤカも抗議の声を上げながらリットの向かったほうを見ると甲冑を見つけて目を丸くする。

「おおお!」

【ガイイン!】 リットのレイヴンを纏わせた渾身の一撃は甲冑の胸板をバターのように切り裂き、甲冑は悲鳴を挙げながら胸の傷から白銀の液体を噴き出す。

『オオオオオ!』

三步後退りした甲冑は、その巨大すぎる右手の大剣を横殴りに振るう。

「ち!…なんなんだこいつ!」

リットは身を低く保ちながら間合いを詰め、大剣の横風ぎを頭上に抜けさせて突っ込む。

「だああ!」

そして甲冑の右腕を肘から切り上げようと波紋状の刃を走らせる。しかし…

【バキィイン!】 人肌や獣の皮膚を切り裂く為に作られたクリスは、本来鎧を切り裂くためには作られてはいない。『レイブンによ

「つて剣の性能を極限まで引き出した上にレイブンを纏わせた」とはいえ甲冑をそう何度も切り裂くことはできない。胸部よりもさらに分厚い肘に当たるとクリスは中程からバッキリと折れて柄だけが残った。

「…っ!」

思わず歯軋りをするリット。甲冑はその隙に再び剣を握る右腕を振り上げる。

「くっ、っぶっ…」

腹部を押さえながらアヤカは立ち上がり、間近の剣を掴んでレイブンを纏わせ、リットの前にいる甲冑にその剣を投げる。

「【魔弾よ!】」

アヤカに投げられた剣はブーメランのように回転しながら甲冑の顔面に激突し、甲冑は大きく仰け反って体制を崩す。

「アヤカ!?!、大丈夫なのか!」

「そいつは【ソードガーディアン】!この剣を守る為に配備された魔法兵器よ!」

ソードガーディアンは立ち上がる。

「魔法兵器ならあたしの反射も有効なんじゃない?」

フィルは先程のクレイモアをリットに渡す。

『グウウウウオオオオ!!!』

天を裂く程の雄叫びをあげてソードガーディアンは地面に突き刺さる数本の剣を手にとる。そしてすぐさま胃の中へと運び、ゴシヤ…ゴシヤ…と分解したような音と共に身体に受けた傷が塞がる。

「な…再生しやがった!」

リットはクレイモアを両手で構え、まっすぐにソードガーディアンを睨む。

「そりゃそうよ…これだけの場所を守るガーディアンよ?、その力は半端じゃないはず…」

アヤカは足を引きずるようにリットの脇に並ぶ。

「大丈夫か?…」

アヤカは苦笑いを浮かべて首を振る。

「…肋骨イツたかも…って言ったら守ってくれる?」

「いや…まあ、仲間がヤバイってなら守る。当然だろう?」

「ふうん…」

あぶら汗を浮かべながらも少しニヤけるアヤカと首を傾げる。

「なら動かない方がいいんじゃない?」

フィルが心配とジト目の入り混じったような眼差しを向けながら声をかける。アヤカはクスリと一笑した後甲冑へと向き直り、

「んな、場合じゃない！…手短に言っよ！リットはあいつにへばりついてこっちに来ないようにして！」

「任せな！」

リットは苦笑してからソードガードディアンに向かって走る。

「フィル！あなたは何でもいい、剣を私に渡すのと…魔力攻撃の盾になつて」

「ええ！？なんであたしが!？」

アヤカはそんなフィルの胸ぐらを掴んで引き寄せる。

「んな悠長な事言ってる場合!?!ここで死ぬのか働くかえらびなさいよ!?!」

アヤカはフィルを突飛ばし、手近にある剣を掴んで引き抜けば、ガードディアンめがけてブン投げる。アヤカの投げた剣は放物線状に上に飛んでいき、その頭へ降り注ぐ。

「おおおおお!?!?!」

合わせてリットが突貫する。

『おおおおお!?!?!』

するとガーディアンは一步身を引いてアヤカの攻撃を紙一重に避け、迫るリットに向かってタイミングを合わせて剣を横薙ぎに振るう。

「ちい!！」

リットはクレイモアーにレイヴンを纏わせ、上に向かって切り上げる事でガーディアンの一撃を上方にはねあげる。

【ピシ】 クレイモアーから嫌な音が響く。

「もってくれ!！」

リットは願いのように叫びながら振り上げた剣を頭上に構え、振り下ろす。

【斬】 クレイモアーの一撃により、甲冑の胸板は綺麗にバツサリと裂ける。

『おおおおお!!!!!』

ガーディアンは怯まず、大盾をリットに向かってぶん投げ、リットは体を転がして盾をよける。

「ち!?!?!なに!?!?!」

起き上がったリットの顔の前には既にガーディアンの足がある。

「っ!?!?!」

リットは咄嗟にクレイモアの刀身を盾にしてガーディアンを  
防ぐも、勢いに押されて吹き飛ぶ。

「リット!!」

アヤカは短い曲刀をガーディアンに向かって投げつければ、曲刀は  
まるで円盤のように回転しながらその胴体に迫る。

『おおおお!!!!』

ガーディアンは右腕の剣を振り上げ、向かって来た刀を弾き飛ばし、  
その瞳はアヤカを睨んで燃え上がる。

【ズビー!】 胃の奥に光る両目から放たれた光の刃が、アヤカの  
体を貫こうと迫る。

「さあせるかあ!!」

フィルが飛び出してアヤカとガーディアンの間を割って入れば、フ  
イルの身体に触れた光の刃はまるで鏡にでも映した時のように跳ね  
返り、ガーディアンの両目に突き刺さる。

『ウオオオオオオオン!!!!』

ガーディアンは両目を押さえながらたたたらを踏む。

「ぶっ倒れるおお!!!!」

そこにリットが気合い一閃、後ろに下がるガーディアンの胴体を上  
下に断ち切るように剣を走らせる。

【バキイーン！】 クレイモアの硬度が限界を超えて半分を斬り  
さいたところで中程から折れる。

「ち！」

ガーディアンはここぞとばかりに巨大な左手をリットに向かって叩  
きつける。

「うわぁ！」

リットは致命傷を避けるために自分から吹き飛ばされる。

「リットおー！」

アヤカは剣を掴もうとする、しかし既に周囲に剣は無い。

「っ！！」

「フィルっ！！！…だめっ！！！！」

「くるなっ！！！…バカッ！！！！」

フィルが次の瞬間リットの方へと走りだす。アヤカは目を見開いて  
叫び、リットはあわてて体制を整える。走り出したフィル目掛けて  
ガーディアンが右手を叩きつけようと振り上げ

「こんなところで…おわるかよおおー！！！」

リットは素早く手近な剣を手に取り、レイヴンを込めて振るう。剣

の特性など確認する余裕も無かった。いつもの『剣の限界を超えない為に』適切に特性を読み取り適量のレイブンを注ぎ込む、しかし今はそんなことはせずに剣にレイブンを流し込みながら思い切りガーディアンに叩きつける。ただひたすらにフィルへのガーディアンの攻撃を防ぐ為に…。

【カツ！！！】 リットが手にした剣からまばゆい輝きが迸り、遮二無二振るった一撃はガーディアンの腹部をまるでバター…否、紙を切り裂くように滑らかに切り裂いた。

「…こ…れは？」

【ブシャアアアア！】 同時にリットの前でソードガーディアンは地面に沈んで消えていく。

リットはただ呆然と自分の握った剣を見ていた。自らのレイブンを込めて剣の力を発揮しても、金属の限界をまるで感じさせない刀身、クレイモアークリスですら斬れなかつた鎧をいともたやすく切り裂いた切れ味。そのどれもが自らの父親が作った剣を遥かに超えていた…。その剣はどこまでもシンプルで、どこにでもありそうな持ち手をし、どこまでも安そうなデザインをしていた。

「お前…名前は？」

リットはそれだけ言うと、駆け寄る二人を視界の端に捕らえながら意識を失った。

「…リット！」「」

夜…リットが目を覚ますと空は夜空だった。

「あ、起きた…」

リットが声の方向に目を向けると、アヤカが下着姿に包帯だけという格好でいて、リットは思わず目を背ける。

「腹着る…」

「へ？、うん…」

アヤカは脱いでいた上着を羽織ると服を着はじめる。

「フィルは？」

「リット起きたの？」

フィルは沢山の剣を布に包んで持って来ていた。

「お前：またソードガーディアンに出くわしてもしらねえぞ？もう俺はあんなの簡便だからな？」

「出なかったから平気よ それよりリット！起きたなら目利きお願い！」

フィルはリットの上に布に入った沢山の剣をぶちまけ、リットは剣の中に埋もれながら次の行く先を考えていた。

【罪人達の鎮魂歌】（前書き）

ゲノム帝国のとある宿にその女の子はいた。共に復讐を誓った仲間たちと共に…その女の子の名前はリン、これから始まるもう一つの物語の主人公…

## 【罪人達の鎮魂歌】

寂れた小さな宿屋に女の子はいた。女の子は一人窓際の机に向かい、自分の物であるう日記帳に何かを書き綴っている。時折吹く柔らかい風が彼女の愛らしく首までに揃えられた桃色の髪の毛を揺らす。

アグネシア歴2005年、4月3日。

お母さんへ、今日もいいお天気です。いまボクはみんなと共に、ゲノム帝国に來ています…

そこで女の子はペンを置いた。女の子は室内だというのに両手に白い手袋を嵌めていた。それが彼女の【対価】なのだから仕方がない。彼女は眠そうに大きな欠伸をするとその綺麗な青い瞳に溜まった涙を手袋で拭い、ズレてきた。といっても元々ちよつとズレれば胸元が見えそうな挑発的で彼女の年には少し不相応な上着なのだが、元に戻す。

「リン」

背後から扉を開け放って一人の青年が入ってきて、中に居た女の子【リン】の名前を呼ぶ。青年は太陽の光を受けて透き通るような綺麗な輝きを放つ髪の毛が特徴的で、リンは彼を兄のように慕っている。リンは勢いよく振り返る。

「わあ！！グリッド、どうしたの？れでいゝのお部屋に入るときはノックしなさいって言われてないの？」

リンにバカにしたような口調で言われ、入ってきた青年【グリッド】は口の端に力を込めてムツとした。

「ゲイツがよんでる…」

グリッドはそれだけ言って背を向けてさっさと行ってしまった。

「あ！グリッドまつてよ〜！！」

リンはグリッドを追いかけて自分の部屋を飛び出す。部屋から出ると氷の玉座に腰掛ける少女が美しい顔は無表情に視線を宙に彷徨わせていた。

「眠い…」

氷の玉座に腰掛けた少女は暖かさを感じない青白い顔で呟く。視線を宙に彷徨わせているのは半分寝ぼけているせいだったようだ。

「ユリねえ、おはよう」

氷の玉座に腰掛けた少女【ユリ】は半開きの眼を向けてリンを見る。

「あ、おはよう」

ユリは感情も凍らせたような無表情で頷く。そんなユリに笑顔を返してリンは台所に向かい、そこには身体が透けた 比喩とかではなく本当に服ごと透けて向こう側が見える 女性がいた。

「シェリーさんおはよう」

台所にいた身体が半透明の女性【シェリー】はニコリと微笑む。

「おはようリンちゃん、朝から元気ね」

シェリーは自分の右腕を刀のような形にして野菜を切っていた。

「リンちゃん、わるいんだけどスープを作るのを手伝ってくれない？」

シェリーは身体の99%が水であり、そのため水に沈む物は持てないし掴めない。しかしリンは気にしない。それが彼女の【対価】なのだから仕方がない。

「うん、いまやる〜」

リンはチョココンと自分用の足場に乗し、台所に立つ。

「お！本日もリンの手料理かい？」

既に席で料理をまわっている青年2人。真っ赤な髪をトサカのように立たせた青年【ヴァッシュ】がゲラゲラ笑いながら声をかけ、その隣で白髪に真っ赤な目をした青年【ジェット】もそれを煽るように笑いながら続けて、

「謝々！食い過ぎて吐かねえようにしねえとなー!!」

不気味な笑みを溢した。

「…二人共…飯くらい静かに待てんのか…」

岩のような大男【ガッツ】が二人を諷める。

「ガッツのオッサン…やだな〜冗談だろ？」

ジエットとヴァシユはガッツに対して身を引く様に肩を竦める。そんな三人を無視してリンはシェリーに声をかける。

「そついえばマルルはどこ？」

「マルル？…」

シェリーはそう言って一人位簡単に入りそうな鍋を見る。

「まさか…」

リンは鍋を覗き込むと、女の子が鍋の中裸で煮込まれていた。

「ま…マルル…」

リンが顔を引きつらせると、マルルが水の中から顔を出す。

「おはよう、リンー！」

マルルはリンと歳が近く。発育未発達な身体を鍋から出す。

「マルル！出汁だすの止めてっっていつも言ってるじゃん！」

マルルは悪怯れるようすもなくグツグツ煮込まれながら頭に手をのせる。

「いいじゃん…美味しいよ？」

「いいから着替えてきなさい」

シェリーに笑顔で言われてマルルは鍋から這い出ると、そのまま糸纏わぬ姿のまま自室へと走っていく。途中でサングラスに黒のライダースーツの男とすれ違い、男はマルルを見て口をパツクリあけて飛び退く。

「\$ !?...っマルル！てめえまたそんな格好で歩いてるんじゃないねえ！！」

「煩いよ〜だ！！ライエルのくせに〜」

「なんだとお！？泣かずぞてめえ！！！」

マルルは振り返っていったんアツカンベーをするとライエルの言葉を最後まで聞かずに部屋に入り、ライエルはサングラスを外して舌打ちする。ライエルの双眼は普通とは違う。普通の人間は白い目玉に黒い瞳だが、ライエルは赤い目玉に黄色い瞳である、このライエルもここにいるもの達同様に【対価】を持っている。

「たく...」

ライエルはそのまま台所まで来ると、シェリーにコップを差し出す。

「シェリー、栄養剤くれ」

「...はいはい。」

シェリーはライエルのコップに手を差し出し、手から溢れた水をコップに注ぐ。

「サンキュー」

ライエルはそれを飲みながら食卓に向かい、

「みんな…あつまってるか？」

そこに最後の一人となる男がグリッドに連れられてやってきた。彼の肌は病的に白く、目は虚ろに赤い光を宿していた。

「ゲイツ…」

シエリーはすぐさまゲイツの脇にいき、腕を抱えようとする。

【バシャッ】しかしシエリーの手はゲイツの手を擦り抜けて水しぶきを散らす。

「シエリーか、大丈夫…俺はそんなにヤワじゃない…」

ゲイツはそういうとグリッドの手を外して手探りに椅子を探して座る。ゲイツは能力の【対価】により両目が見えない、しかしそんなハンディを気にする風も無くテーブルに頬杖をつく。

「リン、食事は話の後に振る舞ってくれ」

ゲイツは台所でスープを煮込むリンに穏やかに言葉を投げ掛けた。

「あ、はい！」

リンはゲイツに言われて戸惑いながらも、釜戸に薪を沢山入れてか

ら食卓に向かい、服を着たマルルも自室からやって来るとゲイツは笑みを作って見えない両目で皆を見回す。

「みんなよく聞いて欲しい…俺達は今まで言い表せないほどの迫害を受けてきた…人でありながら人として扱われず、唾をかけられ血にまみれ、多くの同志を失ってきた…」

ゲイツはそこでいったん言葉をためて穏やかな笑みの中に怒りを孕ませて拳を握る。

「だがそれも今日で終わりだ！我々は我々に対する迫害を始めたこのゲノムから反乱の旗を揚げ、迫害された全ての能力者を解放の為に戦うのだ。立ちほだかる敵全てに我々の怒りをぶつけ…我々の怒りを込めて存分に殺そう！」

ゲイツの言葉に、その場にいた全員がリンを除いた全員が不気味に微笑んでいた。そして…

昼：ヴァシユはゲノム帝国の中央噴水広場にいた。全身をロープで隠し、被ったフードの中で彼は歯を剥き出しにして笑う。

「おい、そこのお前」

そんなヴァシユに最初の犠牲になるであろう兵士が走ってきた。

「こんな所で何をしている？」

兵士はヴァシユを睨み付けて訝しげな目を向ける…もローブの姿のヴァツシユは答えないで唯晒うだけ。

「ええい！痛い目にあいたくなければ答えよ！怪しいやつめ、もう一度尋ねるぞ？…何をしているか？」

ヴァシユはその傲慢な物言いに身も心も燃えたぎる炎のような怒りに染まっていく。

「ああん？そんなに知りたきゃ教えてやる！てめえらを焼く準備だよー！」

同時に全身を包むローブが炎に包まれて灰に変わり、目の前の兵士は目を丸くする。

「の！能力し…！？」

叫びながら剣に手を掛けようとしたその瞬間　ヴァツシユの両手から噴出された炎を浴びて兵士は炭になって焼け落ちた。

「どうした…！？」

「なんだこの炎は！？」

騒ぎを聞き付けた兵士達が広場に殺到し、ヴァシユは右手を天に掲げて歯を剥き出しにして笑う。

「反アグネシア武装組織【ソードハンターズ】が切り込み隊長…【焰神のヴァシユ】だ！冥土の見上げに覚えておけ…！」

ヴァシユは叫び右手の平から灼熱の炎が火柱となって立ち上がる。

「なんだこいつ!!」

「炎使い？」

「困め!!」

ゲノムの兵士達は各々に剣を引き抜いて包囲を始める。

「燃え拳がれ【焰神】!!」

ヴァシユは気にせず、自らの能力を叫べば、その右手に8mを超える巨大な焰を感いし大剣が握られ。

「消し飛べや!!!!」

それを軽々と片手で振りまわす。

「に!!にげ……」

前列にいた数人の兵士達は纏めて真つ二つにされて切り口から燃え上がりながら吹き飛ぶと、後列にいた兵士達を大剣から迸る灼熱の業火が焼き尽くす。

【ドオオオン!】 振り回す大剣から溢れる炎は波となり、街の中を明るく照らす。

「な…なんじゃあれは…」

ゲノム帝王は窓から外をみて目を丸くしていた。

「国王！！！！」

そこに軽装の兵士が飛び込んで来る。

「何事じゃ！！」

国王は声を荒げる。

「反アグネシア武装組織【ソードハンターズ】と名乗る集団による武力行使です！」

国王は顔面を蒼白させる。

「そ…ソードハンターズだと！？…いい！急ぎ！！兵士を集めて迎撃にあたれ！！」

「はっ！！」

【ジリリリリリ！！！！】

ゲノム王城全体に警報がなり、その音と共に兵士たちは瞬く間に人数を揃えて中央を目指す。

ある部隊は功を焦って中央へ駆け付けようと30人の分隊のみで向かっていた。

「進め！！敵は一人だ！！大隊など必要ない！！能力者といえど一対三十！！ゲノム帝国の精兵の力を見せ付けてくれるぞ！！」

そう言っつて隊長が号令をかける中、一陣の風が分隊の中をを擦り抜ける。

「对不起…残念　一人じゃねえんだワ…これが！」

30人の兵士たちは突如現れた白髪の男にすれ違い様に次々と切り裂かれ、カマイタチにでもあつたかのようにパツクリと鮮やかな切り口からは勢い良く血を噴きだしながら倒れ、絶命した。

「ソードハンターズが風の使い手、【風神のジェット】！！切り刻まれないやつあかかってこい！！…つてあれ？もういねえか？ヒヤハハハハ！！」

ジェットは高々と名乗りを上げ、両手に風を纏わせる短剣を造り出して逆手に構えながら周りで血溜りを作つて倒れている30人を見回す。そこに後から遅れてきた本隊をみつけ、突撃していく。

「ハハハハハハ！！ハハハハハハハハハハ！！！！」

ヴァシユは中央で高々と笑いながら焰を纏つた大剣を振り回し、次

々に向かつてくる兵士たちを炭に変えていた。

「放て!!」

兵士たちの一言で遠距離に陣取る兵士たちが一斉にヴァシユに矢を降らせる。

「ハハハハハ!! なんだそれ?…きかねえよ!!」

矢はヴァシユに触れる前に尽く剣から溢れる焰によって燃え散らされ、彼の傷一つ付けられない。

「く! 化け物…」

「ええ…化け物ですわね…」

隊長位の男は背後から突如聞こえた聞きなれぬ女性の声に耳を疑い、背後を振り返った。

「ですが…それが何か？」

【ドス!】 振り向いた彼が最後に見たもの…それは水色の髪の毛が透き通った女性が指を針のように伸ばして彼の心臓を貫いている所だった。

「た!! 隊長!!」

「きつさまー!!」

隊長の呆気ない死に兵士達は怒り、弓を捨てて剣を抜いては女性の

身体を切り裂こうと殺到する。

【バシャッ！】　しかし剣は女性の身体を捕えても切り裂けない…否、切り裂くのだが一向に手応えはなく女性の体にも変化はない。

「え？」

【ズン！】　次の瞬間には女性の両手の五指が殺到する男達の心臓を貫いていた。

「ち！！くらええ！！」

一人が矢を女性の顔に放つ。

【バシャッ！】　矢は女性の顔を捕えるも、まるで水にぶつかっただかのように威力を失い地面に落ちる。

「我がなはシエリー…」

シエリーは右手を前にかかげると、そこに水の槍が現れる。

「【水帝】」

シエリーはまるで滑るように矢の飛びかう中に飛び込み、槍を振るって次々に射手達の心臓を貫いていく。

「ばっ！！化け物ー！！」

兵士たちは恐怖にかられ、隊長を殺された隊は統率を失って敗走する。しかしその退路をさえぎるかのよう…

【ジャリ…ジャリ…ジャリ…】 岩を削るような音が走る兵士たちの前から聞こえてくる。そして兵士たちは気付く、退路の先から自分達の方へと流れ込む異様な冷気に。

「ひい!?!」

「【氷帝】のユリ…」

兵士たちの前から、氷でできた刃の巨大な鎌を持った少女が氷った地面を滑りながら彼らの退路を塞ぐように現れる。

「に!!…にげ!!」

【バギ】 兵士たちが気付いた時、既に兵士たちの足は凍っていた。

「ぎゃああああ!!」

【斬】 悲鳴…それをあげられたものが幾人いただろうか? 悲鳴すら凍てつかせた兵士達をユリの大鎌が次々と両断していく。

「レオ!! マイケル!! くそおお!!」

後方にいた一人の勇敢な兵士がユリに向かって走る。しかし彼のそんな勇氣すら、一撃を浴びせるところか氷の少女にたどり着くことなく報われない。

「どげ…」

【ドン】 低い声と共に目の前に現れた真紅の巨腕に跳ねとばされ

て家の壁にぶち当たり、勇敢な彼はザクロのように弾けた。

「【鬼】のライエル」

ライエルはサングラスを外して赤と黄色の目を見開き、歯をむき出しに頬まで口を裂いて笑いながら兵士たちに向かう。

「ひ!…」

あまりに威圧的なライエルの姿に恐れをなした兵士たちは、次々と背を向ける。

『キシヤアアア!』

そして中央広場からもライエルからも逃げ出した兵士達の前には巨大なワニのような口を開けた植物が待ちかまえていた。

「ぐば!」

【バクン】 兵士たちは悲鳴すら挙げる事無く巨大な食虫植物の胃の中におさまる。

「ふふふ … 【森羅万象】 マルル…」

少女は林檎を噛りながら家の屋根から植物に喰われる兵士たちを見下ろす。

「マルル!!俺の獲物だぜ!？」

ライエルが不満げに叫ぶとマルルはライエルに顔をむけ、

「早い者勝ちだよ！」

そう元気いっぱいに叫ぶ。

「いそげ！！仲間を助けるんだー！！！」

100人の兵士たちは正門から中央噴水広場に行こうとしていた。するとその前に、小さな少女と長身で背中に羽を生やした青年がいた。

「どけー！！！」

最前列の兵士が叫ぶと、少女は両手を前に突き出し、青年は女の子の背後で羽を広げる。

『【G・S・F（ゴールデン・シャイニング・フラッシュ）】』

同時に、青年の羽から金の粒子纏う閃光が放たれ、まばゆい輝きが100人も兵士たちを地面に影だけを残して蒸発させる。

「ソードハンターズ【閃光】のグリッド」

「同じくソードハンターズ【金剛】のリン……」

そう言って二人は更に向かってくる兵士を遠目に発見するとそれらの一掃を始めた。

「うわああ！！！」

正門には巨大な岩の化け物が、迫って来ていた。

【ドオン！！】

岩でできた巨人の化け物は大砲の球を受けてもまるで蚊に刺されたほども堪えた様子もなく、歩みを止めない。

「【土皇】ガッツ……」

無口な巨人は右腕を振り上げ、正門をたたきつぶし、突き進む。

「敵はノロマだ！！包囲して速度で上回れ！！」

一斉に兵士たちはガッツを包囲する。しかし……

【ズバァン！！】 周囲に稲妻が駆け巡り、兵士たちを感電死させる。

「【雷帝】……ベラ……」

全身をマントで隠す少年は静かに眼差しを死体にむけていた。

「ぐわああ…！」

「うわああ…！」

南門、一人の男に兵士たちは全滅した。

「弱い」

男は闇の剣を片手に兵士たちを次々に切り捨て、死体の山を築く。

「そしてわたしが【暗黒】…ゲイツだ…」

十一人のテロリストはゲノム帝王の兵士たちを次々に始末し、そして中央に集結した。

「あとは城だけか…」

ゲイツは城の前で足をガクガク震えさせる兵士たちを見えない目で睨んだ。

「ならマルルいつちばーん！」

マルルは一人、手に琥珀の刀を握って植物の下僕たちと共に城門へ向かう。

「みんな…！【食べちゃええ…！】」

「ひいー!!」

門前を守る二人の兵士は尻餅をついて腰を抜き、ガクガクと震えながら目を閉じる。

「【掌波烈破撃!!】」

【ドオオオン!】 年若い少女の声と衝撃の破裂音が響き、兵士たちは恐る恐る目を開く。

「あ…あ?…」

兵士たちの目の前には、風でなびくフードで顔を隠した少女が背中を向けて立っていた。少女の足元には千切れ飛んだ植物の残骸が転がっていた。

「城の中に逃げなさい!」

少女は背後の兵士達に叫ぶ。

「は!! はいいい!!」

兵士たちは素早く立ち上がり、城門の中に退避する。

「…な…な…」

マルルは突如現れた少女に自分の可愛い植物を殺されて苛立っていた。

「大人しく帰りなさい…もう十分殺したでしょ?」

「なんなんだよ!!!おまえええ!!!」

マルルが苛立ちを隠さずに力強く地面を右足で踏みつけると、すぐさまそこから樹の根が伸びて少女の身体を貫こうと迫る。

「はあ…やっぱり聞けないか」

瞬き一つ、少女の身体はマルルの目の前にあった。

「え…」

【ゴオン】 驚きに見開くマルルの顔面に少女の右ストレートがめり込み、その華奢な身体が宙を舞い、地面を転って動かなくなる。

「マルル!!!」

慌て駆け寄るライエル。

「てめえよくも!!!」

「刻まれる!!!こらああ!!!」

同時に飛び出すヴァシュとジェットは突如乱入して城門の前に立ちはだかる少女に向かって突貫する。

「うりゃあああ!!!」

ヴァシュは剣を振り上げ、少女の体に振り下ろす。

「煩い」

少女は右手で剣を左に薙はらい、ヴァッシュはその軽い動きからは想像もつかない凄まじい衝撃に剣を手から手放す。

「背後!!とっ…!!」

「とった…なんて言ってたら奇襲にならないわ?」

ジェットが少女の背後からナイフを振り下ろすが、背後ではなかった。ナイフが振り下ろされたときには既に少女は身体を左周りに回転させており、回転の勢いそのままに片手で軽くナイフを弾きながらジェットの足を回転の勢いで薙ぎ払う。

「っ…!!」

ジェットのナイフにも凄まじい衝撃が走って吹き飛ばされ、足払いされた勢いで空中で側転するように一回転したのち、地面に転がる。

「て…てめ…あ…!!」

ジェットが受け身をとって身を起こそうとした時には既に少女が間合いを詰めており、間髪いれず放たれた少女の爪先は彼の顔面にめり込んで、彼を空に打ち上げた。

「ジェット!!!てめえ!!!」

ヴァッシュが少女に突進するも、ジェットの後を追うように宙を舞ってゲイツの足元に転がる。

「ヴァシュー!!」

シエリーの悲鳴に似た声が響く。

「もう…十分でしょ?…」

少女は静かな声で…悲しげな調子を込めてもう一度言った。

「くっ!!」

シエリーは駆け出し、その後ろにユリが続く。

「はあ!!」

シエリーは右手の槍を少女の体に伸ばす、少女は身長の高さを利用して易々と槍をくぐって懐に入る。

(ばかめ!わたしに物理的な攻撃は通用しっ…)

【ドン!】 激しい空気の破裂音、シエリーの身体は吹き飛ばされて地面にぶつかりと動かなくなった。

「はあっ!!」

ユリが間髪入れずに少女の頭に鎌を振り下ろす。

「が…かは!!」

【ドゴォ!!】 ユリの体に石がめり込んでいた。少女がシエリーを

吹き飛ばすどさくさに紛れて蹴っていた小石だった。

「ぐ！…うええ！」

ユリは貯まらず地面に蹲り、嘔吐を始める。

「わからないな…君は我らと同じ能力者だ…なのに何故我らの邪魔をする？…奴らが我ら能力者にした【仕打ち】を忘れたのか？」

ゲイツは至って冷静に少女に話しかける。

「確かにあんた達の反乱をした決意は大した物だわ…でもね…」

少女は真っ直ぐな瞳をゲイツに向ける。

「あんた達は完つ壁に間違ってる、言ってもわからないなら…今ここで全員ぶつたおして回収するの有りね…」

少女は先程までの静かな雰囲気とは打って変わる明らかな殺意をゲイツに向け、ゲイツは首を横に振る。と、一人の男が前にでる。

「お前らしくねえ、何ビビってんだよ…」

ライエルだった。

「やられた奴を回収して撤退だ…こいつはオレが押さえる」

ライエルはサングラスを外し、特徴的な赤と黄色の目を少女に向ける。

「ライエル…」

「早く行け！」

同時にライエルは駆け出して正面から少女と激突し、グリッドとガッツはその隙に倒れた仲間たちを回収して退却する。

「泣かせるわね…仲間を助けるための自己犠牲…まあその根性だけは認めてあげるわ？」

「ち…テメエはゲノムがどんな事をしたのかわかってねえのか!？」

ライエルはレイヴンで真つ赤に大きくなった左手を少女の頭に振り下ろす。

「知ってる…」

少女は身を引いて左手の範囲から逃げ距離を取り、ライエルは距離を取る少女に続けざまに右手を振るう。

「【鬼弾頭】！」

空間の歪みを弾丸と化して飛ばし、少女の胸を貫こうと迫らせる。

「ゲノムが狂ったのはあいつが即位してから。それに…あいつはあたしの獲物…あんた達にはあげないわっ！」

少女は身体を左に反らして弾丸から身体を逃しつつライエルと肉薄する。

「ほざけ！」

ライエルは左ストレートを少女の顔面に放つも、少女はそれすらも軽やかにかわす。

「もらつたあああ！！！」

左ストレートは誘いだった：少女の素早さを考えれば恐らくはあのタイミングで放つたとはいえかわしながら迫るだろう。だが、あの左ストレートは『当てるためのものではなくその後の軌道を限定させるためのものだったとしたら』：少女が避けるであろう軌道上に予測して放たれた前蹴りは少女のフードを貫いて…

「ふうん…なかなかやるじゃない。でももうちょっと相手の実力を測つたほうがいいわね」

【ドン！】 直撃したはずだった。未来予知でもしなくては受け止められないはずの蹴りは『確かに受け止められて』は居なかった。だが少女が前蹴りで吹き飛ばされる事もなかった。そう、『唯単純にライエルの前蹴りは少女の体を吹き飛ばすことができなかつた』のだ。

呆気にとられるライエルの前に少女のフードが捲れ中から愛らしく、幼い少女の顔が覗く。その顔には見覚えがあつた。

「おまえっ！まさか…フ…」

【ドオン！】 同時に、ライエルの腹部を少女の右ブローが貫き、ライエルの意識は闇の中に消えていった。

「さてっ…と」

少女はフードをかぶり直し、ライエルを肩に担いでゲノムの正門に向かう。

【ゴアン】

そこで今まで傍観していたゲノムの兵士たちが中から現れた。しかし彼らは少女を包囲したりはしない。例え少女がレイヴン能力を使用する者だったとしても彼らは彼らの流儀に反する事はしない。

「全体！整列！！！！」

少女が目を丸くして急に整列した兵士たちを見ると、真ん中でその部隊の隊長らしき男が声を張る。

「ご協力感謝します！！聖騎士団隊長！！」

「もう聖騎士団隊長じゃないわ」

フリルは苦笑してフードを外して振り返り、姿勢を正す。

「いいえ！貴女はいつ如何なる時でも我等にとっては隊長であります！！全隊、聖騎士団隊長に敬礼！！」

兵士たちは一斉に右手を胸に当て、フリルはそれに習い、遅れて右手を胸に当てる。

『有り難うございました！！！！』

兵士たちは声を揃えて瞳を輝かせていた。フリルは笑顔で息を吸う。

「奴等はまた必ずやって来る！！油断はせず！慢心せず！！常に己を鍛え！！気を引き締めなさい！以上！！」

フリルはフードをかぶり直して背を向け、隊長の男も背を向ける。

「待て待て！！フリルだぞ！？何してるんだ貴様ら！！」

そこに肥えた身体を揺すりながら、一人の王が走って来た。

「逃げられました！」

隊長が声を張り上げ、その場の兵士たちも笑顔で頷く。

「なんじゃと！？そこにいるではないか！！追うのじゃ！！」

そこで隊長は部隊の全員の顔を見る。

「国王様！私には見えません！」

「なに？…貴様の目は節穴か！！？」

「自分も見えません！」

「見えません！！」

「自分もです！！」

隊員達は次々に声を挙げる。

「き…きこまら…」

国王はガツクリうなだれ、諦めて帰って行った。

ある少女の乱入によりソードハンターズ達は、龍の泉の近くにある開いた民家にいた。

「ライエルは我々の盾となり、死んだ…」

意識を戻し、10人になったソードハンターズの面々はゲイツを除いて暗い顔をしていた。

「奴の死を無駄にはしない…我々はゲノム帝国を打倒するのにはまだまだ実力が足りないのだ…必ず、仇を討つ」

リンは一人食卓から抜け出し勉強机に座ると、いつものように日記を取出した。仲間が死んだとしても彼女は涙を流さない。リンにとってはどうでもよかつたからである…。

アグネシア歴2005年4月4日

昨日凄い人を見た。ボク達はまるで太刀打ち出来なかったよ。その人は言った、ボク達は間違っているって、多分その人の言ったことはあつてると思う…でも、もうどうにも成らないよね。ライエルは死んじゃったのかな…ボクも死んじゃうのかな…少し怖くなってきた…。

そして、リンは筆を置いた。

【ひとりぼっちの魔法使い】（前書き）

騎士達の墓場で戦果を手に入れたリット達は、一路近隣の街『リン  
ドブルグス』へと向かう。そこで待ち受けていたのはゲノム帝国の  
現状であった。

## 【ひとりぼっちの魔法使い】

昔々、その女の子は森の中の小さな村で友達や家族や色々な人々と仲良く暮らしていました。

ある日、女の子は村の近くの川原に遊びに行き、日が暮れるまで川原で動物達と遊んでから村に帰って来ました。すると村には大きな焚き火：いえ、村全体が焚き火になっていました。女の子は遠くから見える焚き火の中のひとつの小さな焚き火の元に走りました：いつも女の子を笑顔で待っていてくれるお父さんとお母さんの下に。しかしそこにはいつも笑顔のお父さんとお母さんはいませんでした。そこにいたのは焚き火の前でいつもの笑顔は見せてくれない二人が居ました。

お母さんは頭がないので笑顔は見せられませんでした。お父さんは身体から沢山の槍が生えていて苦しそうな顔のまま倒れて動きませんでした。女の子はなぜこんな事になったのか、理解することもできずに呆然としばらくそこに立ち尽くしました。いくら泣いて頼んでもお父さんもお母さんも女の子に何一つしゃべってくれませんでした……その日から女の子はずっとずっとひとりぼっち。

ひとりぼっちの女の子はおながが空いておながが空いて「ごめんなさい、ごめんなさい」と繰り返しながら唯一燃えのこったお家の人を丁寧に埋めてそこのお家の食べ物ももらいました。そして女の子は村にあるものを使って生活しながら動かなくなった村の人たちみんなにお墓を作っていました。

全員のお墓を作り終わるころ、村には何にもなくなってしまいました。女の子は村の人たちのお墓一つ一つに丁寧に祈りを捧げてから最後に一言：もう一度だけ小さな声で「ありがとう」と言って村を去りました。このお話は女の子がこの悲しい出来事を経験してから少

しだけ後のお話……

ここはバツクリア古戦場から東に少し行ったところにある小さな街【リンドブルグス】。町にある小さな鍛冶屋の外には、二人の男女がたっていた。鍛冶屋の壁を背もたれにして立つ金髪の青年はリット。その隣で燃えるような赤い髪の毛を揺らして退屈そうに欠伸をしている灼色の目をした美少女はアヤカ。彼らはバツクリア古戦場で【戦果】を換金しているフィルを外で待っていた。リットは何の気なしにアヤカを見ると思わずその端正な横顔に見とれてしまう。

「なによりリット」

視線に気づいたアヤカが怪訝そうな顔をを向ける。

「いや、美少女が欠伸するとなんかおかしいなってさ……」

リットの返答に美少女は首を傾げる。

「は？…なによそれ、頭平気？都会の脳外科医を紹介してあげよっか？」

アヤカは思いつきり不審な目をリットに向ける。リットは苦笑し、目を閉じる。

「てか、フィルはまだ？」

アヤカはそう言って中を覗き込む。中ではフィルと鍛冶屋のオヤジ

が山になった剣を挟んでなにやら言い争っていた。

「はあっ？そんな値段？…ちょっと見る目は大丈夫？これどう考え  
ても全部で100万ギルダーは堅いでしょ！？」

フィルはその後ろで束ねた綺麗な黒髪を揺らしながら剣を広げたテ  
ーブルを叩き、叫ぶ。

「ひゃ！！100万！？ふざつけるな！高すぎる！！」

鍛冶師の男は脂汗を流して彼女に対して同様に声を荒げる。

「何が高いのよ？ここにある剣は全部、もう型のない失われた技術  
の結晶なのよ？博物館にしかないような代物もあるわ？なんだつた  
ら王都の博物館に行ってみなさいよっ！！」

フィルはそういつて幅の狭い片刃の剣をオヤジの目の間にグイと突  
き出す。それはシミター型と呼ばれる剣で、アグネシアでは博物館  
にしかその型を存在させない程に貴重なもので、その価値は好事家  
なら50万ギルダー位なら出すであろうものだ。しかも何本もある  
のだから何度かチャレンジすれば型を再生する事も恐らくは可能で  
あり、そうすれば鍛冶屋としての名誉も富も生み出すであろう。つ  
まりフィルの言っていることは至極正論であり、こんな剣の山を持  
ち歩くのは大変だから早く金に換えたいというのもあつて100万  
ギルダーと知っているだけでその値段は安すぎる位ですらある。し  
かし鍛冶屋のオヤジだってそんなことははなから承知で値切ろうと  
しているだけ、しばらくの言い合いの後にオヤジが遂に納得する。

「わかった…100万で買い取るっ」

「ホント？」

フィルの問いかけに鍛冶屋のオヤジはため息と共に相槌を打った。

「でへへ」

フィルは特大の札束を手に外へ出てきた。

「あ、出てきた」

そう言つてアヤカが視線を出入り口に向けると待つていた二人はフィルに目を向けて歩み寄る。

「どうだった？」

アヤカに聞かれ、フィルはピースする。

「エッヘン！100万ギルダー…ちょくつとオヤジが物分り悪いから時間がかかったけど」

そう言つてフィルが店の中に視線を送るとオヤジがホクホク顔…に疲れた様子を交えて買い取った剣を奥へと大事そうにしまっていた。アヤカは眉を寄せながら首をかしげてリットに顔を向け、

「ギルダーはわかんないけど、良い値なの？」

「まあまあかな…俺の親父ならもつと安く買い取るはずさ」

「そんなもん？」

「ああ、そんなもん。実際、輸送用の馬車も何もない俺たちがあんな剣の山もつてえつちらおつちら歩いて移動するのは嫌だっと思惑見え見えだからな、足元見られればもつと安く買い叩かれたさ」

「ふ〜ん…」

アヤカはそれだけいうとフィルに手を出す。

「？」

フィルは何？と言いたげに首を傾げた。

「分け前。あんた1人で独占するつもりじゃないわよね？」

アヤカに言われてフィルは札束を抱えて身を引く。

「な！？なによ！これはあたしのお金！！」

途端にアヤカはジトつとした目になり、リットを見る。

「だそうよ？、リット」

リットは目を細め腕を組む。

「まず言っておくと、騎士達の墓場までの際、食料の調達をしたのは俺とアヤカだったな」

フィルはその時、持ち場を守るといつてだらけていた。

「うっ！」

仰け反るフィルを見てリットはニヤリと笑う。

「そう言えば誰かさんが調理出来ない…っていつから、それを調理したのはあたしだったわね？」

アヤカはリットに相槌を打ちながら後に続く。

「ああ、そうだな。それに俺も調理を手伝ったぜ？しかもそのときに味を整えるのに使った調味料はアヤカの持ち物だったよな」

二人は調子を合わせながら引くフィルに歩み寄る。

「だ！、だって料理なんて…したこと…ない…し」

フィルは冷や汗を流して、鍛冶屋の壁に追い込まれる。

「いや、料理だけじゃないぜ？眠いからもう無理という誰かさんのために、焚き火を維持して番をしたのも俺とアヤカが交代でやったよなあ？」

左右をチラチラと伺って逃げようとするフィルをリットとアヤカは取り囲むように近寄って、追い込んでいく。

「ふ…二人に10万…ず…」

【ドン！】 アヤカは睨み付けながら左手をフィルに触れるすれす

れの壁に打ち付ける。

「騎士の墓場で【貴女が呼び出した】ソードガーディアンの一撃…痛かったわね…」

そう言つて未だに完治していない脇腹をワザとらしく擦る。

「ぐう！！…に！！…20ま…！！」

更にリットが追い討ちをかける。

「【フィルが呼び出した】ソードガーディアンを倒し！！…あの剣の山を目利きし！高く買ってくれそんな鍛冶屋を紹介してやったのは誰だ！？」

「この街を案内したのは！？ここに来るまでに調達した食糧の調理をしたのは？！汚れた服を洗濯したのは誰！？」

「…うう…リットとアヤカです…ぐす…」

アヤカとリットの執拗な攻めに遂にフィルは泣きながら札束をリットとアヤカに差し出してきた。

「わかれば宜しい！」

アヤカは袋の中から札束を取り出すと枚数を数えて40枚をリットに差し出し、40枚をフィルに帰すと、残った20枚をポケットから取り出した財布に押し込む。

「アヤカ？」

リットとフィルは首を傾げる。

「ん？、まあ…アルバイトには相応な給料でしょ？」

アヤカはそれだけ言うと、遠い目で街並みを見渡す。

「さて！じゃあー先ず宿を探して、お風呂入りましょ？支払いは【金貨で】いいわね」

「ええっ！！ちよっ…私の金貨…って何で金貨のこと！？」

「ん？だって騎士の墓場の、恐らくは士官クラスのお墓の近くに落ちてた金貨…こっそりと拾ったの知ってるわよ？それまで分けるなんて言わないんだから宿代位払いなさい？」

「うう…仕方ない…」

ブチブチと不満げにため息をつくフィルの肩を慰めるようにトントンと叩きながらリットは首を傾げる。

「宿はわかるけれどまず飯でも食べないか？結構歩いたし腹も減ったろ？」

リットに慰められて（？）すこし気分を持ち直したフィルもきょとんとして、

「お風呂？」

二人の視線を向けられたアヤカはため息混じりに首を振って

「だってあたしら、たぶん今すつごい臭いよ？視線…感じない？」

バックリア古戦場から町までは人が通ることなどめつたにないこともあって宿などなく、ずつと野宿であった。臭いに慣れると感じなくなる…という言葉の通り、三人はわからないが丸二日も身体を洗わない生活をして汗だけで歩いていれば当然身体は臭う。周りを見渡せば「あの臭い集団は何？」というような視線をずつと三人は浴びていた。

「急いで宿探そう！」

リットは慌て駆け出し、アヤカとフィルも後に続いた。

リット達は替えの服や下着を買ってお風呂のある宿に突入した（若干女将さんの視線が痛かったがあえてそこはスルーして）。受付を済ませるとリットはアヤカとフィルと別れ、風呂からでたら旅で汚れた下着や衣服を宿の洗濯屋に預け、再び宿屋の前に集まることにした。

「は…さっぱりした」

宿の前で待っていたフィルとリットの所にアヤカが表情をほころばせて燃えるような長髪を振り、背筋を伸ばしながら出てきたのは数十分後だった。

「アヤカお風呂長すぎ！ね？リット！？」

そう言っつてフィルがリットに目を向けると、リットは鼻のしたを伸ばしてぼんやりと湯上りのアヤカに見とれており、フィルは思わずそんなリットの顔をぶん殴ってしまう。言われた当のアヤカは平然と、

「そりゃ女の子だもの、当たり前じゃない？」

「くっ！あたしが女の子じゃないみたいに…」

「フィルと違っつて臭うのが嫌なだけ…悪かったわ？」

シャツの上からジャケットを羽織り、膝までのスパッツにスカートというラフな格好をしたアヤカはそんな事を言いつつクルリと回っつてスカートを揺らし、周囲の男性の注目を浴びる。

「さ、お昼ご飯食べに行こう？」

アヤカはそう言っつと倒れているリットを起こす。

「大丈夫？」

「ああ…」

リットはアヤカの手につかまっつて起き上がり、土埃を叩くとズレた鞄の位置を戻す。

「リット、その剣…」

アヤカはリットの剣に目を落とす。それはシンプルな柄に安そつな

鐔をあしらった剣。

「あ、これ？ソードガーディアンをぶった斬った剣だ。なんかわかんねえが気に入っちゃまってな…」

リットが苦笑しながらそういうと、アヤカは目を細めて眉をしかめる。

「ダサくない？」

リットは腕を組んで言う。

「バカ、剣は飾って楽しむ置物じゃねえ。人や動物をぶった斬る為の包丁さ。ルックスなんざ二の次、扱いやすくよく切れて頑丈ならなのが一番なんだよ…俺はな」

それを聞いてアヤカは何処か寂しそうに笑った。

「そうね…」

「ちょっと…二人で雰囲気つくくないでよ！もう！お昼ごはん食べに行くんでしょ！」

置いてきぼりなフィルが割って入り、二人を引きずって昼食を取る場所を探しに向かった。

「わ…」

アヤカは丸型の机で頬杖をついて怒りに震える。

「なんで！酒場なのよっ！！」

怒鳴るアヤカを尻目にリットはコップの酒を一口含み、フィルはニコニコしていた。

「いいじゃん 賑やかな方が落ち着くし、お酒も飲めるし安く食べれる！」

フィルはそう言ってリットとお揃いの酒を一口煽る。一方お酒が飲めないアヤカはため息を溢して水を飲む。

「お待たせい！」

三人の前に巨大な肉の塊がおかれ、アヤカは更にしかめっ面になる。

「さ！食べよう！」

リットとフィルは普通だろ？、と言いたげに取り皿に肉を切り分けていった。

食事を終えた三人は、暫く酒場でだべっている事にした。フィルは席を立ち、「次なるお宝は？」などと言って情報収集に向かう。

「よっお嬢さん！」

1人の柄の悪い男が酒のコップを片手にアヤカの肩を叩いた。

「何よ…って、誰？あんだ」

アヤカは肩にのった手を叩いて払い。男を見上げる。

「おお、ずいぶんじゃね〜か？」

「御免なさいね、馴れ馴れしい男に対する礼儀作法は知らないの」

アヤカはそう言って男を一瞥した後に視線をリットに戻して会話を続ける。

「むっかつく小娘だぜ…マックスの野郎、今日もあのガキ吊してるかな…」

アヤカに冷たくあしらわれた男は酒を煽って呟くと、別の男がその男に話し掛ける。

「吊らされてるぜ？、後で行くか？」

「ああ、行く！…ウィプルにいたガキだろ？」

【ガタン！！】 激しく椅子を倒してアヤカが立ち上がり、リットはポカンと見上げる。

「あ…アヤカ？」

「いま…なんて言った？」

リットを無視し、アヤカは鋭い目つきを向けて男達に語り掛けた。

「あ？興味ある？…ウィプルのガキを吊してサンドバックにしてんだよ！お前も一緒に…」

【ドン！！】 アヤカは弾けるような動作で男の胸倉をつかむと壁に押し付ける。

「その子は何処？…」

アヤカの美しい顔立ちは殺気に染まり、鬼のような威圧感すら感じさせる。

「ま…町の…真ん中…丘の上…ですっ」

男がその迫力に負けたように怯えながら言つと、アヤカは男を離すと走り出す。

「ちょっと行つて来る！！」

アヤカはそのまま外に出ていった。

「ちよっ！！アヤカ！！」

リットは慌てて立ち上がつて、フィルの方を見る。酒場の主人から情報収集（？）をしていたフィルもこの騒ぎを聞きつけて顔を向けており、リットと視線が合い

「任せた！！」

リットはフィルにそう告げると、真っ直ぐにアヤカを追いかけて走る。アヤカの足は非常に早かった。山道で足腰を鳴らしたリットで

すら容易に追いつくことは出来ず、アヤカを追いかけてとうとう丘の上までできた。

「はあ…はあ…アヤカ」

丘の上に膝をつくりつと。丘の上の人だかりの中央では、小さな女の子がボロボロの布切れ姿のまま、両手を縄で縛られて一本の木に吊されていた。

「おらああ…！」

1人の男が女の子の腹を全力で殴りつける。

「ぐえ…！ゲホ…！ゲハツ…！ゲハツ…！あ…！」

女の子は目を見開いて白目をむき、殆ど胃酸だけの嘔吐物を撒き散らしてオシッコをもらす…その身体は痩せ細り、露出した皮膚は所々青く痣が滲んでいる。一目見ただけで女の子が【まともな扱いをされていない】ことは明らかだった。

「お…ま…え…らあああああ…！」

アヤカの身体がレイブンで輝く。

「ん？…れ…！…レイブン使っ…！」

人だかりの中の1人の男が気付いて叫んだと同時に稲妻のように動いたアヤカはその1人を殴り飛ばす。

【ぐちゃり】 レイブンをこめた一撃は男の顎を砕き頭蓋をまるで

卵でも割るかのように叩き潰す

「レイブン使いだ！！騎士団をよべ！！」

「はあ？誰が呼びに行くの？ 誰一人ここからにはがさない」

アヤカは騎士の墓場から持って来た湾曲刀を引き抜くと、立ち止まるものも逃げ出すものも向かってくるものも容赦なく次々と切り殺していく。

「ひいいい！？化け物！！」

「化け物つてのはてめえらのやり方を言うんだ！！ゴミ共があ！！」

【ズシャリ】 お世辞にも切れ味鋭いとはいえない湾曲刀は切り裂く…というよりも叩き割るというように叫んだ男の体を脳天から左右真っ二つに切り裂く。

アヤカは返す刀で隣にいた女の首を切り落とし、そのまま勢いを殺さずに女の死体を踏み越えて奥にいた老人の身体を袈裟に叩き割る。横から殴りつけようとした男の一撃を軽く避けると数度剣を振って四肢を切り落とし、逃げようとした男の背中をレイブンをこめて蹴りつけて背骨をへし折る。リットはアヤカの変貌に腰を抜かして見ていることしかできずにいた。

「た！！たすけてくれ！！た！たのむ！そ！そいつ！そいつはやるから！！」

運が良いのか悪いのか。女の子をサンドバックにしていた男が残っ



顔を歪めて叫ぶ男を無視して、アヤカは女の子に自分のジャケットを掛けてから背中におぶる。

「アヤカ…お前」

「リット、あんたはこんな奴らを正しいという?…」

「そうじゃない…だがお前も正しくねえ…」

「そうね…正しくないわ。けれど…アンタはこの女の子を見捨てるの?死んでもいいというの?、ただウィプルの村にいたというだけで殺される。それは正しいの?」

「いや、殺したから殺すつてのは…」

「甘い」

リットの言葉を遮るように言ったアヤカの声は怒りと悲しみが入り混じっていた。

「ごめんなさい…なんて言葉にほだされてコイツらを殺さなければ、きつと騎士団に通報してあたし達は国に指名手配のお尋ね者よ…レイブン使いつてばれちゃったし、きつとこの女の子がされた事がそれ以上の事がまっているわ。それが…今のこの国の真実なの」

「わりい…」

それ以上は何も言えずにリットが目を背けると、アヤカもそれ以上は何も言わずに歩き続ける。無言のまま歩き続けていけば酒場のいざごぎを収めてから追いかけてきたフィルと会い、フィルは二人の

様子と背中に背負われた女の子に目を丸くする。

「あ！アヤカ！…どうしたのその子？、あれ？アヤカ！？、アヤカ  
ー！！！」

アヤカはフィルは何も言わず宿に帰っていく。

「リット、何があつたの？…て！…え…ええええ！？」

リットが丘の上に視線を送るとそつちの方角に目を向けたフィルは  
驚愕して声を上げる。そこには遠目にもわかるほど大量の死体が転  
がっており、木には両足のない人間が痙攣しながら吊されていた。

「な…何があつたの？…ねえ！？…それにリット？大丈夫？」

フィルはリットを見上げて眉を潜めて尋ねる。リットは力なく笑う  
とギョ…とフィルを抱きしめて

「わっ…ぶ…ちょー！！リット！？こらっ！！！」

「ごめん…止められなかった…いや、止めるなんてできないのかも  
しれない…だってアヤカがやらなかったら俺が…」

そう言つてリットが声を絞り出すように言つとフィルはそれ以上は  
聞かずに軽くリットを抱きしめ返す。

「いいよ、大丈夫。リットがもしそうなつたら…私が止めてあげる  
から。難しく考えなくてもリットはリットでいいんだよ…ほら、ア  
ヤカの所…いつてあげよ？今きつと一番辛いの…アヤカだよ？」

そう言つてフィルがリットを離すとリットも笑顔を返す。リットの手を引いて走り出すフィル、空は真っ赤に染まってまるで丘の上の血溜りが天まで染め上げたかのようにだった。

アヤカは自分の宿屋に戻っていた。自分のベッドに女の子を寝かせ、目立つ青アザや傷口にガーゼやら絆創膏を貼つて処置し、栄養剤の点滴を打つ。ボンヤリとベッド脇の椅子に腰掛けて窓の外を眺めるアヤカの所に、慌しくリットとフィルが部屋に入ってきた時には、青白かった女の子の顔は健康的な色を取り戻しつつあった。

「アヤカ…その子、大分元気になったな」

「リット…さっきはごめん」

アヤカはリットに顔を向ける。

「いいさ、仲間だろ？」

「なーんて言ってるけどさっきまでリットは…もごがっ！…！！！！！！」

リットはアヤカに笑顔を返しながらフィルの口を手でふさぎ、それを見てアヤカの顔にもようやくやくいっもの笑顔が戻る。

「ん…は…はあはあ…つかれた…。で…何があったのよ？、あたしにも説明しなさいよ」

リットの手から逃れて荒い息つくフィルが尋ねるとリットが簡単に事情を説明する。

「ふーん」

それきりフィルは黙り込む。

「あたしさ、昔、魔王の国に居たんだよね」

アヤカは女の子の頭を撫でながら呟いた。

「あたしもこの子と同じ、兵士たちの娯楽のために使われ、犯され、殴られ、焼かれ…色々された…重ねちゃったのかな…昔の自分に…」

アヤカが撫でてしていると、女の子が大きな臉をパツチリと開く。

「おはよう」

アヤカが女の子に笑いかけると、女の子は目を丸くする。

「…どちら、様？」

口のなかが痛むのか、絞りだすような声で言った。

「あたしはアヤカ、そっちの二人はリットとフィル…貴女、お名前は何？」

女の子は躊躇うような素振りを見せるも、

「【リット】…【リット・キャネディ】」

そう答えながら警戒しているような視線をアヤカに向ける。

「リトちゃんか…大変だったね。もう、大丈夫」

「え?…え?…ふ…ふあ…ふああああん」

アヤカがリトを抱き締めると、リトは何が何だか分からない…という表情をして動揺する。しかし直ぐに動揺が安堵に変われば、アヤカの身体を強く抱き締めて泣き出した。

フィルとリットはそんなアヤカとリトに暖かい眼差しを向ける…が、途中で何かに気づいたフィルがリットをジト目で見る。

「リット…」

「ん?どうしたフィル」

リットが顔を向けると、フィルは顔を真っ赤にして胸ぐらを掴む。

「な!…なんだよフィル!…ちよ」

「出てけ!…!」

リットはフィルによって部屋から締め出され、フィルは扉に鉤をかける。

「どしたの?フィル?」

アヤカもリトも突然の出来事に目をまん丸くしてフィルを見つめる。

「アヤカ、どうしたの？じゃないわ。聞くけど…リトの今の格好を説明しなさい」

言われてアヤカはリトに目を向ける。顔はガーゼや包帯で半面を覆い、身体は包帯とガーゼで覆われており、ボロボロの服は床に落ちて  
ている。

「…！」

「気付いた？」

「あ…気が回っていなかったわ」

アヤカはフィルに舌を出し、フィルは苦笑する。

「取り敢えず服ね」

「あたしにまかせなさい！」

アヤカはそう言って部屋を出ていく。

「リトちゃんだっけ？」

フィルはリトと向き合った。アヤカはものの数分で帰って来て、部屋に入るとリトに服を渡す。

「はい、リトちゃん。これ…きっと似合っと思っの。どうかな？東洋に伝わる浴衣って服なんだけど…」

「あ…有難うございます」

丁寧にリトがお辞儀をして浴衣を受け取った時、ドンドン…と部屋のドアを叩いてリットが叫ぶ。

「おい、アヤカ！フィル！外ヤバいぞ」

「あ…まあ予想通りよ、わかってるわ！」

「「？」」

アヤカはリトの手をつかみながらリットに答える。フィルとリトは頭の上にハテナマークを浮かべている。

「いいから、まずはリト来なさい！フィルはリットと一緒に着付けするまで外にいて！最悪リットと一緒に防いでて…！」

「あ…なるほどね、任せて！」

フィルはアヤカの様子から事態を把握すると、頷いて部屋から出ていく。

「な…なにが？」

わけも解らずにリトは手を引かれるままにアヤカの前に立ち、アヤカはリトの前に座りこむと手早く下着を履かせて浴衣を羽織らせる。浴衣は小さく、リトの太ももまでの丈しか無かった。アヤカは手早く帯を結び、靴を手渡す。

「？」

リトは靴を受け取ると、首を傾げる。

「街の連中に感付かれた…この街を出るわよ！」

「あ…」

リトは目を丸くして頷くと、差し出されたアヤカの手をつかむ。

【ドン！ガシャン！】 宿屋の一階から音がする。

「アヤカ！、奴らきやがった！」

リットは声を張り上げ、階段の入り口に隠れ剣をぬく。

「悪魔の人間を根だやしにしろー！！！」

掛け声と共に、町の人々が宿屋に突入する。

「お待ちせ！」

部屋のなかからアヤカがリトの手を引いて現れる。

「ふいゝ…間に合ったか…着替えが終わらなかったらどうするかとハラハラしてたんだぜ？よっしゃ！一、三人ぶった斬るか！」

「着替え終わらなかったらリットに目潰ししてリト抱えて逃げるだけだよ？」

「ちょー！！…フィル、おまつー！！！」

「はいはい、夫婦漫才はいいから…ほら、きちゃうわよ?」

「夫婦つて!!!」

アヤカに言われて抗議の声を上げるリットとフィル。抗議しながらもリットは階段を駆け上がって来た男の腹に剣を突き立て串刺しにして、その男の顔にフィルがとび蹴りを食らわせて階段の下に蹴り飛ばす。

「ぶっ!!!」

男は手に持った鍬を取り落として階段の一番下まで落下する。

「きゃあああ!」

すると階下で目の前に男が落ちてきた女性が悲鳴を上げ、その脇を抜けて悲鳴ではなく殺意の雄たけびを上げる男達が階段を上がる。

「フィル!俺から離れんな!アヤカ!!!リトを離すなよ!!!」

リットは言いながら眼前の男の腹を袈裟に切り裂く。

「へへ〜んだ!!!リットこそしくじるなよ〜…と、私も守られてはっかりつてもシヤクだからね!!!くらえ!!!」

そう言つてリットが懐をあさると五指の指に四個の黒い玉が挟まれており、それをリットに切り裂かれた男とその後ろからこちらに向かって来ようとする男の顔めがけて投げつける。

【ドカドカドカドカン！】 黒い玉はぶつかつたとたん爆発して、顔を焼かれた男達はバランスを崩して階下に落下する。

「ふふん みたか！フィル様特製火薬球、まあ…ソードガーディアン見たいな化け物相手には聞かないだろうけど人間ならこの通りよっ」

「…って余所見しない！」するなっ！」

エツヘン と胸を張るフィルめがけて飛び掛つてきた男をリットが一刀の下に喉を切り裂くとアヤカがリットの手を引きながらハイキックで階下にけり落とす。

「ひ！いい！！」

恐らく町の腕自慢たちだったのだろう、階上から落ちてきた彼らの死体を見ると、まるで火を見た蟲の如く離れる住人の群れ。

「今だ！！いくぞ、フィル！！」

その隙を突いてリットとフィルは階段を駆けおり、リットが目の前にいた青年を持っていた農具もろとも切り捨てるとフィルがそれを蹴り飛ばして道を開く。

「息子を！よくもおお！！」

中年の男が飛び出してくるも

「邪魔だ！」

【ドシュー！！】 リットは容赦なく的確に心臓を貫き、その中年の男の死体を剣に刺したまま盾にして一気に入り口まで進む。

「ほらほらっ！！…手加減抜きなんだからっ！！…近づくと痛い目みるんだからねっ！！！！アヤカとリトも早く！！！」

フィルはリットの後ろから周囲に火薬球を投げつけて、恐怖して躊躇している村人の顔を的確に焼いて戦意を喪失させていく。入り口までたどり着くと、リットは剣に刺した中年の男を蹴り飛ばしながら入り口を塞いでいた男を切り捨て、四人は外へ飛び出す。

「はあ…はあ…はあ…」

さすがに肩で息をしながら走るリットにフィルは話しかける。

「リット？」

「ああ？」

【バチン】 思い切り背中を叩く。

「つてえええ！！何すんだフィルっ！！！」

「あははは、リット顔こわい…ほら、笑顔笑顔！！」

「っ…！！…はは、ありがとな。」

「うんっ…！！」

「ああああ…！！もう、いちゃつくのは後よっ…！！」

「「いちやついてるわけじゃ」「ないっ！！！」ねえっ！！！」

そういったやり取りをしていると徐々に町人が追いついてくる。流石に全員疲労の色が隠せなくなってきた。そのとき

「【魔よ、火となりて我に応え、炎の業火を用い灼熱の大地を形成せよ】」

リトがアヤカに手を引かれながら魔法を詠唱する…するとアヤカを握っていない方のリトの手から小さな火がこぼれ落ち、地面に落ちれば瞬く間に炎の海が広がって追ってくる街人達の行く手を阻む。

「これで少しは時間が稼げます」

「リト！？あなた魔法…！」

リトは照れくさそうにアヤカにウィンクした。

「恐ろしい子！」

アヤカは顔をほころばせて走り続けた。先頭を走るリットが叫ぶ。

「このまま西門から出るぜ！！！」

「アテ…あるの？」

「ねえヨ！！でもサンドバックにされるよかましだろっ！！！！！！！」

「確かにまたサンドバックには戻りたくありませんね」

「私もそんなの嫌〜…あ、でもでも…東から来たんだから西に行く  
ほうがお宝がある気がする〜」

「はあ…確かにそうね。仕方ないか…」

アヤカが苦笑しながらそう答えるとリットは大きく頷き、フィルは  
元気に、リットははにかみながら笑顔を向ける。

しばらく走り続けるとリットの目の前にゲノム帝国の鎧を着た兵士  
たちが立ちはだかる。

「じゃあまだああああ!」

【ザシュ】 リットは剣にレイブンをこめて切りつけると、剣は眩  
い輝きを放ちながらゲノム帝国の兵士を鎧ごと紙でも切るかのよう  
に切り裂く。

「うんうん、明らかにお前らヤラレ役フラグだよねえ〜」

【ドドン!】 フィルがばら撒く火薬玉は兵士たちの鎧の中に投  
げ込まれていき、鎧の中ではじめて肌を焼く。

「そうそう!黙って道を空けなさい!」

【ガイン!!ゴイン!!】 アヤカがレイブンをこめて投げる湾曲  
刀はブーメランのように手元に戻っては再び投げて兵士たちを次々  
に打ち倒す。

「ごめんなさい、通ります」

【ドガン!!!】 リトがアヤカに手を引かれながら手のひらに魔力を貯めて、それを門に向かって放てばたやすく門は砕け散る。

「よっしや!」

「そこまでだ!」

外へ飛び出たとしたリット達の前を30人を越えるゲノム帝国の兵士たちが塞ぎ、更にリット達の背後も町中から出てきた30人も兵士たちに塞がれる。

「な!」

「やられたわね…さっきのは囷よ…」

「うう…だからあんなにやられ役フラグビンビンだったのねえ…」

「まずいです…流石にこの人数を吹き飛ばす魔法は…詠唱に時間がかかります…」

囲まれたリット達は互いに目配せしてリトを中央に囲んで背を向き合わせ、リットは剣を構え正面にいる隊長らしき男を睨み付ける。

「勝ち目はない、投降する気はないか?」

隊長らしき男は余裕そうな面持ちで笑顔を作る。

「投降はさせても生かす気はねえだろ?」

リットは苦笑しつつ肘で背中にいるリットを小突くと、リットは小さく頷いてから小声で呪文を唱える。

「…【我が命において魔を雷と化し、我が命に従い賜え】…」

「やむを得んな…かかれ」

隊長らしき男が剣を引き抜き、剣先をリットに向ければ、囲んでいた兵士たちが一斉に駆け出す。

「はあっ？やむを得ん？…頼むからどうやむを得んほど説得したのか聞かせてほしいぜ！！」

隊長らしき男の剣をリットが受け止めて喋ればほかの二人もリットの詠唱までの時間稼ぎ…というリットの意図を察して防御をメインにしながら眼前の兵士と切り結ぶ。

【ギン…ガン…ギン】 リットは恐らく切るだけなら余裕であろう隊長をわざと切らずに剣撃を続ける。

「我々は投降のチャンスは与えたぞ？十分であろう？」

「はあん？…で、生かす気はねえだろ？…つてのに否定しなかったよな！…ま、嘘つくよりは何ほかましかだけだよっ！！」

「言つな小僧！偽りを言わぬのは正規兵のほこり！お前らごとき下賤な輩には理解できまい！！」

「へーへー…じゃあその下賤な輩の一人や二人…さっさとしとめて



【ギヤイン！】 リットの剣は男の剣を紙くずのように切り裂いて腕を削ぎ落とし、返し刀で腹を切り裂く。

「ぎゃああー、し…しにたく、ねえ！…よ…」

男はよろよろけながら背を向けて地面に倒れ、動かなくなった。

「行くぜ！」

リットは剣についた血糊を振り払うと鞘にしまい、駆け出す。フィルとアヤカとリットはその後を追いかけて、四人はすでに薄暗い闇の中へとつけていった。

「はあ…はあ…」

リットたちはリンドブルグスから西の舗装された馬車道まで走って来ていた。

「はあ…所でさリット、これからどうする？」

フィルに言われてリットは肩を竦める。

「だよね…考えてないよね…」

フィルはため息と共にアヤカを見る。

「何よ、あたしが問題起こしたからとか無しよ？」

アヤカが不満そうに口尖らしながらリトに目を向けると、リトは苦しそうに冷や汗をかいていた。

「リト？」

アヤカは膝を折って胸を押さえるリトと向き合う。

「リト？平気？」

リトは苦しそうな息遣いをしながら頷いた。

「はい…わたし…魔力回路が…まだ…完全じゃなくて…回路を補うために…ロッドがないと…疲労に…変わって…うっ…」

アヤカは今にも倒れそうなリトを支える。

「少し近くで休憩かしらね…」

「いや…」

アヤカに対してリットは首を横に振る。

「奴らは追ってくるだろう…これだけ近ければ隠れても見つかるだろうな…地の利は向こうにある。」

「あたしも…もたもたしてる暇はないと思う。」

「でも…」

二人に眉を寄せて抗議の視線を送った後、アヤカは再び心配する様子でリトに目を向ける。

「わたしは…大丈夫…です」

「唇を青くして言う台詞じゃないわよ！…仕方ない。あたしはリトとここに残るわ！」

アヤカはそう言うと、近くの茂みにリトを連れていこうとする。

「おい、アヤカ…」

「あたしなら心配いらぬ！…救援だって呼べるんだから…」

アヤカは携帯端末を操る。

「駄目だアヤカ！…」

「じゃあどっしるっていつのよ！…」

アヤカはリットに怒鳴り、リットと睨み合つ。するとアヤカの手をリトが引く。

「どっしたの？苦しい？」

アヤカに聞かれたリトは首を横に振る。

「この近くに…ウィプルへの…隠された…扉が…」

アヤカが目を丸くする。

「ホント!?!」

リトは頷き、リットを見る。

「決まりだな、案内頼む」

リトは小さく頷く。

「ちょっと!歩かせるって言うの?」

「大丈夫です…ホントに…大丈夫ですから…」

リトの顔色は以前として青く、そうは見えない。しかしリトはアヤカの手を引いて森の中へと入っていく。少し歩くと、そこには洞窟があり中には石版が置かれていた。

「【私の魔を持ちい。故郷への帰路を示せ…】」

リトの指先に魔力の光が点り、石版はまるで透明なガラスのように透き通り、向こうの景色が移しだされる。

「リット、ファイルは先に!」

リットとファイルは迷わず飛び込み、アヤカも後を追って中に飛び込み、リトも後を追う。

「うっ!?!」

リトはそこまで来て膝をついて口を押さる。

「リト…」

アヤカはリトを支え、リトはそのまま目を閉じる。

「変わるぜ、アヤカ」

リットは側に来てリトを背負うと、周囲を確認する。中は洞窟であり、外は暗い。

「ホントにウィプルなのかな…」

フィルは不思議そうにしている。

「取り敢えず行こう…早く休める所を探す」

リットの背中でリトが囁く。

「…外に出て、北に100メートル、村に入って…中央に形の…」

「わかった…もう喋るな。少し寝とけ。」

リットはそう言つとリトは静かに目を瞑り、そして三人は歩き出す。

洞窟を抜けると外は静かな森だった。

「みて、リット」

フィルが指差せば、木の一本一本が光っていた。

「ウイプルホタルね」

アヤカは光る木に目を向ける。

「ウイプルホタル？、高いの？」

「あんたの頭はそればつか？、メルヘンがないわねえ……」

アヤカは大きなため息を吐く。

「わかった、取り敢えず先行くぜ。」

リットはリットをおぶったまま歩いていき、アヤカ達は後を追う。暫く歩くと夜の闇の中に焼けただれた村が浮き上がる。

「ウイプルだな……」

「酷い……」

「……………」

アヤカは口に手をあて、フィルは言葉を失う。ウイプル村とは名前だけ、あるのは焼け焦げた民家の残骸ばかりだった。焼け焦げた村の家々を抜けて、リット達は先ほど言われた通りに真っ直ぐ村の中央を目指した。

中央には一つだけ、家としての形を保ったままの民家があり、全員

はそこに入っていった。

「取り敢えず中で休むか」

リットはそういって二人を見ると、二人は頷く。民家に入ったリットはリトを二階のベッドに寝かせ、自分達もここでたまった疲れに襲われて床に倒れるようにして眠りについた。

朝…リットが目覚めると、自分の上にフィルが乗っていた。

「おいフィル…」

「んあ！るっさい！」

目を閉じたままのフィルはリットの顔面をぶん殴ろうとする。リットは苦笑しながら手を捕まえて避けながらフィルを転がして退かし、辺りを見渡す。まだ太陽は昇ってはいない。アヤカは壁に寄りかかっているように眠っていた。リットがベッドに目を向けるとそこにリットの姿はない

「リット？」

リットは一人、リトを探しに民家を出た。暗い闇のなか、不気味に黒い漆黒の民家達が浮かび上がる。

「どこいったんだ？」

【……～……】

何処からか歌が聞こえた…それは小鳥の囀りのような歌声。リットは歌声のするほうへ向かって歩く。長い長い坂道が続き、リットの後ろ姿が坂道の終わりを告げる。

「？」

リットは振り向いて歌を止めると、太陽が顔を出してマバユイ輝きがその丘を照らす。

「……………」

マバユイ太陽の陽射しにより、闇に飲まれていた十字架達が姿を現す。その丘は十字架でうめつくされていた。

「あ…おはようございます」

リットは思い出したかのようにソワソワしながら頭を下げた。

「もう身体はいいのか？」

リットに言われたリットは頷く。

「はい、この森は魔力が豊富なんです…だから魔力酔いしたわたしの身体にはピッタリだったんです」

「そうか…」

リットは十字架を見渡す。

「お墓です。パパやママ…村の皆の」

「リトが作ったのか？」

リットは目を向けると、リトは小さく頷く。

「リト、俺と一緒に来ないか？」

リットに言われ、リトは首を傾げる。

「俺は、お前をここに一人置いていく事は出来ない。どうだ？」

リトは迷うように目を動かす。

「少しだけ…考えておいてくれないか？…」

「リットさん…」

「さー、朝飯の調達にでも行くか！」

リットはそう言って背をむけ、丘を降りていく。リットの背中を見ながら、リトはお墓に振り返り、一礼する。

「パパ、ママ…安心して？わたしには仲間が出来ました…」

「おーい！リト！早くこいよ！何が食えるのかわかんないだろーが  
！…」

リットの催促の声に、リトは振り返ると、リットの方へと駆け出し

た。

その日。女の子には歳の離れた沢山のなかまが…出来ましたとき、  
女の子は思いました。もうひとりぼっちじゃない…。

【国境を越え…】（前書き）

焼け爛れ蹂躪された村【ウイプル】へとたどり着いたリット達は、  
トレジャーハンターの今後の活動を円滑に進めるため、一度ゲノム  
領を離れるべく国境を越える事にするのだが？……

【国境を越え…】

リット達がウイプル村跡に到着した次の日の朝、朝食を取る仲間を同じテーブルで頬杖について見ながらリットは思わず呟く。

「女の子ばかりだよな…」

その一言に、三人の少女は訝しげな目を向ける。

「なにを今更言ってるのよ…何？イヤなの？」

ため息混じりに肩まである黒髪を頭の後ろに束ねた少女、フィルが眉を寄せて答えた。

「うーん…こういうのって男の夢…っていうやつじゃないの？その割りには嬉しそうじゃないわね？…あ、それとも誰かと二人つきりがよかった…みたいなの？…ならちよつとそれが誰なのか言ってみなさいよ」

その隣でルビーの様な赤い長髪と赤い瞳の美少女、アヤカがからかうような口調で答えながらニヤニヤ目線をリットに向けつつ、大皿にもられたてんこ盛りの肉をパンに挟んで口に運ぶ。それを聞いてフィルはジト目をリットに向ける。

「ばっ…お前らな…」

「お味は如何です？」

リットが慌てて二人に反論しようとした時、アヤカに向かい合うよ

うに座っている薄く紫がかった長い白髪を犬の垂れ耳のように頭の左右に分けて垂らした女の子、リトがそこに助け舟をだすようにアヤカに料理の味を尋ねる。するとアヤカもリットをからかうのを止めてリトの頭を撫でながら答える。

「ん？とっても美味しいよ。小さいのにパンが焼けるなんて偉いのね〜…どっかのお嬢様にも見習わせたいわ〜…きつと将来はいいお嫁さんになるわよ〜」

「えへへ〜…」

アヤカがチラチラと視線を隣のフィルに向けながら言うつと、

「うぐつ！…あ！あたしだって料理くらいできるわよ…！！」

フィルは思わず椅子から立ち上がらなばかりの勢いで言う。ちなみに昔、習ったと言ってフィルは自信満々で料理を試みせ、リットの家の台所を爆発させた事がある。

「あら？わたしは何処の誰とも言っていないわよ？、自覚してるの？」

「な！！なにをー！！！！」

フィルは顔を真っ赤にして掴み掛かりアヤカの身体を揺する。アヤカは揺すられながらも余裕綽々…といった笑みを浮かべている。

「け！…ケンカはだめですよお！」

リトはおろおろと二人をなだめようとす。そしてリットは……といつと「もう慣れた」と言わんばかりに

「でまあ、これからなんだが……」

と切り出し、するとフィルとアヤカは手を止めてリットに目を向ける。

「一先ず、国境を越えて……【ウインホーバロン】に行きたいと俺は思ってるんだけど……」

「ウインホーバロン？」

フィルとリットは「そこどこ？」と言わんばかりに首を傾げる。

「フィル……リットはともかくあんたは知ってると思うけれど……まあいいわ。けど、ウインホーバロンかぁ……どうしてまた？」

アヤカはそう言って背もたれに体重を預けながらリットをみる。そのスレンダーながらもしなやかで美しいボディラインにリットは思わず見とれながらも、

「……まあリンドブルグスの一件で恐らく俺達はお尋ね者だ。ならゲノムの領土にいたら安心してトレジャーハンターも出来ねえ」

そう言いながら頬を軽く叩いて気を取り直す。アヤカはそんなことなどお構いなしに天井を見上げて口笛を吹いて、

「なるほど……ね」

と小さく呟く。

「それでウインホーバロン？」

フィルが意外そうに尋ねると、

「ああ、ただそこに行くにはゲノム領とアレクセイ領の国境を抜けないきゃなんねえけどな」

「そうそう、帝国はご丁寧に門を作って検問してるしね…絶対に通せんぼしてくるよ」

リットが答え、アヤカが椅子に寄りかかって天井をみたまま足をプラプラさせながら付け足す。

「だな、それが問題…ファイフさんはどうやってあの門を抜けたんだろうな」

リットが腕を組みながら不思議そうに言うと、アヤカは笑いながら答える。

「多分…普通に真つ正面から門を破った…かな、ファイフさんは」

「……………はあ!？」

リットは口をあんどりと開ける。

「中央でフリルさんに鍛えられたことがある親衛隊や聖騎士団を間近で見っていた王都の主力部隊ならともかく…あんな辺境は元々左遷されたような将と大した訓練もしなかった部隊よ？それがさらに落ちぶれて毎日一般人を検問で脅してるだけの兵士が数だけ何千人集まっても、ファイフさんには勝てないって事よ」

アヤカは当然と言った様子で言う。

「じゃあ、今は増員してると思う。下手したらまともな指揮官の一人や二人送られててもおかしくないよね」

フィルがポツリと呟く様に言い、アヤカもリットも頷く。

「一先ずは、国境添いの街【セントブルグス】まで行って様子を見るしかねえな…実際にどうなってるのかも此処で話してるだけじゃ見えてこねえ」

リットとアヤカとフィルが大まかな方針を決めた時、難しい話についていけないリットは一人コックリコックリと居眠りしていた。

「じゃあ仕度したら、出ようぜ。ほら…リット、行くぜ?」

「はっ!、ご、ごめんなさいっ!」

リットが立ち上がって肩を軽く叩くと、リットは恥ずかしそうに少し頬を染めてあたふたする。

「気にすんな。旅仕度だ、リット」

リットは大きく頷いて慌てて自分の部屋へと走っていく。他の三人は洗濯した衣類をナップサックに押し込む以外に今更整理する持ち物等無いに等しく、すぐに旅支度を終えて部屋の外で待っていた。

「お待たせしました」

部屋の中からドタバタと慌しい音が収まると、リトが部屋から出てくる。リトは白いシャツに黒のスカート、その上から魔術刻印を描いた黒のマントを羽織り、頭には三角帽子を被っていた。さらに背中からは龍の顔を形作った長柄の杖が覗いており、その格好は何処からどうみても魔法使いである。アヤカがそれを見て、

「ゲノムは今能力者の排除に躍起になっているわ。魔法使いだって宣伝して歩いてどうするのよ…」

ため息混じりにそう言いながら部屋に入ると中から緑色のマントを持ってきてそれを手渡す。

「リト、こっちのマントにきなさい！三角帽子も持って行くのは良いけど着けたらだめ！」

「えー！黒がいい…」

「もー…なら持って行くだけにきなさい。取りあえずそのマントは目立つから、こっちを着て」

「うん、わかったよ…」

母親のように世話を焼くアヤカにリトは渋々頷いて、黒の魔術刻印のついたマントをアヤカの持って来た緑色の普通の刺繍入りのマントに変える。こうして見るとリトは何処かの貴族にも見えるからアヤカのセンスは大したものだとリトは感じた。

「おまえもアヤカに着付けしてもらえよ」

リットはフィルに思わず言う。フィルは赤いジャケット赤い半ズボ

ン、黄色のシャツといった目立つことこの上ない格好だった。

「うっさい」

そういいながらフィルはリットを蹴ってそっぽを向く。そうしてあらかた準備を整えたリット達一行は…

「んじゃ！、行くか！」

リットを先頭にウィプルを後にした。

「リットさん、こっちにワープ石版のある洞窟がありますよ？」

暫く歩くと、リトがくいくい…とリットの服のすそをつかんで言いながら暗い森の中を指差す。

「なんか不気味な雰囲気だな…大丈夫なのか？」

リットに聞かれ、リトは少し身を強ばらせる。

「えと…凶暴な魔物が多いです…けど、セントブルグス側に通じる森の出口に行けるんですよ…」

「ああ…なるほど。危険だけれどゲノムの一般兵に見つかることはグッと少なくなるわけだ？」

「はい」

リットはアヤカとフィルに目を向ける。

「リットの好きにしたらいいよ」

と、アヤカ。そして

「なんか、お宝ありそう！行きましょ？」

爛々と目を輝かせたフィルに言われ、リットは苦笑混じりに頷く。

「わかった。リト、案内してくれ」

リトは嬉しそうに頷くと、先頭に立って暗い森の中に入って行き、残りもその後が続く。

「にしても……」

森の中は太陽の光が届いておらず、薄暗く不気味な雰囲気醸し出していた。

「お化けでぞ…来なきゃよかった…」

アヤカは一人怯えていた。

「あら…怖いのか？アヤカ…なんなら手をお貸ししましょうか？」

フィルがニヤニヤと笑って、ここぞとばかりにアヤカをからかう。

「ひっ！必要無いわよ！言っとくけどね…別に怖くなんかないのよ

「単に……そう、単にちょっと「お化けが出そうな雰囲気」が苦手っていうだけでお化けそのものなんかへっちゃらなんだから!!」  
アヤカは今にも泣き出しそうな表情をして無理やり強がると、フィ  
ルは何処までも愉快そうにするのだった。

「……」

リットは右手を剣の柄に触れて周囲に気を配る。

【ガッツ!】 急にリットの左側の草が揺れる。

「……」

リットが目を向けるとそこには何もいない。

「皆さん、注意して下さい……」

リットが額に汗を流し緊張した様子でそういつと、アヤカとフィルも  
真顔に戻って周囲を注意深く伺う。

それは上から、左側から、右側から……四人が森に入り込んだときか  
らずつと、久し振りに迷い込んだ美味しそうな獲物を狙って息を潜  
めていた。

そして数秒後……上にいた一体がついに動いた。

【べちゃ!】 アヤカの背中に何かかへばりつく。

「な!……へ?」

それは通常では在り得ないほどの太く粘り気のある蜘蛛の糸だった。

「きゃああああっ!!」

そして次の瞬間、アヤカの華奢な身体が宙を舞って糸を放った主の元へ引き寄せられ、網の目状に張り巡らされた糸に身体を張りつけられる。

「く!!」

アヤカは懸命に手足に力を入れて抜け出そうとするが、蜘蛛の糸はびくともしない。

「アヤカ!!」

リットがアヤカに気をとられて周囲への警戒が甘くなった瞬間…草木を飛び越えて巨大な二本の鎌がリットの体に襲い掛かる。

「!!」

リットは其れでも致命的に踏み込まれる前に察知して剣を抜き、振り向きざまに半ば適当に薙ぎ払う。

【ガイイン】 殺気目掛けて薙ぎ払ったリットの剣は襲い掛かってきた二本の鎌にぶつかり、弾き返す。

リットが体制を整えながら向き直ると、それは巨大な螳螂だった。螳螂は素早い動きでリットに肉薄し、巨大な鎌を振り回す。

「アヤカさん！！それは【フィッシュャースパイダー】…今助けます  
！！」

リトは急いで杖をアヤカに向けて呪文を唱え始める。

【魔よ、火となりて玉を…】

【ガサツ！】　しかし同時に背後の茂みから魔法の詠唱に入ったり  
トに巨大な手が襲い掛かる。

「!?!」

リトは詠唱の隙を突かれてなにもできず、魔法の詠唱もとまりそう  
になる。

「でえい！！…リトちゃんは早くアヤカを！！こっちは任せて…ん  
っふっふ…お化けかとおもったら単なる虫じゃない！！」

しかし間一髪、フィルがその手に対して飛び蹴りを食らわせて弾く。  
フィルはリトにウィンクを送ると、茂みの向こうから顔を出した巨  
大な黄色い甲殻に頭に向かって間合いを詰めていく。

【キシヤアア！】　巨大蜘蛛がもがくアヤカを八本の脚で押さえつ  
けると、その口からストローのような針をのばして首に突き刺そう  
とする。

「い…いやあ…」

アヤカは恐怖に顔を歪め、唯一動く頭を動かして必死に針から逃れようと顔を反らす。

【フレイムシユート!!】

そこにリトが呪文の詠唱を終えて、竜の顎を象った杖の先端から炎の玉を巨大蜘蛛目掛けて打ち出す。蜘蛛はすんでのところかわすも炎の玉は蜘蛛の巣を燃やして大穴をあけて硬度を奪い、蜘蛛もろともアヤカの身体を下に落とす。

「なめんな!このスケベ蜘蛛!!!」

落下する途中で蜘蛛の巣の束縛が一部解けて腕が動くようになるや否や、アヤカは腰の湾曲刀を抜き放って蜘蛛に向かって投げる。投げられた湾曲刀はまるで意思があるかのごとく宙を舞い、蜘蛛の顔を切り捨てて腹に突き刺さる。

【ギユウウウ!!!】

巨大蜘蛛は不快な叫び声をあたりに響かせながら地面に激突する。アヤカは地面への激突に合わせて膝を曲げて衝撃を和らげながらゴロンと後ろに倒れるも、柔らかい地面の上であった事が幸いして無傷で着地する事が出来た。

「ふっふっん…この程度…まあ、私にあったのが運のつき…トレジャーハンターにして昆虫ハンターのフィル様の力を見せてあげるわ

っ  
」

フィルは茂みを越えて現れた黄色の甲虫をみてニンマリと笑いながら腰につけた袋を手にもつ。

【ギチギチギチギチ!!!】

甲虫はその長い二本の腕を伸ばして中心の腕をザワつかせながら二本の脚でたっており、次の瞬間にはフィルに向かって飛び掛る。

「かかったあああ!!!盗賊のトラップ術の一つ…必殺、マキビシ!!!…あなたのその形…どうみてもアンバランスよ。足元怪我してこけちゃいなさい!!!」

フィルは袋の中身を地面にぶちまけながら大きく後ろに飛び下がる  
と、地面にはひし形の各頂点に鋭利な棘の突いた小さな鉄の塊が散らばり、甲虫は腕を空振りした後それを踏みつけてもだえ苦しむ」

【ギジュウウウ!!!】

「はいはい、それに甲虫って…案外お腹は柔らかかったりするのよね…でりゃあああ!!!」

フィルは着地するとすぐさま前に飛んで、悶え苦しむ甲虫を思い切り蹴りつけるとうつ伏せに倒れさせて踏みつける。

【フレイムシュート!!!】

「なめんな!このスケベ蜘蛛!!!」

「お〜…アヤカも助かったみたいねえ…よしよし」

フィルは足の下でピクピクと痙攣しながら弱弱しい叫び声をあげる  
甲虫を踏みつけながら、アヤカとリトの声のした方に安心したよう  
に目をやる。その時、

【ギチギチギチギチ！…！】

足元の甲虫と同じ声で…しかしそれよりもはるかに巨大な声を出す、  
足元の甲虫の数倍もある甲虫がフィルの前に現れる

「ええと〜…お母様？…それともお父様？…あはは…許して…くれないよね…」

思わず引きつり笑いで固まるフィル。

【ギュアアアア！…！】

「うわああああ！！…無理無理いいいい！！…これは絶対に  
一人じゃ無理いいいい！！」

甲虫の腕がフィル目掛けて振り下ろされれば、慌てて足元の甲虫を  
踏み台に跳びおりてよけるフィル…すぐさまアヤカとリトの方へと  
駆け出した。

「ち…はええ…」

同じ頃リットは螭螂が振り回す二本の鎌を剣でさばきながら何とか渡り合っていた。巨大螭螂の振るう鎌はリーチも長く、刃は強靱な鋼のような高度をもち、リットといえどそう楽々と退治できる相手ではなかった。

「くそ…早くしねえと…」

しかし普段のリットであれば、強大な武器を持っていると言えどこの程度の単調な攻撃パターンの相手に此れほど苦戦することはない…しかし、今のリットには余裕がなかった。目の前でアヤカが巨大蜘蛛にさらわれ、周囲に他にも殺気を感じた以上はフィルヤリトの身もこのままでは危うい…そんな状況がリットの剣に焦りを生む。焦りは剣さばきに欠かせないコンマ数秒の冷静な判断を狂わせ、隙を見つけてもそこに致命的な一撃を叩き込むまでに至れない。そしてそんな状況がさらにリットを焦らせていた。

「ちっ…くそ…このっ…」

【ギゲアアアア】

【ガチイイーン】 螭螂の一撃が焦りをはらんだリットの剣に生まれた隙を逆について剣を宙に跳ね上げる

「ぐっ…!!!」

奪われた武器を拾いに行く…普段のリットであればそれがどれほどの致命的ミスで在るか判断したであろう。無防備に目標に…しかもその初動さえみれば何をするか、動きのコースまで明らかにわかるその動きは戦場では命を落としかねない。しかし焦るリットは思わず地面に突き刺さった己の剣に向かって思い切り飛びつこうとする。

【ギャアアアア！！！】

螭螂がその隙を見逃すわけもなくリットへむかって大きく跳んで両の鎌を振り下ろす。

「まずっ！！！！！」

気づいたときはすでに遅い。螭螂の鎌はすでにリットの首筋と背中に向かって迫り、リットには今それを防ぐ手立てがない。その瞬間

「リット！！！！！！」

「アヤカ！？」

アヤカの声に思わず振り向くリット。目の前には高速で自身の方へと飛来する湾曲刀が合った。

「おらあああ！！！！」

【ガチィィン】 リットは空中で湾曲刀を掴み取ると、そのまま体をひねって湾曲刀を振りぬいて二本の鎌を弾き飛ばす。

「と…無事だったのか！」

「話は後！！！！危ない！！！！」

リットは着地すると体制を整えて湾曲刀を構える。螭螂は弾かれた鎌をもう一度構えて再びリットに追撃をかける。

「はあ！！」

リットの瞳には迷いがなく、動きにも無駄はない。飛び掛る蠍の動きを冷静に見切ると、振り下ろされた鎌を紙一重で交わし、剣を横に払って鎌を弾くと体制を崩した蠍の懐に難なく間合いを詰める。蠍は空振りした上に弾かれた鎌を戻せぬまま無防備な腹部をリットの前にさらし

「これで…終わりだ！！！！」

【グシュ…】 腕を上手くたたんで最小限の動きで真上に突き出したリットの湾曲刀は蠍の顎をやすやすと貫いて頭頂部を突きぬけて

【ドスン】 リットが突進の勢いを込めた前蹴りを放つとピクピクと痙攣しながら地面に倒れる

「はあはあはあ…なめんじゃ…ねえ…」

リットがそういつて蠍を見下ろしながら呟くと突然背後からフィルの悲鳴が響く。

「きゃあ！！」

リットが驚いて振り向くと、フィルが吹き飛ばされてぶつかってきた。

「うおー！」

リットはフィルの身体を受け止めるも勢いを殺しきれず、フィルを

庇って下敷きになりながら地面に倒れる。

「フィル!?」

「フィルさん!!」

フィルの飛ばされた方からアヤカとリトが駆け寄ってくると、その背後からは巨大な二足歩行する甲虫が残りの脚を広げながら追いかけてくる。リトがフィルを横に退かせながら体を起こすとまさに口中が巨大な腕を横殴りに振り回そうとしていた。

「なっ…なにがあっ…っ…ってアヤカ!リト!しゃがめっ!!!」

「!!!」

二人はリトの声にとっさに身を伏せて甲虫の攻撃を避ける。

【ギイイイ!!】 甲虫が今度は空いていた腕で伏せたリトを捕まえると、腕を巻きつけて握りつぶさんばかりにリトの小さな身体を締め付ける。

「う!!!あああっ!!!」

リトの体はミシミシと軋み、顔は苦悶にゆがんで絶叫する。

「リト!!!」

アヤカが振り向きざまに石を投げつければ、石はジグザグに動きながら腕をすり抜けて甲虫の顔面を捕らえて片目を潰す。

【グイイイイ！】 甲虫はリトをアヤカに投げつけながら、片目を押さえて後退る。

「おおおおおお！……！」

リットは地面に刺さった自分の剣を取ると、両手に握り閉めてレイブンを込めながら甲虫目掛けて駆ける。

「く… 【魔よ・我が命により雲を作り酸の雨を降らせ】 …」

リトもよろよろと立ち上がると詠唱をはじめ、アヤカも直ぐに甲虫に向って駆け出す。

【ギイイイ！…！】

甲虫は鳴き声をあげながら左右の剛腕を振り回し、二人を牽制する。

「せえい！…！」

リットは気合を込めて豪腕を掻い潜って近づくと、剣にレイブンを纏わせて頭目掛けて振り下ろす。すると甲虫はそれを両手を顔の前にクロスさせて受け止めようとして

【斬】 レイブンで淡く輝くリットの剣は甲殻に守られた両腕を一刀の元に両断する。

「くたばれええ！…！」

アヤカはリットの背後から飛び出して、燃えるような赤い髪を靡かせながら顔面に飛び蹴りを放ち、そのまま虫の頭を踏みつけて空中

に飛び上がると空中で両手に持った二つの石をレイブンを込めて投げつける。

【鈍】 レイブンで輝く石は二の腕辺りで両断された手を掻い潜って、鈍い音を立てて腹部を突き破ってめり込む

【ギョアアアア!!!】ー悶える甲虫、ジタバタと暴れすでに周囲にリットたちを認識する様子もなく腕と足を振り回す

【アシッド・ストーム】

そしてリットの詠唱が完了すると暴れる甲虫目掛けて酸の雨が降り注ぎ、甲殻を溶かして変形させていく。

「でえええ!!!」

リットが先ほど振り下ろした剣を上向きに切り上げる。剣は甲虫の体を尻から頭にかけて真一文字に切り上げて両断し、真つ二つになった甲虫は切断面から血飛沫をあげながら倒れ、動かなくなった。

「フィル!」

リットはフィルに駆け寄り抱き上げる。

「フィルさん!」

リットとアヤカが遅れて駆け寄る。

「頭を打って気を失ってるだけだな……」

リットは二人を見上げてそういうと二人は安堵の笑みをこぼし、

「なあんだー…」

アヤカは心配して損したと言いたげに背を向ける。

「それで…リット、石版まではまだ結構あるのか？」

「いえ…もう個々まで来れば見えるのですが…」

リットが尋ねるとリットは周囲を見渡してキョロキョロと何かを探し始め、

「あ！、ありました！あの洞窟です！」

リットが指差した方向には、蔦で埋まっただけには解りにくいのが、洞窟の入り口らしきものがあつた。

「あん中か…しゃあねえ…」

リットはフィルをおぶって立ち上がり、洞窟へと歩き出すと二人もその後が続く。

「こりゃ入り口は完全に蔦で塞がってるな…」

リット達が洞窟の入り口に着くと、洞窟の入り口を蔦が覆って塞いでいた。

「蔦を切った瞬間なから…とかねえよな？」

リットは念のため聞いてみたが、リットは首を横に振る。

「分かりません…」

「じゃあ迂闊なことではできないか…」

リットは頷くと数歩下がり、

「リット、焼き払えるか？」

そういつてリットのわきに立ち、アヤカにフィルを預けると剣を鞘から抜いて構える。

「はい…【魔よ、我が命を受け炎の弾丸となれ】」

リットは詠唱して杖の先を蔦に向ける。

「【ファイヤーダート!!】」

【ドドドン】 小さな炎の弾丸が三発、蔦に突き刺さり。燃え広がった炎は一気に洞窟を覆う蔦を焼き払う

『キュキュウウ!!』 と、炎が燃え広がるや否や、白い毛玉が飛び出してくる。

「やろっ！…！」

「待って下さい!」

斬り掛かるうとするリットをリットが止める。

『キュキュウ!』

白い毛玉はそのままポンポンと跳ねてリットに飛び付く。

「この子はこの森の守り神です。敵ではありません」

リットは毛玉をクッションのように抱き締めて撫でる。

「わ〜!モコモコ!」

アヤカも抱き締めたそうに目を輝かせて毛玉を見つめる。

「守り神?」

リットは首を傾げながら剣を鞘に納める。

「はい、ウィプルの守り神【ケモック】とい…きゃははははっ!」

リットは急に笑いだす。見ると、ケモックがリットの首筋をペロペロ舐めていた。

「きゃはははは!く!く!くすぐすたいです!や!やめっ!きゃはははは!」

擦ったそうに身悶え、涙を流して引き剥がそうとするがケモックは離れようとしない。

「じらー、はなれなさい」

アヤカはケモツクの頭(?)を掴んでリトから引き剥がすと地面にほおる。

「はあ…はあ…」

「こんな弱っちそうなのが守り神ねえ…」

リトは一気に疲れたようにグッタリと座り込み、リットは少し屈みこんでまじまじとケモツクを見る。

「私には単なるスケベ毛玉にしか見えないけど？」

アヤカはリトを立たせてジト目でケモツクをみる。

「ケモツクは魔物も人間も襲いませんし、逆にケモツクが襲われることもあります。無害だし食べてもかなり美味しくないので…」

「なるほど。守り神っていうよりも『この森で捕食者がいない』最強?」守り神』みたいな構図なのね」

「そっか、なら無視してさっさと石版潜ろうぜ…」

リットはアヤカから受け取ってフィルを再びおぶると、三人は洞窟の中へと進んでいく。

「あれ？」

暫く歩くとアヤカがふと気づいたように声を挙げて洞窟に生えたキノコに目を凝らす。

「このキノコ……」

「アヤカ……おいてくぜ？」

リットに言われるがアヤカは手で制止する。

「待つて、リット……」

アヤカは携帯端末を操り、キノコに画面を合わせる。

『リビング茸、アグネシア大陸で稀に見つかるキノコ。毒はなくその味と香りはは都会に群生する、松茸やトリュフを遥かに凌駕し、キノコの王として扱われ、その価値は一房5万ギ……』

それを聞いたリットはフィルを下ろした。

「採るぞ！！全部採るぞアヤカ！！喰いたい！！いや！絶対喰う！！」

リットが興奮した様子で叫び、洞窟中に生えるリビング茸を次々とっては魔物の皮の袋に押し込む。

「あたり前じゃない！あたしも食べたいから採るわ！！」

アヤカも興奮状態でキノコを探りはじめた。

「んっ…」

気を失っていたフィルが目を覚ます。

「リト？」

リトはフィルに笑顔で応える。

「あ、フィルさん！気付いたんですね…もうお体の方は大丈夫ですか？」

「うん、平気……」

フィルはリトにそう返すと、何やら目を血走らせて床や壁を探し回るリットとアヤカを見つめ、ジト目になる。

「あの二人…なにしてんの？路銀の入った袋でも落とした？」

リトはいいずらそうに苦笑しながら。

「リビング茸ってキノコを採ってるんです…これですね」

そういつてリトが足元に生えていた一房をもいで差し出すと、とたんにフィルの表情が一変する。

「リビング茸！！！？キノコの王様！！！？」

フィルは慌てて目の前のリビング草を掴み取り、見つめる。

「ふおお！！！ホントだああ！！！！」

三人は洞窟中のキノコを採るのに夢中で時間を忘れていたが、洞窟を抜けると既に夜になっていた。そこで、リット達はセントブルグス荒野に入らずに洞窟の出口付近でキャンプすることにした。料理はもちろんリビング草で、リットとフィルは勿論のこと、普段食べる量を気にするアヤカですら貪るように食べていた。

「リットは食べないの？」

「キノコ…苦手なんです」

リットは携帯食料の魚の干物を焼いて、チビチビ食べていた。

「あんまり食べ過ぎて、売る分が無くならないようにしないと…お金があれば馬が欲しかったところだから。これだけあればセントブルグスで買えそうね」…「やっと楽ができそう」

フィルはキノコを食べながら、パンパンだったナツプサックが萎んでいくのを見て残りを計算する。路銀は足りているが、多過ぎて困る事はない。

「馬か…国境を越えるにしても歩きじゃ少し辛いもんな…」

リットは頷いて腕を組む。しかしアヤカが眉を寄せて、

「でもさ、国境越えるなら目立たない？馬なんて高いものは普通の旅人じゃ買えないわよ？あたしたちも偶々あのキノコのおかげでっという感じだし…」

と、いうと三人はそれぞれ

「じゃあ馬は無しだな…」

「え〜…やつと歩きじゃなくて楽できると思ったのに〜…ぶう〜…」

「あはは…でもフィルさん？馬がなくても馬を買えるくらいに路銀の余裕があるのはいいことですから…」

その夜、誰もが寝静まる中でリットはなんとなく眠れずにいた。すると急にアヤカが起き上がり、一人洞窟の外へ向かう。

「…アヤカ？」

リットはアヤカの様子が普段と違っていているのを見て、声をかける。しかしアヤカはリットには気がつかず、リットはアヤカを追い掛けて外にでる。洞窟の出口まで来るとアヤカの声が聞こえ

「…うん、うん…そうね、あ…そうそうこれからウィンホーバロ  
ンに行くの」

アヤカは少しトーンを落とした声で話す。リットが誰と話している

のかと思い、身を潜めながら洞窟の外を窺うと、以前アヤカが携帯電話と言っていた都会の無線で誰かに報告しているのが見えた。

「え？…うん、国境越えるよ…援護？…だってそっちはいま……うん、うん…ありがとっ…じゃあまたね…」

暫くするとアヤカは寂しそうに携帯を折り、通話を切って洞窟に戻る。入り口に差し掛かると肩をつかまれて声をかけられ

「なにしてたんだよ…お前」

リットが剣を抜いて睨んでいた。

「誰と話してた？、なぜウインホーバロンへ向かう事を報告した？」

「誰とでもいいじゃない」

「答える…今言えばフィルとリットには黙っておく。」

リットは今にも斬り掛かるうとしていた。

「言わなきゃ斬る？」

「別にアヤカの秘密主義はいい。ただどお尋ね者の俺達の居場所を報告されるのは見過ごせねえ…」

アヤカはため息を吐く。

「悪いけど、それでも答えられないわ…」

「そうか…なら力づくでその無線を奪って調べるしかないな」

「そう…確かに私は怪しいわ。今の行動をみてそうしないのはただのバカよ。でも」

リットが右足に体重を乗せて剣を振り出そうとして

これはリット達を陥れるためじゃない」

それを聞いてリットの体は止まる。

「信じていいのか？」

アヤカは頷く。

「ええ、アイドルは嘘をつかないから」

「へ…そうかよ」

リットは体制を戻して、鞘に剣を納めると背を向ける。

「悪かったな…陥れるためじゃないなら最初からそう言え。俺が剣を止められなければ死んでたところだぜ？」

「大丈夫よ。あのくらいの振り出しならリットならとめられるわよ。少し迷ってたわよね…いつもより踏み込みは小さいし振りは遅かったわ？…まあ、一言で信じてくれるかどうかは賭けだったけれど」

「余計なお世話だ。まあ、斬らないですむならアヤカを斬りたくないかねえよ」

「ふふ…ありがと。おやすみなさい」

「ああ…おやすみ」

朝：リット達はセントブルグスへ続く一本道を通っていた。

「セントブルグスか…手配書が回ってなきゃいいが」

んリットが先頭で呟く。

「大丈夫、なんかあったらリットが魔法でなんとかしてくれるよ！」

「わわっ！…わたしの魔法はそんなに役に立ちませんよっ！」

フィルにリットは控えめに突っ込み、その横でアヤカは笑う。

「でも、確かにリットの魔法って変わってるよね」

アヤカはリットを眺め、リットは首を傾げる。

「変わってる？」

アヤカは頷く。

「うん、だってあたしの知り合いはさ…」

指をピストルの形にしてフィルに向け。

「【スパーク・ウェブ】！…って」

「なんであたしに向けるのよ！」

フィルの突っ込み…もとい抗議を無視してアヤカはリトを見る。リトは目を見開いていた。

「アヤカさん…スパーク・ウェブって…いわゆる【失われゆく魔法】ロストマジックというものなんです。習得できた人が殆どいなくて、死んじゃったわたしのパパと【マリア】さん…あと4000年前にいた名もなき英雄さんしか使い手はいませんよ？」

アヤカは息を飲んだ。

「そうなの!？」

「ひゃう！」

リトはアヤカの大声に飛び跳ねて怯みながら頷く。

「はい。スパーク・ウェブ自体は上級魔法のようにどうやっても魔力や魔力回路が不足して使えないという類のものではなく、杖を用いなくても使える下級魔法なんです…と、言うよりも必要な魔力回路の量が杖を使わない下級魔法の中では桁違いだからなんです」

「魔力回路?…魔力じゃなくて？」

アヤカはわけが解らないといった顔を向けて首を傾げる。

「ええと…魔力というのは私達の生命エネルギーに根ざした精神活動で生み出される…【誰でも持つている力】なんです。筋力みたいに個人差はありますけれど精神をもつものならどんな生き物でも持っているんです。レイブンみたいに特殊なものではありません。」

「ふうん…じゃああたしも練習すれば魔力を使って魔法が使えるの？」

「それは無理なんです。魔力っていうものは持つていてるんですけど、それはあくまで精神活動…感情とか思考とか…そういうもののためにあるもので別に魔法を使うための力というわけではありません。それを世界の物理法則に干渉して具現化させる【魔法】として発動するために使うのが魔力回路なんです。魔力回路というのは本来物理的にはなんの効果も持たない精神エネルギーである魔力を物理的なエネルギーとして変換するためのもので、体内の魔力回路によって変換された魔力を呪文という【自分の精神を声という物理法則を媒介として世界に干渉する手段】を経て魔法として発動させるんです。魔力回路こそが魔法の発動の要といっても過言ではなく、それを魂と肉体に刻印する秘術は村の秘密で、これこそがウィプルが魔法使いの村と呼ばれる所以でもあります」

「なるほどね…で、それでなんで下級魔法なのに扱い難い魔法なの？」

「それはですね…上級魔法とか下級魔法とか…そういう区切りは【魔法発動に使う魔力の総量】で決まるんです。魔力回路というのは魔力を体から外に向けて出すためのもので、いわば蛇口とか水道管みたいなものなんです。それが多いほど短い時間で大量の魔力を使うことができます。それで、これがスパークウェブの問題点なんで

すけれど…【必要な魔力の総量はごく微量であるにもかかわらず、瞬間的には大容量の魔力を必要とする】んです。大抵の魔法は魔力の総量と瞬間的に必要な魔力がバランスが取れているので、下級魔法なら杖という触媒を必要としなくても魔力回路が体にある分で足りるものなんです。」

「うん…なら杖を使えばスパークウェブも撃てるんじゃないの？」

「いえ、杖というのはあくまで触媒です。体にある魔力回路で処理した魔力を杖にためてから放つことで、魔力放出の際にかかる肉体への負担を軽減し、上級魔法や儀式魔法のように大量の魔力を必要とするものの為に魔力のため撃ちを可能としているんです。ただ、杖自体にも、触媒となるための加工をする際に埋め込む魔力回路によつて魔力は存在してるのです。普通の魔法にとつては誤差の範囲内で制御して調整できるものなんですけれど、スパークウェブはその魔力よりもさらに小さい魔力しか使わないので杖の魔力のノイズで上手く発動しないんです」

「へえ…つまり体内の魔力回路が少なければ使えないけれど使えるのだったら魔力の消費を抑えられる素晴らしい魔法…ってわけね…でも魔力回路ってウィプルの秘術で体内に刻印するのならいくらでも刻印してしまえばいいんじゃないの？」

「はい、ですから皆自分にできる限りの魔力回路は刻印しますよ。けれどそれでも個人差の上限があるんです。これは【魔力酔い】をどれくらいの魔力を魔力回路に循環させたらするか…なんですけど、完全に魔力酔いをしてしまうと術を制御しきれずに術者及びその周辺に暴走した魔力がダメージを与えることになってしまいます。なので魔力酔いをしないだけの魔力回路しか結局は使えないので刻印しても意味はなく…魔力回路の量は魔力の量以上に才能に大きく左

右されてしまいます。」

「魔力酔い？」

「うーん…魔法っていうのは【物理法則に干渉して世界のエネルギー状態を無理やり書き換える事】なんです。ですが無理やり書き換えた物理法則は世界に微妙な【歪み】を生み出してしまいます。世界のもつとも根本的な法則として歪みを安定化させようとする働きがありますから、そのままであれば瞬時に書き換えた事象は元に戻り、魔法は瞬時にかき消されて【人間の知覚できるタイムスケールでは発動しなかったと見なせる】事となります。例えば、何も無い空間に魔力で火をともしようとすれば、そこには【物理法則を無視した温度上昇】という形で歪みが生まれ、放置すれば根本の物理法則によつてそれこそ数億分の一秒間だけ数億分の一度温度が上昇した程度ですぐさま歪みと魔法はかき消されてしまいます。だからその歪みを術者が引き受けることで魔法は発動するんですけど、そういう歪みは術者には【感覚のずれ】という形で跳ね返ってきます。簡単に例えるとお酒に酔うのと似てて、ゆっくりと飲めばたくさん飲めるお酒でも一気に飲むと急性アルコール中毒になってしまいますよね…それと同じです、一度に大量の魔力を体内に流せば魔力酔いをしてフラフラになってしまつて術の制御もできなくなります」

「へ…」

リットは熱く語るリットにただ相槌を打つしか出来ず、アヤカもフィルも呆然としていた。

「でも…何故スパークウェブを知っていたんですか？」

好奇心で瞳を光らせるリットの眼差しにアヤカは僅かに目線を反らす。

「？」

リトは首を傾げる。

「その…マリアさんが学校に講師としてきてたからさ…良く知ってる」

アヤカはいいづらそうに言う。

「アヤカってさ…」

フィルは退屈そうに、両手を頭の後ろに組む。

「もしかして聖騎士団に家族がいたりする？」

【ギクウツ！！！！】

「や！…やーねー…そんなわけないじゃない…」

そんなアヤカの反応にフィルは楽しそうに目を細めていた。リットがそこに加わって、

「そうだな…聖騎士団って皆結構若いんだろ？アヤカの家族だとしたら多分兄妹か？」

「ふふん、リット甘い…わかんないわよ？剛腕アドレーとか仮面ボルドーとかが父親だったり…」

「なっ…あんな暑苦しい筋肉男とか変態タイツ男が父親なわけない

でしょっ！！！」

「え〜？…なんで暑苦しいとか変態タイツとか知ってるの？…てか私名前だけでよく知らないんだけど…アヤカはよく知ってるのね〜」

「あはは…なにいつてるのよ〜…剛腕っていったら筋肉で仮面ボルドーなんてどう聞いても変態そうじゃない…」

「あとは〜…意外に隊長のフリルさんとかも見た目だけで実は年をとってたり〜…」

「あ、名もなき英雄さんみたいな感じですね〜」

【ギクウツ！！ギクギクウ！！】

気付いた時、アヤカは地面に四つんばいになって崩れていた。

「んなわけあるか、フリルさんはゲノムの城から消えたのが11歳だぜ？どう考えてもそれまでに子供なんて産めねえよ…っていうかへたしたらアヤカよりも年下なんじゃねえの？」

言われてフィルは確かに、と頷くとアヤカは元気を取り戻した。

「そうよ！、おか…じゃない。フリルさんとは知り合いなだけよ！」

アヤカは少しひきつり笑いを浮かべながら胸を張り、リットとフィルは顔を見合せて苦笑した。

「スパークウエブ…」

そんな中、リトは一人呟きながら杖を握りしめていた。

セントブルグスに着いたリット達一行。しかし…

「冒険者か？」

セントブルグスに入るためには門を潜らなければならず、門には当然門番が存在した。手配書が回っているかどうかは街の中に入ってみなければわからず、リット達は迂闊な行動はできなかった。

「あ！はい…私達は旅をしているんな街を見て回ってるところなんです」

フィルが前に出て笑顔を振りまく。

「？、まあ…いいか、リンドブルグスでレイブン能力者による大きな事件があったからな…ここセントブルグスも緊急で兵士を配備していて街中はピリピリしている。あまり揉め事を起こすんじゃないぞ？」

兵士は何食わぬ顔で言い、リット達の笑顔が引きつる。

「あの…その事件って…どんな事件なんですか？私達もこれから旅を続けるのに気をつけないといけないので教えてくれませんか？」

アヤカが前に出て少し不安そうに尋ねると、兵士は一瞬鼻の下をのばすが、直ぐに真顔に戻る。

「私が聞いた話ですと…昨夜の未明、リンドブルグスの大正門を男女数名のグループが突破。レイブン能力を行使して我がゲノム帝国の騎士団と衝突したようです。リンドブルグスに駐留していた騎士団は壊滅、街の市民も半数が死んだらしいんです」

何故かアヤカには敬語になる門番。アヤカが三人を振り返ると、皆動揺を隠せない表情をしていた。アヤカはすぐに目配せで三人に表情を隠せと合図を送り、兵士に向き直ると兵士は三人の動揺には気がつかずにアヤカに話を続ける。

「国王の書類では、マール王と聖騎士団が糸を引いていると書いてありましたが…」

兵士は周囲を気にするような仕草をし、

「私としては、あの聖騎士団が民間人に手を掛けるとは到底思えないです…」

兵士はこっそりと言った、それを聞いたアヤカはクスリと笑い兵士の手を取る。

「貴重な情報をありがとう」

アヤカに手を握られた兵士は鼻の下を伸ばして、手を離れた後も笑顔で手を振って見送って、四人は無事にセントブルグスに入ることができた。

「にしても…俺達が街を出たすぐ後…か…」

リットは歩きながら小さく漏らした。

「どうおもつ？」

フィルはリットの横に並んで窺う。

「なにが？…」

リットは首を傾げる。

「聖騎士団なんじゃないの？、リンドブルグス襲ったの」

「ないわよ」

アヤカが割って入り、キツパリとフィルの言葉を切る。

「え？…断言できないじゃない」

「できる。犠牲が兵士だけなら聖騎士団である可能性はあったけど…武器を持たない民間人に手を掛けるような人は聖騎士団にはいないわよ」

アヤカに押されてフィルは押し黙る。

「えと…や、宿屋…どこにします？」

重い空気を消そうと、少しおろおろしながらリトが言う。

「だな、宿屋どこにすつか…」

リットはさり気なく空気を断ち切り、近場にあった人の良さそうな老婆の宿屋に泊まる事にした。

「うん、いい感じ」

フィルはフカフカのベッドに倒れこみ、アヤカは隣に座る。部屋は四人一緒の安い部屋を取ったが、清潔なシーツと柔らかなベッドに皆満足そうに笑みを浮かべ、リットはフィルのベッドの前、丁度窓際に荷物を卸して汚れた衣服や着替えを取出す。

「一先ず解散だな、俺は風呂に行ってくる」

都会との影響によりアグネシアにも風呂という習慣が生まれ、今では様々な所で風呂を見かけるようになった。この宿屋も例外ではない、リットはそう言い残すと乙女ばかりの部屋から出て風呂場に向かった。

……

暫くしてリットが風呂場から戻ると、部屋にはリトが一人…裸で杖を握りしめて踊っていた。

「……………」

リットは驚いた…発育未発達なりつの身体を見てではない。彼はそんな性癖はないからだ。彼は女の子が部屋で裸になり、一人で杖を手に踊っているのを見て理解ができずにいた。彼がこれが身体の洗浄魔法だと知っているわけもなく、只々呆然としていた。

「ふーんふーん」

そんな事お構いなしにリットは裸で踊り続ける。そして、呆然と立ち尽くしていたリットは手にしていた剣を落としてしまう。

【ガチャ！】 - その音にリットはバツと振り返り、リットと目が合う。

そして次の瞬間、彼女はみるみる真っ赤になり、そこにフィルとアヤカが風呂から上がってお喋りをしながら角から現れる。ナイス…いや、バッドタイミングだった。

「キヤアアアアアアアッ！！！」

甲高いリットの悲鳴…同時にリットは後退る。そして、リットの悲鳴を聞いたフィルとアヤカが角から一気に部屋の扉まで走ってリットを押しつけて中を見る。

「フィル…」

「なに？アヤカ」

「どつする？」

「どうしよつか…あたしがヤル？」

「うん、任せた！」

ドカンとアヤカが扉を閉め、残されたフィルがゆっくりとリットの方を振り返る。リットはその禍々しい雰囲気を纏ったフィルをみて壁に背中をつけて慌ててわれに返る。

「フイ！！…フィル！！…まで！！！！…話を聞け！！！！…俺は覗いていたわけじゃない！！…かつ…帰ってきたらリットが裸で踊ってたんだ…ちよ！！ま！！右の拳を握り締めるな！！最後まできつ——ぐああああ！！！！！」

セントブルグスにある宿屋から、少年の断末魔が響いた。

「全く！！…変態！！」

顔中青痣だらけになったリットが部屋に入った時にアヤカが投げつけた一言はそれだった。アヤカはリットのベッドに腰掛け、リットを抱きしめながらリットに冷ややかな眼差しを向ける。

「うるへえ！！、だいたいリットが裸でいるのが悪いんだろ！！！！」

「ひっ！！」

リットが怯えたように身を縮こまらせ、アヤカがリットを睨みつけ…

「ひつどーい！！、女の子のせいにするな！！」

枕を投げる…レイブン付きで。レイブンを帯びた枕は空中をグルグル回転しながら速度を増し、リットの顔面にぶつかる。

【バスン】 - 衝撃の大きさを物語るかのような重い音の後、リットの体は窓の外に飛んでいった。

「うわあああああつ！！！！」

二階建の宿屋の窓からふっ飛んだリットは重力に任せて落ちていき、石畳に身体を打ち付けるはめになった。

「……………」

スタボロになったリットが無言で帰って来ると、流石に気が済んだのか少女達は笑顔だった。

「で、これからどうする？あたしはリビング茸売りに行きたいかな  
……………」

フィルは枕を抱き締めてうつ伏せに寝そべり、足をバタバタさせている。

「私は宿屋にいるわ。お土産よろしく」

アヤカがそう言うとフィルは眉を寄せる。

「なんで？」

その問いにアヤカは脇腹に触れる。

「あんと違ってあたしの身体はデリケートなのよ…」

アヤカは騎士の墓場で肋骨を数本亀裂骨折しており、それがすぐに治るわけもない。今まで口にも出さず表情を変えないで、普段通り過ごしていたのは彼女が我慢していただけのことである。

「あの…脇腹…どうしたんですか？」

知らないリトは心配そうにアヤカを見る。

「ん？骨に軽く亀裂入ってるだけよ」

「か！軽くじゃないですよ！！」

リトは慌て杖を手に取る。

「待ちなさい！」

アヤカは声を張りあげると、流石にしみるのか表情を歪める。

「…っ…回復魔法はお肌が荒れるから嫌なのよ…」

アヤカは真剣にそう言い、フィルはハイハイと手を振り、次にリットを見る。

「俺は鍛冶屋巡りかな、セントブルグスといえば聖騎士団で鉄壁王子と呼ばれたカリスの故郷だろ？…なら、いい鍛冶屋があるかもしれないからな」

フィルはそれを聴くとベッドから飛んで床に立つ。

「なら今日は別行動ね」

「ああ、また夕飯時にな」

フィルが部屋を出て行くとリットも立ち上がり、剣をベルトに取り付ける。

「あ、あのッ！」

リットが立ち上がってリットの前に立ち、顔を見上げる。

「着いて行ってもいいですか？」

リットはそう言われて頬をかき、

「いいけど…面白くないぞ？」

たとえばリットは首を思い切り横に振りながら

「だっ、大丈夫です！」

そういわれるとリットもこれ以上言うことはなく、アヤカを見ると「断ったら殺す」とでも言いそうな表情を浮かべながら枕を手に持つており、深々とため息を吐いてリットをつれて出口を目指した。

「わかった、来いよ」

「ありがとうございます！」

「裏路地に連れ込むような事はしないように」

後ろから冷やかすようにアヤカが言うと、リトは真っ赤になって俯く。

「しねえよ、そんな趣味ねえ」

リトの言葉を聞いて赤くなっていたリトはさらに俯いて落ち込む。

「なら良いわ」

アヤカはリトを見送りベッドに横になった。

リトはリトをつれて街の中心部を目指す…思惑通りに街の中心には人が多く、武器屋が自慢の一品を広げて声高々に宣伝している。リトが剣を目利きしながら武器屋を周っていると、リトは必死にリトに追いつきながらも、人ごみの中で少し慣れないようでそわそわしていた。ふと、そんなリトを見ながらリトが苦笑しながら声をかける。

「リト、暇なら遊びに行ってもいいぜ？やっぱり剣なんか見ても退屈だろっ？」

「え！…いえ…お金ありませんし…別に退屈とかそういうんじゃない…」

リトは俯いて両手を胸の前に人差し指と人差し指をくっつけてもじもじしている。

「気にすんなよ、仲間なんだから…ほら、これで好きなように遊んでこいよ」

リットは自分の財布から一万ギルダール札を取り出してリトの手に押し付ける。

「そ！…そんな大金！…そんなことリットさんには…」

リットもコレくらいの時はこういった反応をしただろう。リットはそんなリトの反応に笑いながらリトの頭をクシャクシャとなでるとリトは小さくコクン…と頷く。

「それに…お前はコレじゃ足りないくらい働いて俺たちを助けてくれてるぞ」

リトは少し赤くなりながら小声でお礼を言うと、顔を上げる。

「用が済んだら、中央広場にいる、知らないおじさんについて行くのと暗い道には行くんじゃないぞ？」

「わ！わたしそこまで子供じゃありませんよお！」

リトはリットにバカにされたと思ったのか、プリプリと怒りながら

リットの足を軽く蹴ってから走って行った。そんなリットの背中を見ながらリットは思わず

「ああ…あいつもフィルとかアヤカと似てきたな…」

と、すぐに行動に出すクセが付き始めた女の子にため息を漏らすのだった。

「おう兄ちゃん、どうだい？うちの武器は！」

リトを遊びに行かせて十数分後、店の店主が突然話し掛けてきてリットは苦笑する。正直、その店に売られているのはどれも型打ちの大量生産品であった。汎用性とコストパフォーマンスこそあれど、合金の作成から使用者と戦闘方法を想定し、何度も鉄を打ち上げられた剣には劣るし、型に流し込むだけなのに腕もなにもあったものではない。

「……」

すると店主の男も納得したように苦笑する。そして何気なくリットの剣をみた店主の表情が変わる。

「兄さん…その剣」

「ん？」

リットは言われて視線を落とすと、店主は興奮したように剣を指差

している。

「少し見せてくれ」

そう言われて、リットは剣を引き抜いて渡す。

「ふむ…4000年以上前で主に使われたロングソードだな…ここ！  
…この光沢は竜王鋼！？…」

竜王鋼とは現代では利用方法が不明とされた金属、魔法的、物理的に強く。金属の概念にとられない金属である。

「兄さん…こんなすげえ剣を何処で？」

店主は目をまん丸にしてリットを見ながら剣を返し、リットは苦笑しながら剣を鞘に収めた。

「さあな…忘れた。竜王鋼って…俺も聞いたことはあるが見たことはなかったんでな…これがそうとはしらなかった。あんた…詳しいな」

「ま…な。今でこそこんな剣をうつちやいるが」

「いや…俺は別に…」

「いってことよ。俺だってこれが型打ちのたいしたもんじゃないことくらいわかってらあ。でもこれが一番売れんだよ。まあ…商売なんで、な。だが俺も若いころは…」

店主の長い自分語りを上空で聞きながらリットはふと騎士達の墓

場を思い出す。自分が剣の入手場所を言わなかったのはレイブンの使えない人間がいけるような場所ではないからだ…ということに思い至ると、なんだか少し可笑しくなって理由もなく笑みをこぼした。その後、なんだかんだと親父の長話を聞いた後にほかの武器屋も回り、リットが武器屋を見終えたのは夕暮れだった。彼が中央広場に向かうと、リットが買い物袋を下げて立っており、

「待たせたな」

リットがリットに歩み寄りながら声を掛けると、彼女は笑顔で振り返った。

「いえ、わたしも今来た所ですから」

その衣服は草や土で薄汚れており、リットは何があったのだろうか。少し眉を寄せる。

「なにを買ったんだ？」

リットが買い物袋を覗き込むと、中には無造作につまえたような草が土ごと入っていた。

「草？」

「薬草です、打ち身や骨折に効いて尚且つ肌に優しい」

リットはそれがアヤカの為だとすぐにわかって、思わず顔をほころばせる。

「薬屋にいったのか？…のわりには随分…」

そこまで聞いてリトは首を横に振る。

「肥料のお店です。草や土が取り放題で安いんですよ…結構草の中に薬草も混じってますし…あとは…」

リトは黒く塗られた魔物の革で出来た本と小さな指揮棒を持っていた。

「ウィプルの魔導書と小型の魔法触媒です。ゲノム王国に襲われたときに持っていかれたんでしょうね…そのせいで焼けなかったもいえるんですけど…」

リトが苦笑交じりに見せたそれをリットは見ながら、

「…魔法触媒？」

「剣士さんでいうところの、主武器の剣が壊れた時に…」

「脇差しみたいなものか……」

「はい」

リトは大きく頷いて笑顔になる。

「ま…一先ず宿に帰るか」

「あ…お釣りは…」

「いらねえよ」

キョトンとするリトに背を向けるとリットは宿に帰っていく。リトはその後をチヨコチヨコと小走りで追いかけると二人は並んで夕焼けの中を歩いていった。

二人が宿に帰るとアヤカとフィルが揉み合いの喧嘩をしていた。いや…見ようによってはいやらしいことをしていたと見えなくもないベッドの上、アヤカの上にフィルが覆いかぶさり二人は顔を真っ赤にして息を荒げていた。

「…リト、部屋を間違えたみたいだな」

平静を装ってリットが言いつつ戸を閉めようとする。

「そ！…そうですね！…間違いですよね！」

リトも同じように続き、二人は外に出ようと…

「…まで！…」

呼び掛けられた。リットは引きつり笑顔、リトは今にも泣き出さんとしそうな顔で振り返った…リットはしかたなく、騒乱の中に突入していった。

「で？なんで喧嘩なんかしてたんだ？」

二人の少女とテーブルに挟まれて、二人に散々ボコボコにされたり

ツトはため息混じりに聞いた。

「フィルが！リビング茸の儲けをあたし達に分配しようとするのよ！！」

「そー！そんなわけないじゃない！！ちゃんと分けるつもりだったわよー！！」

アヤカが透き通った声を怒りに震わせながら張りあげればフィルはそれに拮抗するように怒鳴り返す。

「フィル、まずリビング茸はいくらで売れたんだ？」

リットに言われてフィルは黙りこくる、リットはそれだけで納得したように頷く。

「アヤカ、フィルは全部自分の肥やしにしようなんて考えてねえよ」  
アヤカは首を傾げる。

「どういう意味？リビング茸よ！？札幌の山があってもおかしく…ま…まさか…」

そこでリットの言いたい事をアヤカも悟った。

「大方、上手く丸め込まれて安値で取引きされたんだろ？」

リットは溜息をつきながら腕を頭の後ろに組んで、背もたれに体重を預ける。

「じゃあ…いくら？」

アヤカに聞かれ、フィルは小さく。

「5万……」

申し訳無さそうに呟いた。

「理由もわかるぜ？、フィルはアヤカと違って食品の目利きなんて出来ないからな〜…リビング草も「すごく高いキノコ」くらいの認識だろ？…一言リビング草の時期ではないからこれくらいが今の相場とか言われたんだろ？…で、後から足元見られたってわかったら恥ずかしくていえなかった…と…まあ、フィルらしいっちゃフィルらしいからいいけどな！！ははは！さっ！飯にでもいこっ……メギャバギユプ！！！」

リットが場を和ませようとしていった言葉は最後まで言い切ることはできなかつた。リットの理解に最初は笑顔を向けていたフィルが最後の言葉の寸前で、プチンとキレたように右の拳がリットの顔面に叩き込み、殴られたリットは今日二回目となる窓から外へのダイブを繰り返したのだった。

それからリットが戻ってくると二人は機嫌を直しており、四人は夜のセントブルグスの街にでることにした。沢山の出店が立ち並ぶセントブルグスは夜になっても明るく、リットははしゃぐフィルを何とか食い止めながら酒場に入った。

「…また酒場あ…?」

アヤカはどこまでも嫌そうな顔をする。

「いいじゃん！やすいし賑やかだし！あ！このギガミート！それから焼き魚とサラダ！」

フィルはテンションも高めに店員にそう言つと、店員が持つて来た発泡酒を豪快に仰ぐ。

「新鮮な感じですよ…」

リトも発泡酒を手にとり、まわりを見ながら口をつけた。

「ちょ！！?」

反応したのはアヤカ、リトは「?」というふうな首をかしげながら平然と発泡酒を飲んでいた。

「リト！！お酒は二十歳から！！」

アヤカは慌てリトから発泡酒を取り上げる。

「わ！やめて下さいアヤカさん！」

リトは真剣な眼差しで立ち上がりアヤカからグラスを取ろうとする。

「だあめ！！」

アヤカはそう言つてリトを制止し、リトはシュンとして静かに席に

つく。

「アヤカ、そんな目くじら立てなくてもよくね？」

それを見ていたリットはのんびりとアヤカに言つても、アヤカはキツパリと首を横に振る。

「そんな事言つてリトが酔つて魔法を撃つたりしたらどうすんの？」

「この程度では酔いません…発泡酒ですよ？ジュースみたいな物です」

リトはそういうとフィルもリットも目を丸くした。リトはそんな二人をみてクスリと微笑む。

「ウィプルだと生まれて物心ついた時からチェリー酒なんです。ですから…」

「おちびちゃん」

急にリトの背後にいた男が声を掛けた。男は白髪頭にサングラス、上下黒のテカテカしたライダースーツに身を包んでおり、

「？」

リトが振り向くと、男はサングラスをずらして赤と黄色の目をリトに向ける。

「その村の名前あんまり口にだすな…目え付けられるぜ？」

「だれだテメエ…」

リット語調を強くして睨み、その男を警戒する。男はサングラスを戻すと、口をへの字にして手を広げて肩を竦める。

「おいおい、人が折角教えてやったのにそりやねえだろ？」

男は軽い口調で眉を寄せてため息を吐く。するとリットの爪先に激しい打撃的痛みがはしる。

「いて!!」

リットが下を見ると、フィルがリットの爪先を踏んでいた。

「ありがとう、親切なお兄さん…こいつったら誰にでもこうなのよ…ごめんなさいね」

フィルは涼しい顔でリットの足をなじる。リットが苦悶に表情をゆがめるも、男はフィルに意味深な笑みを浮かべてから去っていった。

「たく…気を付けなさいよ？」

アヤカはリットの頭をわしわしと撫で、リットは申し訳なさそうに頷く。しかし料理が運ばれてくると皆も雰囲気に戻して食事を始める。暫くして、あらかた料理を食べ終わると、アヤカが立ち上がる。

「?、どしたの？」

フィルやリットが興味深そうに見つめていると。

「ちょっと情報を集めてくるわ…さっきのやつの方…気になるし」

「あ…成る程いつてらっしゃい」

フィルは手を振ってアヤカを見送る。アヤカはカウンター席に向かい、カクテルを注文してマスターとなにやら話し始めた。

「流石はアイドル…てか」

リットはそんなアヤカを見ながらつぶやく。

「アイドルってなんですか？」

リットは魚をチビチビ食べながら興味深そうに目をくりくりとさせる。

「俺も良く知らねえけどな？、人前で歌ったり踊ったりする仕事なんだってよ」

リットがいうとリットは顔をぱーっと輝かせる。

「面白そうです」

「リット、流石アイドルね！」

ニヤニヤとしながらフィルがリットに話しかける。リットが再びアヤカの方に目を向けると、アヤカは床に倒れる三人の男を椅子にしてマスターと談笑している。

「あいつ…」

リットが苦笑していると、新たな男が椅子にされていた…心なしかその顔には恍惚の表情が見て取れる。

ひとしきり話し終えたアヤカは立ち上がり、此方に向かって来た。

「うん、やっぱりファイフさんは凄いわ」

アヤカはそう言って、にこやかに笑いながら席に帰って来た。

「なんでも、正面から一人で検問に突貫して誰一人殺さずに気絶させてから通っていったらしいわ」

思わずリットは絶句する。正面突破だけならまだしも「誰一人殺さずに」「これは余程の実力差が…それこそ子供と大人…いや…赤子と格闘家ほどの差がないと無理だろう。凄いのレベルがぶっ飛んでい

る。」  
「でも…お陰で警戒レベルが凄くあげられちゃってるらしくて…半端なルートじゃ出られないみたいよ？」

「だろうな…」

リットはため息を吐き出してから腕を組む。

「うーん、馬車とかないの？」

フィルがつぶやくと、アヤカは頷く。

「1日一回だけ、街の外に作物や食材を売りにいったりかってきたりする馬車がある位ね」

「それに乗り込むしかないかな…」

フィルがいうとリットとアヤカも頷く。

「ま…それしかないわな…」

「馬車の場所も把握してるから、今日にも乗り込んでいきましょうよ」

「わかった…行くう」

リット達はそれから直ぐに行動に移した。宿屋から荷物を持ってきて馬車置き場に行くと、馬車に忍び込む。中は広く、既に沢山の果物の箱が置かれていた。

「これなら充分隠れられるわね…」

アヤカがそう言って馬車の中に入り、一人くらいなら入れそうな隙間に細い身体を通す。残りの三人も後に続き、リット達は横一列に並ぶ形で馬車に隠れた。

【魔よ、我が命に従い気配を殺せ、姿を消せ…】

リトが杖を振り、魔法を唱えればリトの足元から微かな光が溢れる。そして

【インビジョン】

同時にリット達の姿が消える。

「凄い魔法ね……」

「はい、この魔法をかけていればばれる事はないと思います」

「これかけて渡れば早いんじゃないの？」

フィルの疑問にリットは答える。

「立ってしまうと効果が切れちゃうんです……」

「成る程、万能じゃねえわけな……」

「はい……」

その日は寒くは無く、過ごしやすい日だった。リット達はそっぴている間にも眠くなり、静かに目を閉じた。

ガタガタ……

リットは馬車の揺れで目を覚ました。

「みんないるか？」

リットが搾るような声で呟くと、リットが袖をクイクイと引いた。

「今どこだ？」

「…そろそろつくわ」

アヤカがコソコソと告げる

「おい…フィル？」

リットはフィルのいる空間に手を伸ばしてフィルの身体に触れてから軽く叩く。

「フィル？…起きろ」

「ん…リット…て…どこさわってんのよ…！」

フィルは目を覚ますと自分の胸に触れるリットの手を掴み、リットがいる所を見当つけて拳を放つ。

「いた！！何すんのよ！！」

しかしそれはリットの前を素通りしてアヤカにクリーンヒットする。思わず殴られたアヤカは声を張り上げ

「み！！皆さん静かにー」

リットが声を荒げて、フィルとアヤカを制止する。四人が慌てて気配を殺しながら伺うと、幸運にも馬車の騎手は気付いていないらしいか

った。

「フィル…後で覚悟しときなさい」

アヤカの恨みの籠もった声が響いた。

暫く進んだ馬車は、ついに検問へとたどり着いた。

「止まれ！」

衛兵の声が響くき、沢山の足音が馬車に寄って来る。

「積み荷はなんだ？」

「へい、わしはセントブルグスの農家でして…積荷は我が家で取れた果物でございます」

騎手の老人が答える。

「少し中を見てもいいか？」

「どうぞ、なんならお一つ味見して頂いても大丈夫ですよ？」

「ふふ、気が利くな…その言葉に甘えるところでしょう」

「ええ、騎士さまあつてのゲノム帝国ですから」

そして馬車の中に数人の兵士が入り込み、リットは剣の柄に手を触れ、兵士の動きを警戒する。兵士は木の箱から果物を何個か取り、外に出ていった。

「異常無しだ…」

「ええ、ありがとう…」

その瞬間だった。

「は…クシュン！」

リットの隣でフィルがくしゃみをしたのだ。老人なら気付かない程の音…しかし兵士達は違う。まさにこれ…「積荷に紛れて不穏分子が隠れていないか」を検問しているのだ。すぐさま兵士達は同時に剣を抜き放ち、老人を切り捨てる。

「ぎゃあああああ…!!」

先程まで笑顔だった老人の悲鳴がこだまする。

「じじいが…魔法か能力で隠れているに違いない!!馬車を調べろ…!!」

隊長らしき男が指示を飛ばし、兵士達が入り口に殺到する。

「この馬鹿…!!」

リットは立ち上がり、剣を抜く。

「ホント！！バカよね！！」

アヤカは服からナイフを抜きレイブンを纏わせ投げる。

「仕方ないじゃない！我慢出来なかったんだから！こいつがいけないのよ！！！！」

フィルも不満タラタラ…といったいった様子で立ち上がりながら顔のそばをフラフラとゆれていた果物のツタを放り投げる。

「だからって真面目にくしゃみするバカがいるかよ！！状況考えろ！！この馬鹿！！！！」

リットは飛び出し向かってくる数本の槍を剣で切り払い、兵士の一人に体当たりを食らわせながら馬車の外へ飛び出す。

「はあ！」

「とりゃあ！！」

飛び掛かる男二人、しかし男達の死角から突如飛来した二本のナイフが頭部を貫き、男達は地面に沈む。

「責任とんなさいよ！？お姫様！！」

アヤカは馬車の目の前にいた騎士の顔面に飛び蹴りを食らわせながら馬車から飛び出して、倒れた騎士から剣を奪う。

「フィルさんはやくたたずです…」

リトは小さく毒混じりに愚痴り、杖を手に馬車から降りると同時に呪文を唱える。

【魔よ、土を練れ、槍を作れ、敵を貫け】

リトの足元から茶色の光が溢れる。

【ガイア・スピアー】

土から突き出された無数の槍が、リットに、アヤカに、馬車に迫ってきていた兵士達を貫いて一掃する。

「み！みんなしていわないですよ！！あたしだって好きでくしゃみしたわけじゃないんだから！！！！！」

こうなった犯人であるフィルは馬車から降りながらプリプリと逆ギレをする。

「はあ！！！」

全身鎧に身を包んだ巨漢の兵士がリットの頭に鉄槌を振り下ろす。

「ち！！！」

リットは素早く後ろに下がり鉄槌を避ける…が、しかし別の兵士がその着地にあわせて槍を突き出す。

「危ない！！！」

アヤカが槍を蹴りつけてリットから軌道をそらせると、今度は流れ

るような動きでその反動を利用して蹴り足を地面につけ、その足を軸に逆の足で兵士の股関節を蹴り上げ、蹴られた兵士は股関節を押さえ  
て蹲る。

「きつさまあ！！！」

片足を上げたままのアヤカに今度は別の兵士が切りかかる。

【ファイヤーダート！】

そこにリトの呪文が完成して、アヤカの回りを炎の帯が一周して近  
寄ろうとしていた兵士を焼き払う。

「魔法使いから仕留める！他のヤツは動きを封じるんだ！城門を閉  
じて弓兵は前へ！！！城門を突破させてはならん！！ゲノムの精兵  
の力をみせてやれ！！！」

隊長らしき男の指示で大きな門は閉ざされ、その上に弓を構えた兵  
士達が現れる。さらに、リット達と戦っていた兵士達もリトに狙い  
を変える。

「リト！」

リットはリトの援護に回ろうとするも、数人の兵士に前を遮られて  
進めない。兵士達はリットを足止めに専念して積極的な攻撃はしな  
い代わりにリトに近づけさせない。

「アヤカ！」

「こつちも無理！！！」

「あたしも〜!!」

アヤカはリットよりも多くの兵士に囲まれていた。フィルも同じように囲まれており、リットは完全に孤立する。

【ライジング】

兵士達の攻撃がリットに届くよりも先に、杖の先から迸る紫電が迫る兵士達を切り崩す。しかし、倒れた兵士達を踏み超えてさらなる兵士達が迫り

「く!!」

【魔よ、空気を集め刃と成せ】

リットが一詠唱で唱えられる呪文を唱えると、杖の先から三日月のような刃が現れ、杖は死神の持つような大鎌のようになる。

「やああ!!」

杖を大振りに振り回して迫る兵士を牽制するリット…しかしゲノムの兵士達は消して弱くない。子供が武器を持ったとしてもなんら驚異ではないのだ。

「は!!」

一人の兵士がリットの大鎌のような杖をよけて剣を振り上げて斬りかかる。

「!?!」

リトは反応しきれずに、咄嗟に杖をあげて避けようとするが、その露骨な斬りかかりはフェイトだった。見透かされていたかのようにリトは杖を蹴り飛ばされ

「あ!?!」

「もらったあ!?!」

同時に迫る無数の槍。リトは素早く杖から手を離すと、袖から指揮棒を引き抜いて、

「【ディフェンス】!」

リトは魔法触媒を使ってクイックスペルを発動させ 目の前に光の膜を生み出して槍をふさぐ。

「【マジック・ブリット】」

パリン…と槍の穂先が膜にひびを入れ、リトはそれを転がるように下がって避けながら、指揮棒の先を兵士に向けて再びクイックスペルを発動させる。すると指揮棒の先からは白い魔力の弾が飛び出して眼前の兵士を吹き飛ばす。

「リト!?!上だ!?!」

リトの声 時にリトは上を見上げる。

【ゾブ】 が、遅かった…何かがりトの小さな腕を貫き、持ってい

た指揮棒を落としてしまっ。

「い…あ」

それは矢…長い矢がリトの腕を貫いていた。

「や…！やあああ…！」

幼い少女の悲鳴がこだまする。リトは余りの痛みに腕を押さええて蹲る。魔法を詠唱することもできずに蹲るリトにゲノム兵の強靱な刃がせまる。

「リトおおお…！」

リットが叫び、目の前の兵士二人を切り捨てる。しかし間に合わない。

「ひ…！」

リトは槍に貫かれ死ぬ自分を想像し、目を背ける。

【ドジャア…！】 槍が肉を突いた音が響き、血が天に向かって散る。

「た…くよオ…」

聞き覚えのある男の声…リトはギユ…と閉じた目を恐る恐る開ける。リトが振り返ると、そこには黒いテカテカしたライダースーツを着た男の背中があった。男の腕はリトをねらった槍に貫かれ、血が滴っている。

「テメエら、ガキ相手に何人でかかってんだ…ア？」

男は左手でサングラスをとる。赤い網膜に黄色い瞳が兵士を睨みつける。

「な…！」

槍を手にしていた兵士は次の瞬間には自分の槍に貫かれていた。何があつたのか分からない程に早かつたためか、兵士は自分が死んだ事にすら気付いていない。

「鬼のライエル…テメエらを殺す男の名前だ！」

ライエルの両手がはせて、肘までが真っ赤に巨大な手に変わる。その大きな身体でリトを覆うようにして隠し、その両手は馬鹿げた力で目の前の兵士を掴み、後ろの弓兵に投げつける。

【グジャア…！】 投げられた兵士は弓兵に衝突し、二人は赤い血の花を咲かせる。

「ひ…！怯むな…！怯む…！」

「忘れてねえか？テメエら…！」

隊長は声と気配に気付くも、成す術なくリットの剣に頭から真っ二つにされて倒れていた。

「アヤカ！」

リットが叫ぶより早くアヤカは素早くリットに駆け寄っており、ライエルとリットはリットとアヤカを庇うように立つ。

「貸し二だぜエー！三下！！」

ライエルは赤い両手で飛び交う矢を打ち落としながらニヤリと笑ってリットに話しかける。

「誰が三下だ！コリア！！」

リットは叫びながら迫る兵士の腹を剣で切り裂き、蹴り飛ばす。

「リット！！！」

「あや…かさ…」

アヤカがリットの前にしゃがみながら腕の傷を見ると、腕をつらぬいた矢は骨を砕いて貫き貫通しており、パッと見ただけでも十分に傷が深いのはわかった。

「回復する余裕ある？」

アヤカは矢尻を掴んでしゃがみこむリットに目を向ける。

「はい…【まよ】…」

「そう。ならちよつと痛いけど我慢するのよ？」

アヤカは自分の服の袖を破り捨てるとリットの患部より上に巻き付け止血し、頷いて唱え始めるリットの唇を塞ぐと矢を貫通させるように

引き抜いた。

【ブシャ】 リトが苦悶の表情を浮かべながらも詠唱を続け、血液が腕からダラダラとたらしながらも呪文が完成する。

【エー・ファイ】

緑色の光が患部を包み、痛々しい傷が水のように消えていく。

「おらああ!!!!」

その間もリトやアヤカに降り注ぐ矢の雨を、ライエルが真っ赤で巨大な剛腕を振り回して遮る。そして腕を振り回したライエルの隙をチャンスと飛び込む兵士を横合いから飛び込んだリットがバツサリと切り裂く。

「そーいや…… フィル!? ……おい!!! フィル!?!」

リットは先程から姿が見えないフィルを探して声を張る。しかし周囲にはフィルは見当たらずリットは眼前の兵士を切り捨てながらもフィルを探す。その時、

「ぐわああ!!!!」

「な! なんだお前!」

「ぬぶっ!!!!」

悲鳴がこだましたのは門の上。

リットが門に目を向けると、先程まで鬱陶しく矢を放っていた兵士達が次々と門から転落してくる。門の上ではオタマジャクシのように揺れる後ろに結んだであろう黒髪の頭が、素早く弓兵を門から叩き落としている。ファイルは突如乱入したライエルやリットを囿にして門にある兵士の詰所に侵入、内側に残っていた兵士を倒しながら門の上に登り、そこにいた弓兵達を不意打ちしていた。

「……………」

恐ろしい程に気配を消して無言で突き進むファイルは次々と弓兵を門から突き落としていく。

「な!! なにも……」

城門の狭い通路もファイルに幸いした。弓兵達は自分が叩き落されるまで何があつたのか把握しきることはなく混乱していく。いや…なにがおこっているのかを把握したところで狭い城門の上で武器は弓では狙いをつける前に

「たあ!」

ファイルを「認識」した瞬間に彼女の回し蹴りが兵士の頬を撫で、兵士は回転しながら門から落ちていく。

「くそ! 敵か!…このや…!…」

「【鬼弾頭】!」

矢を捨てて剣を抜こうとした兵士は、ライエルの放った次元を歪めて放たれた弾丸に打ち抜かれ上半身を抉り取られて崩れ落ちる。

「よし…と。上は粗方かたずいたわね」

フィルはジャケットの内側ポケットからOD色の果物というパイナップルのような形の球体を一つ取出すと、上方についていたピンを引き抜く。そして今し方自分が出てきた階段とは逆の階段の下に投げ入れ

【ドオン！】パイナップルは弾け、炎と衝撃を撒き散らし、階段の下に待機していた大量の兵士を蹴散らして肉に変える。

「フィル！！門を開ける！！」

リットが叫ぶ。フィルは階段を掛けおり、門を開閉するためのレバーに駆け寄る。

「む！！」

レバーの前には兵士が十人もいた。

「ち…なんでこんなにいんのよ！！リット達の方についてなさいよね！！！！」

思わず愚痴るフィル。それを見た兵士達は一斉に剣を抜いて駆け出

してくる。

「高くつくわよ！…っっていうかホントに高いんだからっ！！」

フィルはジャケットの内側ポケットからドーナツ型の黒いブーメランを兵士に投げて身を伏せ耳を塞いだ。

【パキイイ！】 そんな音だった。しかし、兵士達はその音を聞いた時、彼らの意識は白い閃光の中に消えた。

フィルが投げたのは都会ではスタングレネードと呼ばれる主にたてこもり犯を対象とした武器である。身を伏せていたフィルは立ち上がり、耳鳴りを気にせず気絶した兵士を踏まないように迂回しながらレバーを両手に握りおもいつきり降ろす。

【ガゴン…ガゴン…ガゴン…】 にぶい音と共に車輪が回る音が辺りに響き渡る。

「ちい！…後から後からキリがねえ！！」

ライエルが叫びながら兵士の一人を掴んで後ろの兵士に投げつける。

「ぐわああ！！」

ぶつかった二人は潰れて血の飛沫となり、ライエルは更に追い討ちをかける。

「【鬼弾頭】！」

ライエルの左手の中で次元を歪めて弾丸にし、それを怯む兵士達の

中に投げつける。

「オチビ！」

ライエルは未だに膝をつくりトに目を向ける。

「？」

リトが首を傾げると、ライエルは叫ぶ。

「こいつら纏めてぶっ飛ばせるような魔法はねえのか！！？キリがねえ！……！」

リトは首を横に振る。

「ち……消耗戦かよ！」

すると今まで閉ざされていた門がゆっくりと開かれる。

「門が開いたわ……！」

アヤカがリトを連れて開いた門からアレクセイ領に向けて走りだし、ライエルも後に続く。

「おい三下……！」

ライエルが兵士の詰所に向けて走っていたリットに叫ぶ。

「先に行け！俺があんたのフィルってお嬢ちゃんを連れて後から行く！」

「あんだこそ先にいけ!!! フィルは俺が助ける!!!」

そついい捨てるつとリットは詰所の扉を蹴り開けて中に飛び込む。

「な?」

リットは飛び込むと共に目の前にいた兵士を出会い頭に両断する。

「おい!!! レオ!!!」

仲間を真つ二つにされて驚いた兵士は、つい、友の名前を叫び隙を与えてしまつ。

「でえい!!!」

リットがそれを見逃すはずもなく、続いて袈裟に切り捨てながら階段を駆け上がる。

「フィル! 何処だ!!!」

門の上には既に兵士がこつた返していた。リットの顔にも思わずあせりの色が浮かぶ。

「退けええ!!!」

リットは叫びながら狭い一直線、道行く兵士を切り捨てながら突き進む。

「貴様!!! 我々がゲノム帝国兵士だとしての暴挙か!?!」

今更な台詞を吐きながら明らかに周囲の兵士よりも数段身のこなしが格上らしい兵士が現れる。

「うつせえ！ー！ー！」

リットは勢いに任せて剣を振り下ろす。

【ガイイン！】 隊長格らしい男は抜いた剣でリットの一撃を弾いた。

「な！」

目を剥くりット、隊長格らしい男は剣を片手にもったまま鬼気とした目をリットに向け威圧感を与える。

「私はゲノム帝国軍一級剣士…【エルトン・レオール】…筋はいいがまだまだだな…名は？…木石でなければ名乗る名くらいはあるだろう？」

(ゲノム帝国軍一級剣士だと！？…警備が強化ってレベルじゃねえ！ー！ー！) 心中呟いて動揺するリットに冷たい視線を向けたまま、エルトンは剣を弾いてからは動こうとせず、只、寒気を纏う殺気を放つ。

(まずい…こいつは『ヤル』な…) リットは冷や汗を流してエルトンと向き合う。

「どうした？、来ないのか？…名くらいは聞いておこうと思ったが…ならば…」

エルトンは足を踏み込んだ。

「此方から行こう！」

まるで瞬間移動のような踏み込みで間合いに入れば、踏み込みと同時に振り上げた右手を振り下ろして、リットの頭剣を叩き込む。

「ちー！」

【ガイイーン】 反応に遅れながらもリットは剣を盾にしてエルトンの一撃を受け止める。

「甘い」

「があー！」

【ドゴオ！】 同時にエルトンの左手の鞘がリットの脇腹に叩き込まれ、リットは体をくの字に折って悶絶する。

「げ…げほっ…ぐっ…」

後ろに跳び下がりがりながら呼吸を整えるリット。しかしエルトンは目を細めながらゆっくりと歩みよる…一分の隙もなく。

「ふん…レイヴンなどに頼りきった貴様の剣ではこの程度だな…これ以上抗えぬというのなら…死ね」

徐々に呼吸を戻しながら睨み付けて構えるリット…対するエルトンは無造作に間合いを詰めると流れるような動作で剣を引き…突き出

す。それはゆっくりと引いて無造作に突き出しただけ…しかし引くときにも隙はなく、突き出すときは稲妻のように突き出される致死の一撃。

「舐めんな！」

リットは突きを引いて構えたときの角度から検討をつけて弾きながら踏み込み、斬りかかる。しかしエルトンは一步身を引いて…まるでリットに道を譲るように体を反らした。

「な！」

勢いに乗ったリットはそのまま前に、エルトンに無防備に身体をさらしてしまふ。

【ドガ！】 すかさずエルトンのローキックがリットの右足の関節部に直撃し、リットは前のめりに倒れてしまふ。

「悪いな、化け物…」

エルトンはリットに向かって剣を振り上げる。

【シュン！】 同時に横合いから飛んでくる投げナイフ。

「ほっ？」

エルトンは即座に反応して剣でナイフを弾くと、気配なく駈けてくる少女に目を向ける。と、共にリットにも油断なく警戒をしながら少しはなれる。

「フィル！大丈夫か？」

リットは立ち上がり駆けってくるフィルに目を向ける。

「なに呑気にしてんの！？逃げるのよ！！」

フィルはリットの手をつかむ。

「逃がすと思うかい？」

エルトンはリットをにこやかに眺めながら言ってきた。

「ち……」

リットの背筋に寒気が走り、背を向けられない。

「リットー！」

フィルの前方も騎士達に塞がれてしまい、前方の騎士達と後方のエルトンに挟み撃ちにされてしまった。

「……」

リットは諦めたかのように剣を両手にエルトンと向き合う。

「降参しなさい…君達に勝ち目はない」

エルトンは右手に剣、左手に鞘を握り閉めた姿勢から崩れる事無く見つめる。

「リット…」

「あんだよ…」

「飛ぶわよ！…！」

「は！…！…？」

リットが気付いた時、フィルはアレクセイ領側に向かってリットと共に飛んでいた。リットの目には呆気に取られたといった顔でポカーンと口を開けていたエルトンがうつっていた。

「うおおああああ！…！」

リットは悲鳴を挙げながら落ちていく、それにたいしてライエルが大きな手を伸ばしてリットとフィルを掴んで引き寄せる。

「ぐへあ！」

リットはそのまま投げ捨てられて地面を転がる。

「休む暇はねえ！…走れ！」

ライエルが叫びながら走りだすと、リットも頷いて駆け出した。

「エルトン剣士長！」

その背中を門の上から眺めていたエルトンは名前を呼ばれて目をそちらに向ける。

「追跡はいかに？」

しかしエルトンは首を横に振る。

「君たちは門の警護に戻れ…生きているなら怪我人を手当てしろ」

「はっ…え？」

エルトンの反応に兵士は目を丸くする。しかしエルトンはその兵士に顔を向ける。

「あれはわたしが斬る…手は出さなくてもらうよ？国王には首を持って変えると伝えてくれ…」

そう言ってエルトンはもう一度だけリット達の背中を見送った。

【僕達の生き方】（前書き）

ゲノム帝国を襲撃した能力者グループ【ソードハンターズ】は、ゲノム兵士の追撃を振り切り次の標的であるリンドブルグスの街へとやって来ていた。

## 【僕達の生き方】

4月10日。ライエルが死んでから1週間が立って。僕はいま、リンドブルグスに来ています、自分のせいだと泣きっぱなしだったマルルはユリさんのように冷たくなりました…。

【コンコン】

突然のノックに、ピンク色の髪に青い瞳の女の子、リンは振り返り、身につけた白い手袋越しに握った羽根のペンを机において開かれた日記帳を閉じる。

「おれだ、ゲイツが呼んでる」

聞こえて来るのはリンが兄のように慕っている光のレイヴンを操るグリッドの声だった。

「わかったー、いまいくよ」

リンは掴んで下に降ろせば平らな胸が露になってしまいそうな挑発的な上着を押し上げて駆け出して扉を開ける。

「……………」

目の前には背の高い太陽の光を受けて翠掛かった色をした肩まである髪の青年が、淡い碧眼をリンに向けて立っていた。

「また日記か?…」

グリッドは静かに聞いてきて、リンは頷く。

「大切にしろよ…」

リンはてっきりため息を吐きながら捨てると言っかと思っていた。

「?…どうした」

グリッドは不審そうに首を傾げている。

「ううん、なんでもない！」

そんなグリッドを横目にリンはリビングに向かった。リビングにはゲイツを中心にソードハンターズの面々が集まっていた。

「遅い…」

この前はゲノム帝国の偵察に出ていたベラというローブで全身を隠している少年が溢す。

「ごめんなさい」

リンは一つ空いている席に腰掛けると、ゲイツはにこやかに話しはじめる。

「我々の今回の狙いは、リンドブルグスに駐留するゲノム帝国軍の殲滅、それと…」

それと?、ソードハンターズの面々は首を傾げた。

「この国に封印された神の作った三本剣の一つ…【魔剣レヴァンテイン】の回収だ…」

ゲイツは静かに告げて、リンの隣にいた赤い髪を鶏冠が特徴的なヴァシユがクツクツ肩を揺らして笑う。

「おいおい…ありやおとぎ話の話だろ？いつからテメエはメルヘンの仲間入りをしたんだよっ」

ヴァシユはバカにしたようにゲイツを蔑むと、隣に座る透けた少女シエリーが立ち上がる。

「彼を愚弄するのは許さない…」

シエリーが殺意を込めた視線をヴァシユに向ける。ヴァシユは負けずにシエリーにも目を向ける。

「ああ暑い暑い…テメエ…俺に文句つけんのか？蒸発しとくか？あん？」

「望むところ！…」

「二人共…」

シエリーとヴァシユが一触即発の手前、ゲイツが仲裁する。

「仲間割れはやめてくれ…シエリー、席につくんだ…」

光のない眼差しはシエリーを見つめ、シエリーは席に着く。ついで

ヴァッシュに目を向ける

「君が言うように…わたしはメルヘンな世界が大好きだ…赤頭巾ちゃんや三匹の子豚は心が踊る…」

ゲイツが真顔でそういうと、ヴァッシュは困り顔になり肩をすくめる。

「ただ、魔剣レヴァンティンは実在するよ…メルヘンとは関係なくね…」

「マジなのか？」

くどいヴァッシュの確認にゲイツは笑顔をつくる。

「ああ、おお真面目さ…願わくば…」

ゲイツは両手を握りあわせて祈るように。

「今回は邪魔してくれるなよ…聖騎士団…」

呟いた。

「…す…」

リンの後ろでマルルが小言で溢した。周りには聞こえないが、リンの耳には「ぶっ殺す」と聞こえていた。

『魔女だー！！』

『逃げたぞー！追えー！！』

『くそお！！火だ！！あのガキ魔法をつかいやがった！！』

そこに市民達の罵声がこだます。

「ゲイツ！」

ジェットがユリが、その場にいたソードハンターズが立ち上がり、グリッドは窓の外に目を向ける。窓の下を鬼気とした民衆が行進していた。そしてゲイツが最後に立ち上がる。

「ああ…化け物とよばれた我らの同志の命が危険に曝されている…助けよう…助けに行こう…そして幸せな奴らを殺し尽くそう」

そして殺戮と狂気が始まるうとしていた。

魔女狩りを模して武装した民衆の行列は広い路地を行進する。

「魔女を殺せ！！力ある者を殺せ！！」

口ブチに叫ぶ青年や女や老人達、その行列の前に一人の男が、馬鹿げたサイズの剣を肩に背負って待っていた。鶏冠のような赤い髪形が特徴的な男、鍛えぬかれた褐色の肉体を見せ付けるオーバーオーのシャツに長いズボンが特徴的な男、その男は歯を剥き出しに、頬まで唇を裂いて笑みを浮かべる。そして声を挙げた。

「もうやめねえか？」

優しく告げた。

「おれは好き好んで民衆に手を挙げる程鬼畜じゃねえ、おめえ等が下らねえ行列を止めて帰りやなにもしねえで帰るさ…」

【バシユン！】

民衆の中から放たれた矢がヴァツシユにあたる前に蒸発し、ヴァツシユは盛大なため息を吐き出した。

「もう一度だけチャンスをやるぜ？、帰れ…何もいわずに…」

「殺せー！！！」

一人が叫んで民衆が駆け出す。

「言っただぜ…俺は…」

そしてヴァツシユは鬼になった、片手にもった馬鹿げたサイズの剣を横風ぎに振るう…ただそれだけ、力はいらない。

民衆の列は炎の中に消えていく。

【ゴオオオン！】

獣の雄叫びのような業火が民衆を飲み込み、誰一人残さず消えていく。

【バシユン！】

放たれた矢はヴァツシユの体にあたる前に溶けて気体になる。ヴァツシユはそちらに目を向けて炎の剣を振るう。

【ドオオン!!】

弓をもった民衆が、女や老人が、炎の中に消えてゆく。

ヴァツシュの剣に重みはない、何故ならヴァツシュの炎が造り上げた力だからである、圧倒的だった。ヴァツシュが一振り扇のように剣を撫でるだけで炎の津波が民衆を飲み込んで消し炭に変える。民衆を焼き払うヴァツシュは悲しい顔をしていた。

「ひ!!ひい! たっ助けてくれ!!」

ヴァツシュが剣を天に捧げるように振り上げ構えると、炎に凧ぎ払われた民衆の中で生き残った一人が声をはる。身体を火傷で赤く腫らせているも、死ぬ程ではない。

「……行けよ……」

ヴァツシュは無表情のまま告げた。

「へ?」

男は首を傾げる。

「俺の炎が届かねえ所に消えろって言うてんだよ!!」

「ひ!!ひい!!」

親切に炎の届かない路地を指差しながら吠えるヴァツシュに、男は悲鳴を挙げながら路地に走って行った。

「ぎゃあああああっ！！！！」

路地に消えた瞬間、男の悲鳴がこだまする。

「……………ち」

ヴァッシュが舌打ちすると、路地から白髪の青年…風を使う事を得意とする青年が血のべったりこびりついたナイフを舐めながら現れる。

「相変わらず甘えなあ〜？ヴァッシュ君…」

「民間人だ…家族もいる、奴らは牙を向かなきゃ俺たちの敵にはならねえ！」

ヴァッシュは睨み付けられてジェットは表情をしかめる。

「あん？敵だろ？…」

「て…メエ…」

ジェットは手を開いて肩を竦める。

「テメエのそれは偽善っていうんだぜ？ここに転がる炭は全部テメエが殺した…民間人なんだぜえ！？」

ヴァッシュは今にもジェットを殴ろうとした、しかしそこに…。

「いたぞ！！とっ捕まえる！！！」

ゲノム帝国軍の部隊が乱入してきてしまった。ジェットはしらけたかのように肩を竦め、ヴァッシュは歯を剥き出しにして笑った。

「いいか？ ジェット…俺の敵は民間人じゃなく……」

剣を両手で握りしめて瞬く間に身体を炎に包むイフリートのように炎の中で笑う

「奴らゲノム帝国軍の騎士なんだぜ！！ ヒヤアアッハー！！」

【ドオオン！！】

派手な火柱が巻き起こる。

「派手にやってる……」

ユリは兵士の詰所で兵士達を血祭りにあげていた。

「ひ……」

一人の兵士が目を恐怖に見開いている。彼のいる詰所は氷河を思わせる極寒に変わり、彼の仲間達は氷の塊になっていた。

「あら…まだ生きていたの？」

ユリは冷たい微笑みをそのままに、ユックリと歩み寄り兵士の頭を抱きしめる。

「ひ！！ ひいいい！！？」

「暖かい…お兄さんの身体…」

ユリは凍り付き絶命する男の温かさを抱いて笑っていた。

「ライエルの仇…仇…仇…仇仇仇仇仇仇仇仇！！！！！」

マルルは目を血走せて、地面に手を着いて地面に種を植える。種は瞬く間に木の巨人と変わり、兵士達を薙ぎ倒し血の飛沫に変えていく。

「あはははははは！！！！！」

マルルは復讐の修羅となり、兵士の群れの中に突撃していく。

「く！！娘だ！！娘を先に殺せ！！！」

マルルという少女とマルルの操る木の巨人により、部隊が壊滅の危機に晒された兵士の長は剣高らかに指揮をする。しかし返事は…

「できたらいいね…」

少年の声だった…兵士の長は恐る恐る振り返ると、そこにいたのはフードを被り顔を隠した少年だった、フードの下からのぞく黄金に輝く双眼が不気味に光る。

「な！！！！…なっ！！！」

驚く兵士長は振り返る。しかしドン！と細い針に腹を貫かれた、それは細剣、レイピアである。しかしそれだけでは終わらない。気付

いた時兵士長は死んでいた。

「ふん…」

ベラはフードをとる、静電気で逆立つ髪の毛から稲妻が光となって辺りに飛び散っていた。

リンドブルグスの至るところで水が、岩が、樹木が、光が、雷が、炎が、氷が、風が襲い掛かり、ゲノムの兵達を壊滅させていく。

「はあ…はあ…」

そんな中でリンは一人、息を荒げていた、リンはいまゲイツの向かった遺蹟に向けて走っている。

「女の子？」

「君！危ないぞ！？」

走っているリンの前に二人のゲノム兵が立ちはだかる。

「【ゴールデン！ハンマー】」

リンは二人を見るなり地面に手を着き、地面から巨大な黄金の槌を引き摺りだす。

「な！」

リンの容姿に油断した兵の1人はリンの槌により横殴りに払われ壁に激突して倒れる。

「の！能力し……」

二人目が反応するよりも早くリンの足が兵の股間を蹴り挙げる。

「ぐおっ！！」

蹴られた兵士はくの字に折れ曲がり、大振りに振るわれたリンの槌に叩き飛ばされて意識を失い、地面に転がり動かなくなる。

「ゲイツさんは……」

リンの通った道に死人はいない、リンは人を殺す事が出来ないのだ、彼女とグリッドの合体技【GSF】は跡形もなく敵を消し去る技に見えるがそうではない。リンは手にふれたものを純金に変え、金粉にすることも出来れば、金粉を純金に戻しもとの姿に戻すことも可能だからである、つまりあの技はグリッドの光に消される前にリンが対象を金粉にしてどこかに移動させているのであり、必殺の大技ではない。そうしている間にも兵士が角から現れる。

「はあああ！！」

リンは気合いを声として発しながら槌で兵士を叩きとばす。

「な！！」

角の死角にいた兵士二名は目を見開いて口を開ける。

【ゴァン！】

その間にもリンの槌は兵士二人を横殴りに叩き飛ばして倒す。黄金の槌を片手に、ひたすら満ち無き道を突き進む。しかしリンは怪力な訳ではない、純金を触れている時は重さを感じなくなるのである。そのため通常よりも重たい金を片手で軽々振り回す事が出来るのだ。

「リン！」

グリッドの声が響いて、リンは顔を向ける。

【シャイニンググラス】

グリッドはリンに、正確にはその背後にいる兵士に光の槍を投げつける。

「うーおー！」

リンの後ろで男のうめき声が響き、リンが振り返ると兵士の下半身だけがそこに立っていた。

「油断するな」

グリッドは背中に二枚の光の翼を生えさせ、両手に光の剣を二刀流している。

「あー！…ありがとう…！」

リンの言葉にグリッドは素っ気なく首を左右に振る。

「気にするな…それよりリン、お前の持ち場はここじゃないだろう…」

グリッドに言われてリンはポンと手を叩く。

「グリッド！ゲイツさんの居場所知らない？」

グリッドは首を傾げて目を丸くする。

「一応は分かるが……」

そこでリンめがけて矢が飛んできてグリッドは光の翼でそれを打ち落とし、光の槍を矢放った兵士に投げて命を奪う。

「……ここから南に真つすぐだ！、敵が集中してるから気を付けろよ！」

グリッドはリンに放たれる攻撃を迎撃しながら敵の中に突撃していく。

「ありがとう！」

リンは言われた通りの道を走っていく。道にはグリッドの言った通り沢山の兵隊がいた、リンは武器を捨て逃げ惑う民衆に紛れて兵士を避けて向かう。途中、巨大な岩の巨人が兵士たちを纏めてたたきつぶしていたり、針のような水の刃が兵士たちをなますぎりにしている姿を確認するが、リンは走るのを止めなかった。そしてゲイツがいるであろう遺蹟にたどり着いた。入り口には数人の兵士たちが中に入ろうと警戒している。リンは再び地面から黄金の槌を引き摺りだすと、兵士たちの中に突撃全員纏めて左右にばらまくようにぶっ飛ばして遺蹟の中に突入した。

「はあ…っっ…」

遺蹟の中は死臭で溢れており、リンは余りの死臭に鼻を塞いで吐き気を催すが、無理やり飲み込んで先を急いだ。暫く走ると、遺蹟の奥にたどり着いた…。そこにはゲイツが一人、片刃の剣を片手に持つて立っていた、彼の周りには無数の兵士たちが死んで倒れている。

「ゲイツ…さん？」

リンは身体の毛穴が恐怖で開くのを感じた。

「リン…か…」

ゲイツは振り返らずに呟いた。

「…何故持ち場にいない？」

「嫌な予感が…したので…ゲイツさん！レヴァンティンは危険です！…！」

「…そうか…」

ゲイツは肩を揺らして笑う。

「そんな下らない事を言うために、持ち場を離れてわたしの所にきたのか！？」

ゲイツは初めて振り返った、その片目は黄金に輝き、リンを冷たい眼差しで睨む。

「…げ…ゲイツ…さ…」

リンは余りの恐怖に後退りしそうになる。

「ふ…命令無視はまだいいか…わたしはもっと許せない事があるんだ…」

ゲイツはゆっくりとリンに向かってくる。リンはゴクリと生唾を飲み込みゲイツを見上げる。

「げ…ゲイツさ…ひゃあっ！」

リンは後退りして躓き、地面に尻餅をつく。

「お前…なんで誰一人殺さないんだ…？」

ゲイツの目がリンをにらみその手に握っていた剣がいつの間にか茨の鞭に変わる。

「な!…なに言ってるの?ば…僕はちゃんと!…」

【シュン!…!】

ゲイツは音もなく鞭を振り、リンは咄嗟にその鞭を地に寝て避け、直ぐに起き上がる。

「な!…なにするの!?!」

「ち…まだ、同調しないか…」

焦ったリン等に目もくれずにゲイツはぶつぶつと呟いてリンを睨む。

「な…なに？」

「仕事の出来ない部下に罰を与えるのは当然だ…違うか？」

歩み寄るゲイツの背中からまがまがしい闇の歪みが立ち込め、リンは恐怖で後退りし。

「ほ…！…ぼく…！…ちゃんとして…！」

【ガシイ！！】

逃げようとしたリンの両手に何かが巻き付き左右に引っ張られるとリンの身体が動かなくなる。ゲイツはそのリンの背中から耳に口を寄せて囁く。

「なら…なんで逃げる？逃げようとする？」

リンの体から血の気が引いていく。そしてゲイツは背後からリンの上着を下にずりさげて上半身を裸に剥き

「ひ…やだ…ゲイツさん！お願いだよ…！！やっ…！！」

【ブジャアア！！】

まるで背中中の皮膚や肉を抉りぬかれるほどの痛みがリンの背中に響き幼い少女の鮮血が床に飛び散る。

「ひ…！！ぎゃあああああ…！！…！！」



【ブジャー!!ビシャアア!】

「ひぎいいいいっ!!!!!」

五回目の激痛が終わると、リンの体は地面に投げ出されて俯せに叩きつけられる。

「う…ぐ…う…」

激痛で身動きの取れないリンの刻まれて血塗れの背中をゲイツは容赦なく踏みつけてグリグリとなじる。

「がはあ!あがあああああっ!!!!!」

悲鳴を挙げるリンにゲイツは笑みを浮かべながら見下ろす。

「わたしだって辛いのだよ?リン…だが罪は罪だ…コレに懲りたら二度とわたしに歯向かうような真似はしないことだ…」

ゲイツはグリグリとなじりリンに気絶させない地獄のような痛みを味あわせながら履き捨てるようにいい。リンは声も出なくなりひっそりに頷く事でアピールした。

「わかったか?」

【グライー!!!!】

「はい!!!!はいいいっ!!!!!」

リンはびたびた地面でのた打ちそんなリンの背中から足を退けたゲイツはゴミをゴミ箱に蹴り入れるかのようにリンの身体を蹴飛ばして退けた。

「使えんゴミが…」

唾をはき捨てるように忌々しそうに吐いて去っていった。リンは何故か震えて思うように動かない身体でずりおろされた上着を何時ものように胸元に引き上げてから自分で作った血だまりに沈み、意識を失った……。

「ん…」

リンがまばゆい光に目を覚ますと、グリッドの心配そうな顔があった。

「リン…」

グリッドは目を覚ましたリンを見て安堵のため息を吐く。

「……は？」

リンは寝呆ける頭のままグリッドに問い掛ける。

「リンドブルグスの医務室だった場所だ…ガッツが血塗れのお前を抱いて慌てて走って来た時は肝を冷やした…」

グリッドはリンの額に手を当てて熱を確かめる。

「ガッツ…さん?…」

そしてリンは部屋にいるゲイツを見て、脳の覚醒と共にフラッシュバックする気絶前の激痛と恐怖を思い出す。

「い!! いやあああああつ!!!!!!」

リンはゲイツから逃れるようにベッドから転がり落ちる。

「リン!?!」

グリッドは慌てて立ち上がり小さなリンを抱き締める。

「…ふん…わたしは席を外した方がよさそうだな…」

ゲイツはそう言うと、一人病室から出ていき、一緒にいたシェリヤユリも首を傾げて外に出ていく。

「ひっ…ひっ…ひっ…」

目を恐怖に見開いたまま頭を抱えて丸くなるリンをグリッドは強く抱きながら聞く。

「落ち着け…リン、なにがあつた?…」

リンはグリッドを見上げて両目から大粒の涙を溢す。

「ん?…」

しかしグリッドにゲイツの事を言ったら、グリッドはゲイツを尊敬している。つまりゲイツ悪くいったらそれがゲイツに行く事になり、そうなれば自分はまた彼の罰を受けて痛い目に合わなければならなくなるかもしれない。

「大丈夫だ…リン、俺は味方だ…大丈夫だ…恐くない…」

知らないグリッドはリンをあやすように頭を撫でる。

「う…うん、ごめんなさい…大丈夫だよ…ちょっと…無理してただけ…」

リンは震えたままの左手を右腕を掴んで握り締めて歯を食い縛って普段のように笑顔を無理やり作って平然を装う。しかしグリッドは悲しそうな顔をしてから瞼を閉じてため息を吐く。

「そうか…出発は明日だから…確り休むんだぞ？」

グリッドはそう言いながら胸元からリンが大切にしている日記を取り出す。

「グリッド…」

「字は綺麗に書けよ…汚くて読めなかった」

それは読んでいない彼なりの冗談だとリンは理解し、日記を受け取って震える両手で抱き締める。

「うん…」

4月12日…僕達のリーダーは魔剣を手に入れて人が変わってしまいました…でも、リーダーの変化に誰も気付いていないのはなんでなんだろう…僕は…僕達は正しい生き方を選んだのでしょうか…ママ…僕は、怖くて仕方ありません…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3623n/>

---

【ソードハンターズ】

2011年10月9日18時23分発行